

滑稽
譚
洒落文庫

204
263

091746-000-8

特12-594

洒落文庫

洒々道人／編

M31

DBO-0220



乞御一讀

(前金) (爲替) (郵券) (照會) (直引) (書目) (學林)

本社への御注文は越て前金に奉願上
候。届局は「芝口郵便支局」宛に被下度
候。代用は往々途中にて紛失の虞あれば
御注意あれ。御注文書又は郵券封入の上御申越
被下度候。多額御注文の諸師へは精々直
引可致候。弊社發行の書目は二錢郵券封入申込
あれば進呈す。各宗大中小學林の教科書は持合候間
御注文奉願候。

緒言

夫れ對機説法は諸佛度生の洪範にして、和光同塵は列祖爲人の規
繩たり、熟ら觀ずる所、實理を重んずるの識士は千中其一を得難
く、空論に更けるの俗者は萬人皆な然らざる無し、此の故に高尚
なる立談は漸やく一部人士を利するに止まり、卑近なる庸説は却

つて廣く一般世人を導くこと多きが如し、彼の一休白隱師等は專
ら此の理を達觀して、大いに當時の社會人心を感化せし迹有るを
見る也。

今や内地雜居外教侵入の機變に際し、我が教界亦從來の迷夢を覺
破し、連りに起つて教法流布の方策を講じ、演説に説教に力めて
其實績を擧げんと期するものに似たり、此時に當つて各社亦競ふ
る警諭因縁學說詩歌古典等、苟くも採つて以て實地布教上の參考
の資に爲す可き幾多有益の新書を刊行する事、豈に又汗牛の比に
有らざるなり、其勞又決して少々に非ずとせむや、
密かに憾む其多數載する所、皆な是れ人心の理想上に訴へて、以



て感ず可く以て服す可き眞面目のもの已にして、其人心和樂の情に訴へて、以て抱腹す可く以て絶倒す可きの、變通的の材良に亡しきことや、予斯に見る所有りて、務めて滑稽落語頓智奇談等、苟くも人心和樂の情に投じ而も又暗々裡に徳教を補するの資と成る可き話譚數百種を集録して以て世に公にす、若し其れ江湖實地布教の任に當るの士にして、一本を備へ從來流布の眞面目なる材良と共に併せて是を活用し去らば巧みに人心固有の七情を動かし因て以て一般世俗を感化するとを得、乃至佛祖の洪業を助け自己の責任を全ふするを得るに庶幾からんか、而して其編中文字句讀の全きを得ざるが如きは、是れ從來予が不文の罪科に歸す、諸賢乞ふ是を容るせ焉

明治戊戌春到彼岸日

洒々道人 七るす

◎洒落文庫總目次

◎滑稽落語部 百拾八題

◎佛耶問答	一頁	◎詐欺の信心	一頁
◎天眼通	二頁	◎老母の落涙	三頁
◎乞食の年越	四頁	◎鼠の戀親會	四頁
◎本尊の拷問	五頁	◎長命な老婆	六頁
◎醫者と坊主	六頁	◎裁縫學	七頁
◎女房の早合點	七頁	◎貧坊神	八頁
◎勞して功なし	九頁	◎習慣は第二の天性	九頁
◎數學先生	九頁	◎三行り半	十頁
◎禁酒の廣告	十二頁	◎遊藝の第二等	十二頁
◎類は友を延く	十二頁	◎鼠と云ふ猫	十二頁
◎妙法く	十三頁	◎笥子の手耐	十四頁
◎名は實の寶	十四頁	◎鬼拂ひの歌	十五頁

○嫁の奇病	十六頁	○管見不同	十六頁
○轉回車	十七頁	○架空な望	十八頁
○人力馬車	十九頁	○人員淘汰	十九頁
○車夫の悪口	二十頁	○欲文字	二十頁
○腐肉	二十一頁	○見守り傘	二十一頁
○植木屋の口上	二十一頁	○鶯蛙問答	二十二頁
○正直な下女	二十三頁	○價の知れぬ品	二十三頁
○新案の禁酒	二十三頁	○東京の早り	二十四頁
○似たもの夫婦	二十四頁	○血止めの妙藥	二十六頁
○御經の講釋	二十六頁	○職と共に斃る	二十七頁
○牛を喫べる	二十七頁	○新聞記者の因果	二十八頁
○食客の揃ひ	二十八頁	○金と生命	二十九頁
○隠れたるより顯るゝは無し	二十九頁	○赤い河骨	三十頁
○力士の自慢	三十一頁	○欲は身を亡ぼす	三十一頁

○蛙の漫遊	三十二頁	○月日の早さ	三十二頁
○萬屋	三十三頁	○望遠鏡	三十四頁
○詩會	三十五頁	○八ツ目賣り	三十五頁
○天狗と御龜	三十五頁	○家の固り	三十六頁
○言葉の變遷	三十六頁	○無學の父	三十七頁
○跛足の言通け	三十七頁	○言思相違	三十八頁
○宿習難除	三十八頁	○盲人の提燈	三十九頁
○死の字嫌ひ	四十頁	○口惜し	四十頁
○守錢奴	四十一頁	○冠履轉倒	四十三頁
○智慧鏡	四十三頁	○鈴の取合ひ	四十四頁
○のどかなる	四十五頁	○野菜に肥料	四十五頁
○狼のはなし	四十六頁	○提燈に釣鐘	四十六頁
○妙な釜	四十六頁	○心から	四十七頁
○親子の轉倒	四十八頁	○節分	四十八頁

○路案内	四十九頁	○盧無僧と小僧との問答	四十九頁
○遺れ物	五十頁	○長し短し	五十頁
○豆づくし	五十二頁	○無言の問答	五十二頁
○親をかむ	五十三頁	○尾要らぬ	五十三頁
○朝寝坊と牽牛花の問答	五十三頁	○親と徳利	五十四頁
○一人の居眠り三人を鐘る	五十五頁	○安物買ひ	五十五頁
○情け漢の出相ひ	五十六頁	○浮世の苦	五十六頁
○釜盗人	五十七頁	○鶴に燗茶	五十七頁
○市中音楽隊	五十八頁	○健胃強壯	五十八頁
○小さき歌	五十九頁	○蛙の鳴聲	五十九頁
○無言の行者	六十頁	○飯の近路	六十頁
○狭ひは口より	六十一頁	○梅毒賣	六十一頁
○大欲小欲	六十二頁	○於七吉三	六十二頁
○團子の化物	六十三頁	○乃公を誰だと思ふ	六十四頁

○肉食と菜色	六十五頁	○祝ひ過るもいな物	六十六頁
○太屏樂	六十八頁	○蚤と鼠の競走	六十九頁
○豆腐上の相撲	六十九頁	○雙の問答	七十頁
○澤庵	七十頁	○川と皮	七十一頁
○雜犬馬	七十一頁	○手前勝手	七十一頁
○酒亂	七十二頁	○風の子	七十三頁
○金満家	七十三頁	○十念授與	七十三頁
○空論實物を失ふ	七十四頁	○離烟談	七十五頁
○醫者の内幕	七十六頁	○近水に限る	七十七頁
○錢欲しや	七十七頁	○我田引水	七十八頁
○井底の蛙	七十八頁	○變つた不幸	七十九頁
○文盲の尋物	七十九頁	○變の下駄買	八十頁
○守錢奴の會合	八十一頁		

○頼智即才の部 三拾二題

○孝子親を諫む	八十二頁	○暗夜の鳥	八十三頁
○軍人と醫師の決闘	八十三頁	○小欲大損	八十五頁
○唯識所變	八十五頁	○虎の子渡し	八十六頁
○持つ持たれつ	八十六頁	○猿肝を置忘る	八十七頁
○毒藥と變藥となる	八十八頁	○眼鏡屋へ賊	八十九頁
○頭の懸け替	九十頁	○失念	九十一頁
○金儲術	九十二頁	○紙幣私造	九十二頁
○占夢	九十二頁	○古書偽造	九十三頁
○藥價差引	九十三頁	○汝に出で、汝に歸る	九十四頁
○鼠算	九十五頁	○和尙の失敗	九十六頁
○物徂來	九十七頁	○奇絶の裁判	九十八頁
○教師の妙判	九十九頁	○練味暗裁判	百頁

○計らんとして却て謀らる	百二頁	○竊盜止の妙藥	百四頁
○池の方圓	百五頁	○巾着切りの頓才	百六頁
○物貰ひ	百八頁	○精進は夜	百九頁
○十方衆生	百九頁	○命取り三年坂	百九頁
○老人の智慧	百十頁		

○奇聞逸話部 三拾八題

○人頭の價致	百十七頁	○太田道灌歌道に志す	百十九頁
○法住法位	百二十頁	○心の鬼が身を賣る	百二十一頁
○金満家の秘傳	百二十二頁	○十二の子の字	百二十四頁
○神の勤務	百二十六頁	○煩惱の結果	百二十七頁
○黄金の獅子	百三十二頁	○來春の廣告	百三十五頁
○廣告の効能	百三十九頁	○新宅披露	百四十一頁
○一言賊を走らす	百四十二頁	○各國人の氣象	百四十三頁

- 善因善果 百四十四頁 ○忠勇なる兵卒 百四十六頁
- 大將と伍長 百四十七頁 ○自作自受 百四十八頁
- 澤庵和尚の訓歌 百四十九頁 ○枕草紙 百四十九頁
- 仁齋佛を拜す 百五十頁 ○土中の黄金 百五十頁
- 蜂の自殺 百五十一頁 ○耐忍の論 百五十二頁
- 夢の利子附 百五十三頁 ○肉柱 百五十四頁
- 綽號の三變 百五十五頁 ○モイボルク從僕を慰む 百五十六頁
- 木戸孕九淨瑠璃を稽古す 百五十七頁 ○製金術 百五十八頁
- 矢部駿河守奸商退治 百五十九頁 ○癡人大竹の料理 百六十頁
- 中村富十郎の節約 百六十一頁 ○米の出所 百六十二頁
- 婁師徳の教誨 百六十三頁 ○蜀山人五條の橋に題す 百六十四頁
- 八代將軍の鐵面皮 百六十四頁 ○天道善者に幸す 百六十五頁

○狂歌之部

○六十首 自百六十七頁至百七十五頁

○狂句之部

○六十句 自百七十六頁至百八十頁

○都々逸之部

○四十一句 自百八十一頁至百八十六頁

○應用例題 拾題

- 始終一貫して聴取す可きの辯 百八十七頁
- 聴衆の誼諫を防ぐ辯 百八十九頁
- 聴衆中兒童の誼諫せるを諭す辯 百九十一頁

- 睡眠を警醒するの辯 百九十二頁
- 生死無常を示すの辯 百九十三頁
- 學佛の要は實驗躬行に在るの辯 百九十五頁
- 唯識所變を示す辯 百九十六頁
- 精進不退を談ずる辯 百九十八頁
- 少欲知足を勸むる辯 百九十九頁
- 心外無別法を説くの辯 二百一頁

以上通計二百六拾餘題

滑稽落語

○佛耶問答

京都同志社の書生と真宗文學寮の學徒とが或日一堂に相遇ふて、耶「時に佛教では地獄極樂の説を爲すに彼れは愚俗を導くための方便虚説だらうね、」佛「馬鹿なことを云ひ玉ふな彼れは實際在るに相違無いことさ、」耶「若し實際有るのなら僕に見せ玉へ、」佛「サア此の洋刀を以て死んで行つて實見し玉へ君などは必ず地獄へ行けるは受合だよ、」耶「然し其れを若し無かつた時は何うする、」佛「其れこそ幸だから君の天父の所へ行玉へ、」

○詐欺の信心

女房が難産にて九死一生の有様を見るに見兼ねて俄かに起つて神棚に祭れる御稻荷神

持12
594

に燈明など供なへ一心に兩手を合はせ、「南無稻荷大明神様何卒御慈悲を以て女房を安産ならしめ玉へ其の交はり御禮として黄金の鳥居を建て奉納致し升」と云ふ音聲を聞き付け、女房は苦るしき聲を上げ、「若し〜貴良其の様なこと云ふて此の様な貧しき身代で何うして黄金所か木の鳥居も奉納出来すものかね、」夫は聲を低くめて、「馬鹿云はずと斯くして神様を欺まして居る間に早く産んで終まへ、」

○天眼通

頃しも六月の炎天に甲乙二人の哲學者生打連れて散歩し居る所へ向うより田舎風の娘が手に何やら風呂敷づゝみを携さへ裳引きからげ来るを見附け、甲「何んと君は爰て印度哲學に精通して居るさうだが佛教の所謂天眼通と云ふのを應用して、彼の女の持つて居る品物は何だか看破して見玉へ、」乙「好しく面白何の造作も無いよ、」と暫らく考へし末、「彼の風呂敷の中は重箱で其内には李が入れて在るよ、」甲「ム、成程眞四角だから重箱かは知らぬが、中が李とは驚いたね然らば其の数は何くら有るかね、」乙「左様な数は確かに六十四有るよ、」甲「だが見ぬ内は判然せぬから此處で彼の娘に

頼み込んで實地取調べに着手しやうか、」乙「其れが好い、」斯くて兩人は彼の娘に委細交渉の上包を借り受けて開き見れば果して重箱の中に李が入つて有りければ、甲「イヤ實に何うも驚いたね、だが然し数は何うだか調べて見やう、」とて算へて見るに是れ又丁度六十四個、甲「マア君は實に得通の仙人だね、然し何うして此の中の李だと云ふが知れたい、」乙「何も驚くに及ばないのさ、僕が最初此の娘の風朧を熟見するに、裳引きからげて白い股を其まゝ出して居たから其れでハ、ア此れは李（素股）だわいと悟つたのさ、」甲「然んなら其の数は、」乙「其れはね、ゆもじの端が風に吹れてハッパ〜と動いたからさ、」

○老母の落涙

未熟なる法師の高座に墜りて長々と理も分らぬことのみ説き立てるに、參詣の善男善女何れも退屈して、一人減り二人去りて遂に残らず歸り去りしに心附き、漸くに説法済して高産を降れば、傍らに一人の老母居残りて連りに涙を流し居るを見て、「御婆さんには感心な信心者だ、野禿の御法義が左程有難く聞かれたかな、」と言葉を掛れば老婆

は漸く涙を拂らい、「何も貴僧の説教が有難くて泣いたのでは有りません餘り下足の長談議で足に痺れが切れ立つに立たれず其れで涙が出たのです、」

○乞食の年越

年の大晦日と云ふに江戸八百餘町は東西奔走大混雜の其中に心安きは兩國橋下の乞食の夫婦、宵の程より最と氣樂なる寝物語り、「誠に世間と違がい私達の身の上は暮れに成らうと盆が来やうと何の心配も彼の世話も入らず氣樂な者だね、」と女房の言葉に亭主は鼻高め、「其れと云ふも皆んな誰れの御蔭だ、」

○鼠の懇親會

或る野鼠の所へ懇親を結ぶ爲めとて大勢の宅鼠の來訪しければ野鼠一家は大いに喜び心を盡くして響應しけれど、何分野鼠のことゝて人參午房芋大根如き物より外に珍らしき馳走とて有らざりければ、流石の宅鼠閉口して早々に辭し去りたり、やがて日を期し野鼠を請待し、兼ねてより延き集め置きたる山海魚鳥の珍味を出して馳走

しけるに野鼠等は生れて以來初めて此の珍味に舌打ち鳴らして腹太らし、速りに宅鼠の幸福を羨やみ居りける折しも有れ、兼ねての大敵たる大猫一頭其の傍に現はれ、物をも言わず矢庭に宅鼠の主人に飛び付き只た一口に咬み殺せば、其所に居合す野鼠共此の有様に肝を消し、后をも見ずして己が居宅へ歸り来て、再び宅鼠の幸福を羨まざ、一生其分に甘んぜしとぞなん

○本尊の拷問

山寺の小僧兼ねて師匠の造りて藏へ置ける甘酒をば、何卒して飲み度きものぞと思ひ居る中、一日師匠の檀用にとて外出したるを幸ひに密かに出して盗み飲みたる後、本尊なる金佛の口元へ彼の甘酒をベタ／＼塗り付けて置きたりし、程無く師匠歸り來り甘酒の減り居るを見て大に怒り、小僧を呼び附て、「己れの藏つて置いた大事の甘酒を盗み飲んだのは其方だろう、」と云はれて小僧は素知らぬ顔、「否私に存じませぬ本尊様へ行つて御聞きなさい、」とて兩人本堂に至り見るに不思議や金佛の口の邊りに甘酒の付き居る故、「ヤア悪くい本尊だ貴様か己れの甘酒を飲んだのは、」と手に持し錫杖

にて「打ち打てば金佛は、「クワン」と音する故是れ金佛は喰はんと云ふが何うしやう、「其んなら今度は釜うでにして見ましやう太い本尊だ。」とて大釜に入れ火を燃して煮立つれば熱湯にて「クタ〜」と云ふに小僧は得意顔「其れ御覽なさい今度は喰た喰たと云ひ升から、」

○長命な老婆

「御婆さんは何時遇つて見ても相變らず御若いが、御年は何歳に御成りです、」「ハイ私は七億（質置）婆々で御座り升、」

○醫者と坊主

去る村醫の所へ一人の男來りて、「御寺の方丈様から聞いて來ましたが何卒竹を一本賣つて下さい、」と云へば醫者は不審顔「醫者の家に何で竹などが有るものか大方間違ひだらう、」「其れでも和尚様が貴殿は菽醫者だと云ひ升した、」次ぎの日御醫者は和尚を訪いて、「時に愚老の親類中で田地の件に就いて他と諍ひに成つて居る所ですが貴僧の御盡力で何卒黑白を附けては下さるまいか、」和尚は迷惑顔に頭をかき、「貧道如き世樂人に其様な面倒なことが出来る者で有りませぬ、」でも世間では貴僧のことを田分け坊〜と云い升よ、」

○裁縫學

母親が娘に向ひ、「御前の不器用には誠に困るぬ一枚の衣服を何日も〜掛つても出來上らないから昨日御向ふの御花さんに頼んだら、半日で出來上つたよ、」「其れは御母さん當然さね、私が一生懸命三日掛つて針の穴を開けて置いたのでするもの、」

○女房の早合點

「女と云ふものは總べて口を利くには、しどやかに穩便に言はねば成らぬもので先達て私が東海道沼津の宿屋へ宿つた時、二階の窓から彼の富士山を見て、「流石日本一山だけ有つて随分高いことだ、」と云ふたら傍に居た下女が「なわに貴君わ、高くは看へ升けれど半分は雪で御座んすよ、」と云つたが何と感心なことでは無いか、」と貞主が

言葉を半ば聞いて、「へん其れしきのこと何の造作も無い、私だつて言いませうよ、」か
いる所へ遇々人の訪ひ來りて、「いや過般來沼津地方へ御出張中と御聞き申ましたるが暫
らく御會ひ申さぬ中に大分御肥へなされ升したぬ、」言ひも終らぬに女房は此所ぞと力
を入れ、「何アニ斯んなに肥へて見へ升けれど其實半分は垢で御座り升、」

○貧坊神

一人の貧坊者有りて來る年も來る年も、貧の病の最とつて今は朝夕の烟りも立ち
兼ねる程に、世には貧坊神と云ふが有りて其れに宿らるゝ者は一生浮む瀬無しと聞く
何卒我が身に付き添ひ居る貧坊神を追ひ除けんものと思ふ所へ、或る夜彼の貧坊神が
枕元に現はれて一首の歌をば詠むける、「酒は飲む仕事はきらひ朝寝好き心安さに定宿
にする、」男は驚きツ直ちに、「時々は他所へも行けよ貧坊神一生添ふとの約束はせぬ、」
と返歌しけるに貧坊神は亦もや、「今更らに切るの去ると云はんすとても斯うなるか
らは二世も三世も、」と詠みすて、其儘姿を藏くし去り斯くて一生其男と添ひ逢ひし
となん、」

○勞して功無し

店先きの火鉢に頼りて連りに居眠りせる小僧の有るを帳場より見附けし番頭座を揚げ
「是レ長松先きから見て居れば宵の内から白川夜船は何事だ少と氣を附ける、小僧の
居眠りは勞して功無しだ、(船推して航なし、)」

○習慣は第二の天性

人に一と癖、無くて七癖せどかにて或人の習癖とて他人の所持爲す物品に對し一々に
此れは何錢其れは何圓と價ひを附けるを好みけるを、友なる人が諫めて、「何うも習慣
とは云ひながら他に對し實に失敬に當ることだから、自今僕の忠告を容れて斷然改め
玉へ、」君ならばこそ面のあたり諫めて晚れたのだ有がたい、君の其一言は實に千金
の價ひが有る、」

○數學先生

「君向ふから来る御翁さんを知つて居るから、」知つて居るとも横丁の車夫よ、「何あに數學の先生だよ、」何故、「でも引たりかけたりが妙手だからさ、」

〇三行り半

諺にも嫁入り二十日とやらゆひて當座の中こそ互ひの氣兼ねに、夫婦の間も睦まじく、姑どのの中も親しきもの追々と月日の立つに連れて、互ひに我儘氣儘の増さり來て一家に波風起るとかや、或る家にて貰らいし嫁の三月四月と過る間に、例の姑どの中懇くなり、遂ひに暇を出すこととはなれり、時に女の云ひける様、「我が身今にして離縁となる上からは、未だ年若の何れ又他に再縁せねばならず、其時に彼是苦情の起らぬ様に、立派な離別のまるしをこそ願はしけれ、」と云ひ出づれば、亭主も聞いて最もなりとて、立つて臺所へ行きつ、火吹竹をば持ち來り、大黒柱に當て、ハツシと二つに打ち破つて、此れを女に渡して云ふ様、「サア望み通り別れの證しはこれなる一品家に歸りて親父に見すれば、委細は必ず合點せん、早々是れを持つて立去れよ、」と云ひて遂に暇を遣りにける、女は歸りて仔細を話し件の火吹竹を父に示せば、「ム、火吹

竹を二つに破つたのだから、是れは大かた夫婦の別れと云ふことだらう、然し書いたもので無ければ、後日の證據には成らぬから、」とて其由を先方へ使を以て申入るれば早速書き送りたる離縁の一冊、文面如何と開き見れば、中には五合升二つをぞ記るしたるのみ故、家内打ち集り種々考へ見れど、何の意味やら更らに分らず、依て再び人を以て其意味を尋づね、其上一段と詳細なる文をぞ望みしに、彼れは大きに笑らいて、「さては悟りの悪き人々よ、五合升二つ故一升の別れといふことなり今度は委しく認めたり、」と云ひつゝ使ひに渡したる一狀、持ち歸りて披見すれば、今度は一升ます一つ釜一つ犬一頭を書きあり、親父は是れを判じて、此れは一生かまわんと云ふことなり、是れにて好しとて藏め置き、間も無く他家へ嫁入の約束定り、愈々婚禮と云ふ日に元どの亭主訪ひ來りて、「貴殿の娘で私の女房なる此の女、聞けば今日は他家へ嫁入りさすとやら、如何なる次第か承りたし、」「イヤ貴殿からは已でに離縁と成つた其證據にはこれなる證文、一生かまわんと有るで御座らぬか、」「イヤ其れは貴殿の讀み違がいと云ふもの、犬と云ふものは總じてソソと鳴くときは口を開くが、私の書たのは口を閉ぢて居るから、是れば一生かまうと云ふことです、決して再縁はなり申さぬ

ぞい、」

○禁酒の廣告

酒好きの男、人々より連りに禁酒を進められ、承知せりとして筆取りつ、明日より禁酒と書し吾家の門口へ張り付けて、相變らず朝よりの大酒に、「君は禁酒したと云ふて無いか、」「ナアニ明日からだよ、」斯くて年中飲みつけ居りしとなん、」

○瘡瘡の第二等

天然痘に掛かり顔一面に蜂の巢だらけの男に向ひ、「世間に随分重い瘡瘡も有るが、君の如きは恐らく第一等だらうね、」「何あに是れでも僕なぞは第二等さ、」「何故、」「でも第一等の人皆な死んで了まつたからさ、」

○類は友を延く

卑やしき丁稚が密かに菓子盗み取り雪隠に行きて、連りに喰ひ居る所へ、中に人有

りとも知らずに、他の丁稚が俄かに戸を開けて此の様を見て、「やあ穢ない奴だな何うだ味まいか、」「味まいとも、」「では己れにも一ツ呉れろ、」

○鼠と云ふ猫

或る猫好きなる人遇ま一猫兒を得て、何卒して強よさうなる名を附け度きものぞと思ひ、先づ虎と云ふ名を附けたるが、扱て虎は如何に強くとも龍には如何で敵す可きとて、龍と改めけるが、龍も雲無きときは活潑の働らきも出来ぬもの故又雲と改む、雲も風のためには散々に吹き飛ばさるゝ憂あれば更らに風と名づく、風如何に烈しくとも堅固の壁もて防がんには通すること難しとて今度は壁と改めしが、如何に堅固の壁なりとて彼の鼠先生は、少しの用捨も無く穴を穿つて往來するは感心なりとて遂ひに鼠とこそは呼びけるとなん

○妙法

或る村の和尚さん常々懇親なせる家に行き酒酌み交はずこと度々なり、其度毎に必ず

「妙法く」と云ふて飲むを聞き、主人其道理を尋ねれば、「去ればなり餘り水臭き酒なれば、女少しく水を去れと云ふことなりと、」

○笥子の手討

去る武士家敷の中庭に、隣り屋敷の竹藪より根の張り來りて、笥子の出でければ、中間は主人の前に出で如何はせんと伺へば、「其れは以ての外の慮外者じや、早速と手討に致せ、然して其の皮を隣りへ持參して斯く申せ、貴殿の屋敷内の笥子が拙者の庭中に來り狼籍致す故、是非なく手討ちに致した左様御承知有たし、これなるは身の廻りの品故持參致した改めて御受取下されい、」と中間は早速笥子を掘り取りて一同にて喰ひ盡くし、偕て其皮を持ち行きて斯くと通ずれば、彼方は皮をば手に取り揚げて、「偕ても可愛やく、(皮否やく、)」

○名は實の賓

凡べて萬物其の名は實を表し居ること、例せば御茶を飲むから茶碗と云ひ、土で造つたから土瓶と云ひ、鐵で製したのが鐵瓶と云ふ様なもので、物知り顔して説く傍から口を出し、「然んなら銅で出來て居るのを何故に藥罐と云ふのです、」其れも亦道理の有ること、今こそ御湯を沸かすに成つたけれど、あれは元來戰爭の時に兜に用ひたものだ、先づ此れを倒しまに頭にかぶり其の手を隠にて支へ口は號令の聞こへる機耳に當て、傳話器となる、最も寝る時の邪魔にならぬ様一ツにして有るのだ、偕て其の蓋は口に咬わへて箭丸を防ぐのだ、すると其れ敵の矢が此の兜に當つて其音がヤカンヤカン

○鬼拂ひの歌

死に嫌ひの老人三人集まりて一人が先づ、「往生は願ひはせぬど是非なくば、八十八を過としての後、」と歌ひ出づれば、又一人が、「冥土から迎ひの鬼が來りなば、九十九までは留守と答へん、」と云ふに最後の老人、「留守と云へば度々使ひ來る可し、いつそ否やだど云ひ切つて遣れ、」

○嫁の奇病

嫁入りの當座は萬事に附けて遠慮氣兼するが習らいて、去る家の新嫁三度の食も氣兼して腹に十分喰へぬ故空腹にて耐へ難き折柄、幸ひ一日家内一同不在の間を見て、急ぎ臺所の米櫃より一と握りの米を取出し、口一パイ類張りし所へ俄かに外より亭主の歸り來ければ、大いに驚ろき如何はせんと顔を火の如くして居るのを亭主は見附けて不審に思ひ、如何かしたのか何所ぞ氣分にて悪しきにて無きやと云ひけれど、嫁は口中米の在ること故物言ふこと出來ず、増々顔を赤くして居る故、定めてこれは病氣と思ひ、急ぎ人を走らせ御醫者を請して診察を乞ひ、其中追々家内の人々歸り來たれど、嫁は愈々當惑して尙も口を開かぬ故、醫者は是れ定めし口中に腫物の生ぜしなる可しとて、やがて器械を以て無理に口をばコッ開くれば斯はそも如何に、バラバラと音して其所一面の米だらけ

○管見不同

鏡と云ふを知らぬ土地の人、遇ま都に出で、鏡を見附け、不思議さうに羞恥ぞき、俄かに大聲揚げて、ヤレ親父様か御なつかしやと鏡を取つて抱き附く故、店なる主人大に驚ろき、これ若し其れは店の賣物で御座り升、と云はれ賣物なら買はんとて、價を拂らいて國へ歸り、大事の寶の親父様の姿とて、二階の長持に秘し置きたり妻遇ま所用有りて長持を明け見れば、廿三四の女の居る故二階より飛んで下り、亭主の胸ぐらを捉らへて焼餅喧嘩の大さわぎ、所へ村の庵りの妙信尼來りて兩人をなだめ、兎に角其の女とやらは何所に居升と、二階に行きて鏡に向ひ、ヤ、氣の毒や御前方が喧嘩する故女中は尼入道に成られたわい、

○轉回車

車坂の邊りに客待ちして居た人力車夫、「若し返り車です御都合様まで御安く如何ですか、」と云ふ處へ一人の藝者らしき小意氣な女、「車屋さん駒形と三筋町で用を足して三味線堀まで往くのだが何くらだい、「何うやら直を決き走り出せしが、兎ある泥濘の邊りに來ると如何したはづみか、車を引操り返へし客の女は仰向け様になチャリと泥濘

の中へ溺れたるを、車夫は平氣で見向きもせずに行き過んとする跡を、巡査が見附て
 急ぎ呼び止め、「シャク／＼其方は怪しからん、彼のモンを轉がして置いて通ぐるチヤア
 ナアン早く上げる」と言はれ車夫は以ての外の顔をして、「私しが悪いんでは御座いま
 せぬ、あの女は藝者で人を乗せることばかりで、乗りつけぬいから當り前です、夫れ
 に私あ車引の身で藝者を揚げるなんて出来升せぬ、ましてころばした覺ひは有り升せ
 ん自分で好きで泥水の中へ墮落のです、其の上私は初めからして轉倒車だと断つて置
 たのです、」

○架空な望

或る十六七才なる少年が商法學にと志し、商業學校を卒業して其れより實地修業とし
 て商賣を初めんとて、國元より百圓程の資本取りよせ、一夜課業の下稽古中不圖様々
 の考に氣を取られての獨り言、今此所に有る資本で以て商業を初めると一ヶ月の中に
 は三百圓位に成る又二三ヶ月経てば千圓になる、此の割で段々と増して行けば四五年
 中には大丈夫五十萬位には成る、其時は妻女は何家の令嬢が好いか知らん、別荘は和風
 が好からうか洋風にしやうか、と頻りに考ふる程嬉くてたまらず、思はず椅子から躍
 り立てば、折悪しく頭上に在りし洋燈を頭に當て、打落し、望みの五十萬圓程の硝子
 碎片を得て資本の一百圓は之が爲めに焼け失せたりとぞ、

○人力馬車

客を乗せた人力車夫が一息氣張つて驅出す拍子にブツンと一發して、「屁エ御免屁エ御
 免エ、」車上の客は鼻をつまみ、「是れじやあ馬車へ乗ツた様だわい、」

○人員淘汰

或る町家に夫婦二人者有り外に手代兩人を遣ひて最と優福にくらし居たり、或時亭主
 女房に向ひ諺に云ふ入物と人は有次第と云ふから手代二人を減らしても、手前と己と
 で骨を折つたら大躰間に合ひ相なものだ、此節の不景氣に多分の月給を出して養ひ置
 くも無駄だから、とて女房が其れでも昨日や今日召抱た者でもなし親御の代から勤め
 て來たのを今更らに、暇を出すのも可愛相だと止むるも聞かず、店の爲めなら仕方が

無いと、遂ひに手代に暇を取らせしに、見世の用向き何一つ差支の無きを見て、成程有る時は左程には思はなかりしが斯うして見ればムダな人に長々飯を喰はせ置きたりと云ひ居る中、亭主又も思ふ様、此の様子では女房にも暇を遣つたとして己れ獨りでも事足るべしとて、無理に難癖付けて離縁して、己れ一人暮しとなりしが、格外行届かぬ事もなき故、此の調子では己が無くとも宜からうとて、遂ひに身投して死にたりとかや、

○車夫の悪口

人力車夫と云ふものは兎角口の悪きもので、非職官吏らしき客を乗せたる車夫、「腐御免」次に別品女を乗せた車夫、「權妻」色の黒い田舎者を乗せた車夫、「ハイ炭

○欲文字

「西洋人は何故皆んな業欲で金を溜たがるだらう、」其はつよ欲文字(横文)を學んで居るからと、

○腐れ肉

往來に家臺店を出して賣る煮込の牛肉屋が夜る店を終まつて家に歸り、オイ嫁々酒を一盃やり度から、何か肴の趣向を爲て呉んぬいな、と云へば、御前さん面倒だから、残つた牛で可遣なさいな、ペランメイあんな腐つた者が喰へるものから、

○兒守り傘

坊つちやんの御守りを爲るんですから、御新造さん蝙蝠傘を御買ひ遊ばして、あの雨天の日傘が有るじや無いか、其れでも御守りをするには日本のではいけませんよ何故、でも兒守傘と云へ升すものを、

○植木屋の口上

縁日の夜店の植木屋へ一人の御客が、此の梅の盆栽は何幾する、はい難有三十錢で、

随分價が好いなあ、へい根が善くないと附きませぬ、

○鶯 蛙 問 答

蛙「時に黄鳥君、君も僕も御互ひに貫之君に撰れて古今集の序にも遁入つて、歌よみの社中だが、君などは聲はよし兎角婦人に可愛がられる風だから、彼の貫之の娘などが、(勅なればいとも賢とし鶯の宿はと問はいいか)答へん)などと可愛がられ未の世迄も鶯宿梅と云ふ名を残した、又君の養などは婦人が洗ひ粉に用ゐるとは實に恐らゐ者だから、随分高く止まつて居ても能よ、」鶯「ソウ僕のことばかり言つて卑下したもので無いよ、君逆も中々捨てた身分の者じや無い、既でに井出の玉川の蛙は乾物の骸を錦の袋に入れて大切に扱はれ貴人にも珍重され、又小野の道風などに筆道の奥儀なぞ教授して、中々下に置けるもので無い、君などはいつそ學校へ出て習字の教師に成たら何うだ、」蛙「中々僕などは無學文盲だから駄目さ、君は菅公と同じことで梅を愛するが、アノ木は好文木として讀書に因があるから、是れまで囀て居た佛臭い法花經は廢して日本外史でも稽古始めたら如何です、僕などは俚言の井の内の蛙だからそんな

ことには一向頓着しないのが僕の家傳だ、」鶯「其れは又何故で御座る、」蛙「でも所謂そこが蛙の面へ水で御座る、」

○正直な下女

或る下女が主人の居間を掃除して、十錢銀貨をひろい取り之を主人の前に出せば、御前は正直者だから其まゝ取つて置け、其後間もなく金の指環を失ひければ、彼の下女を呼んで聞くと、ハイ旦那アレハ私が正直だから取つて置き升た

○價の知れぬ品

オイ次郎何處で其んな立派な時計を得たかい、知れたことよ店でさ、幾何したかい、知らないよ、自分で以て知らないとは、丁度其折店番が居なかつたからさ

○新案の禁酒

或る飲酒家が禁酒の誓を立て、十日程は好く守りしが何分耐へ兼ねて思ふ様、我れ初

め三年間の期限なれど、今若し其期を延ばして六年とせば夜だけ禁じて晝間飲みても誓を破るに有らぬなりとて、暫時かくして過ぎけるが、終には夜も飲み度く成りたれば、更らに其期を十二年として、晝夜共飲みつけしてなん、

○東京の早り

田舎者が一寸東京へ出て来て、一兩日滞在し國へ歸つては四里四方を見盡して來た如き大法螺に、村の者が、時に東京も此の頃は田舎と一つで大旱りだと云ふが眞どかさ、と問へば、ハアひどいともく神田や小石川、深川、八丁堀、なぞは疾うに乾揚つて草履で往來が出来るわい、

○似たもの夫婦

或る所に梅毒にて鼻の欠けたる男あり、獨身にて困る故何卒妻を迎へんとて連りに周旋を頼み置く所へ、世に破れ鍋に閉ぢ蓋どの俚言の如く、又其の近くには是れも瘡毒に

て、髪の毛の一本づゝならべても頭の地が透くと云ふ比丘尼娘有り、去る物好きなる老人、此者二人を夫婦に爲さば誠に似合つた縁なる可しとて、男の方へは病氣で少し髪の毛の薄き女なりと云へ、又女の方へは鼻の少し低き由を云ひ、十分仲人口を利きて承知をさせ、扱て貧乏人の婚禮に見逢ひの結納のと面倒なればとて、直く嫁入と極め、其日の夕方に女をつれて行かんと音信れたるに、花嫁はかもじを頭に乘せ大九箇に結び立居たり、老人是れを見て大層立派に髪が結ひた、落しては大變なりと、娶の手を引きそろ／＼と出掛たり、男は家にて考ふる様、世に花嫁とさへ云ふに其鼻のなきも如何と思ひ、蠟を以て付けはなを手製して高々として待ち居たり、やがて老人嫁の手を引き門口開きて入り來り、三々九度も零式にし、高砂や此の浦舟にと謡はんとせし時折しも冬のこととて、九尺二間の一間に火鉢を置く、殊には酒の温まりに、嫁殿の鼻は何時しか解けて、元どの洞穴を現すを見て、思はず吹き出し笑らう拍子に、嫁女のかつらは落ちて元山と成る、老人は仕損じたりと赤顔するを、嫁取りあへず、「三輪の山杉の木立ちとき／＼つれど、神(髪)のなきこそ淋しかりけると、」淋ずれば、嫁も去るもの聲に應じて、「よしの山木々の梢は春過ぎて、花(鼻)のなきこそ淋しかり

ける。」と返歌しければ、仲人の老人さてく、兩人共歌には達人なりとて、世の中にびんぼう人は多けれど、二人の中に鼻紙もなし」と詠み行末睦ましく添ひとげしとなん

○血止めの妙薬

或家の下婢が魚を料理せんとて、誤つて指を切りしに鮮血出で、止まらず、種々と血止薬を用ゐたれども功験が無き故、詮方なく近隣の醫師藪井竹庵の方へ行き、即座に血の止まる薬を下さいと頼だから、先生の云ふには其れは蛙と鰻を黒焼にして附けるときは、直ぐに止ると教へられ、早速右の二味を黒焼にして附けると、不思議や直ちに治りし故、何う云ふ理由かと聞いて見れば、先生口から口顔で、蛙に鰻は血が好く止まる、(竹に雀は品好く止まる)と云ひ升だ

○御經の講釋

一信者の話に、「頃日御寺で御經の講釋を聞いたが、中々面白いのさ、先づ如是我聞ときけば新聞社の探訪が思ひやられ、般若波羅密と云へば半天でどまかした婦人の腹に眼が付き、色即是空と云へば紺屋の物干が見揚げられ、空即是色と云へば裏木綿を賣買する太物屋が思出され、一切苦厄と聞く時は愧かしながら香々が生涯口のため借金して金主に厚き利子を拂ふことを舍利子と、大聖世尊が三千年の昔に於て御看ぬき遊ばされたかと思へば、覺へず涙がこぼれると、云ひしとか

○職と共に斃る

職と共にたほれるは随分難きことなれど、或る油断坂邊の人力車夫が無暗滅多に牛飲馬食を爲るので女房が、御前其んなに喰べるとコレラに成るよ、なわに此れで死ねば職と共に斃れるのだから己れの本望だ、と澄し込み居ると間もなく上げる下だすの大病に、矢庭に車の母衣に抱き付き一生懸命離さぬ故、何うしたわけと女房が尋ねに、何あに死なばホロ共だ

○牛を喫る

一人の貧しき者數日米の無きまゝ、薩摩芋を買ひ求め腹一パイ喰ひ込みて友人の家へ

行きけり、友人は彼れの貧乏なるを知り居る故、今日は何を喰ふて来たかと冷かせば彼れ言を虚飾りて牛肉を喫へて来たと云ふ、友人は更らに先め交際だ酒を一盃飲まないかと云へば、一月も飲まぬことゝて喜んで一升餘りも飲み干せば最前芋にて腹の満ち居し所故、計らず其場に嘔吐きて多くの芋の現はれしを見て、汝の食だ牛は腹の中で芋に化けたのかと嘲弄れば、彼れは平氣で、なぬに此の牛が乾と芋を食たのだらう、

○新聞記者の因果

新聞記者が死んで閻魔王の前に出ると大王は、其方は前生の業因で虱にして遣る、と裁判を言渡されたから、何う云ふ理由と伺へば、娑婆に居た時指の先きで散々人の事を書いたから、其れで今度は其人々に搔れるのだ、

○貪吝の揃ひ

或る吝嗇な親爺が、昔しの人梅を見て渴を止めたと云ふことも有るから、天井にづりて有る鹽魚を一目見て直ぐと水掛飯をかき込んで喰へと言ひ附け置くと、有る日二

郎が、「アレ爺や兄さんが一目餘計に見たよ、」と云ひ告げれば、「嘆其れは大變さぞ鹽からからうに、」

○金と生命

或る欲深き人に向ひ、「汝に金を千圓與るから己れに汝を打殺させないか、」と云へば當時考へ居しが忽ち首を上げ、「其の半分五百圓で好いから己れを半殺の目に合わせて置かないか、」

○隠れたるより顯たるは無し

或る寺の若和尚の所へ平素親しき村人來たり、遇ま押入の内に牛肉鍋の藏して有のをチラリと見附け、ヤレ切たりと内々喜び、其内酒席と成りしが、酒肴は御定まりの人參大根油揚げの活版摺り故、若し方丈様御前さんと私とは格外の御附會ですもの何も御藏しなさらずと好いでしやう、御酒の席へ御出しなさいな、と云はれ、何様貴公と愚僧とは方外の交りだ、見られたのが百年目だ、とて立つて奥へ入りしがやがて以

後何分御心安く願ひ升と引き連れ來たは、最前見附けた牛肉には有らで内陣に安置せ
る生辨天なりしとぞ

○赤い河骨

有名なる畫家文晁、盆栽の河骨を買來り机の上に置き、職れに繪筆の端を以て、花び
らを紅く塗りおきたるに、遇ま蜀山人が訪らい來りて雅談に時を移せしが、盆栽の河
骨を見て、こは珍らしき異種なりと頻りに讚めたいへ、近頃無心ながら一莖吾れに與
へ給へと一向に乞ひければ、文晁可笑さを忍び眞面目になりて、されば此花は海外よ
り渡來の珍品にて、最も愛玩する所なれども、外ならぬ貴殿のこと故是非に及ばずと
て、惜氣に一莖を剪り取つて蜀山に與へたり、蜀山大いに喜び厚く謝して歸途に就き
けるに、折しも五月雨のいたく降りそげば、右手に傘を持ち左手に彼の珍花を携さ
へ、漸やく私家に抵る頃ろ、怪しや彼の河骨は花の色悉く褪めはして、尋常一様の白
き花とはなりぬ、斯處に初めて繪具塗りのこと悟り、直ちに一首の歌を讀みて使を
以て贈りたり其歌に、「文晁がまつかな嘘と知つたなら、河骨折つて黄はざりしに、」

○力士の自慢

力士團子山に最負の御客が、親方昨日の土俵は何うだつたね、左様初め一番は私が負
け升たかばり後の勝負は先きが勝ち升たのさ、

○欲は身を亡ぼす

夏の樹の枝に蟬が止まつて連りに朝露を吸ひ居ると、其れを見附た一羽の雀が好き獲
者御座んなれど、覗らい定めて居ると、今度は鷹が是れを見て其雀を捕へんと爪を利
くして居る、すると一人の狩夫が其れを射たんと、鐵炮かまへて覗らいを構まへ居る
所、一頭の狐が後に廻りて腰なる辨當を殘らず喰ひ盡しけるとなん

○蛙の漫遊

京都に住める蛙が大坂見物を思ひ立ち、ビヨコ／＼出掛けて途中天目山の嶺まで來る
と、大坂なる蛙の是れも又京都漫遊を志ざし、丁度天目山にて出合ひ、ヤア是れは

西京の蛙御珍づらしい何處へ御出掛けです、誰かと思へば大坂の蛙殿か、拙者は大坂見物に参らうとて斯處まで来たところ然し貴殿は何地へ御越しです、拙者も又貴殿の住み玉ふ西京へ見物に出掛る所好い處で御目に掛つた、然し今此處で斯ふして見渡せば京大坂は目の下に見へるが、ワザ／＼此の先き参るは御互ひに大儀千萬故、此處で以て十分高見のけん物をして其まゝ歸らうでは御座らぬか、其れは至極宜い思付で御座る左らばとて、兩方クルリと身を轉じ首を延ばして看つめ居りしが、やがて又居直りて、扱て／＼大坂々々と云ふから如何なる結好な都かと思ひしに、吾が西京と寸分の違ひもなし、此所まで来るだけ無駄なりきと一人が云へば、吾れも又西京々々として有名な所故ワザ／＼是れまで来て見るに大坂と變つた所少しもなし、阿房らしきことなりとて、兩方共其れなり己が住居に歸りたり、是は蛙と云ふ者は總じて背上に目が附いて居るもの故、互ひに前に向き居れど其實背後のみに目を附け居て、皆てこそ斯く己が都のみを見つめ居たるなりけり、

○月日の早さ

御日様と御月様とが、話し合つて下界漫遊思ひ立ち、早速身支度して出掛る處へ、丁度やかましやの先生雷公が遣つて来て、己れも是非一所に連れて行つて呉れと云はれて、同じ天界の仲間故否なみも成らず迷惑ながら承知して、同道三人にて出掛けしが日月兩人道々密かに相談して、途中で卷いて遣らんと首肯き合ひ、其晩宿屋へ着いて臥戸に入りしが、雷公の軒が八釜敷で寝る事も出来ず、兼ての話は此の所なりと、日月急ぎ身支度して宿の亭主を呼び、勘定を聞くと御日様のが二十錢御月様の分六圓と云ふので、これは不都合同じ座敷で同じ食物、何うして勘定が違がうかと云へば、日に二十錢ならば月には六圓に成り升と云はれ、仕方なく不肖／＼に拂ひを渡して出立せり、雷公は晝過ぎに漸やく目を覺まし、連れの二人はと亭主に問へば、ハヤ今朝早く御立ちに成り升た、と聞いて雷公は吃驚し、さても月日の立つのは早い者だ、して貴客は何時御立ちで御坐り升、ム、己れは夕立にするもい

○萬

屋

萬古着大安賣所と書た大看板、其下に御好次第無者なきは手前の自慢と配るして有故

一人の意地悪る相なる男、ツカ／＼と還入つて来て番頭に向ひ、「御前さんの店では何んな物でも有るのでですか、」と尋ねると、「へい何んな物でも大味の品は揃つて居升、「そんなら紋付の法衣があるか、」御座いませぬ、「一八の蚊帳は何うですか、」其様な細長い蚊帳はありませぬ、「それでは三角の坐蒲團は、」聞くが初めて、「」編入の足袋は、「有り升せぬ、「拾の浴衣は、「御相悪く様、「差子の振袖は、「無い様ですな、「六つ身の小見着物は、「御坐り升んでした、「其れでは此の店頭のかんばんは偽りか、番頭平氣な顔で「其れだから無い者は無いと云ふのです、」

○望遠鏡

芝の愛宕山公園に望遠鏡を備へ附け此れを容れおく可き箱を作りて、有名なる蜀山人に其が頭字を乞ひければ、蜀山人は直ちに筆取りて、卯の一字を書し與へたり、其理由を尋ねれば十二支中卯より數へ見よと云ふに、卯辰巳午羊と指折り數へて見て、成程十目が子だ（望遠鏡だ）、

○詩會

嘗て某文人の宅に詩人の會を催す、會する人數名、詩酒清談或は和し或は次す、久しうして甲辭し去る、止まる者互ひに甲の作を非難す、乙又去つて後衆又乙を破す、丙辭し去る毎に、居る人皆な是れを笑ふ、遂ひに來客悉く散じ去るに及び、僕童傍に在り主人に問ふて曰く、今日の來會せる詩人皆な拙にして先生獨り妙なるかと、

○八ツ目賣り

或る八ツ目賣が路傍に小便を垂れると、警官が叱して、「此奴め」八ツ目賣り、「三錢五厘です、」「太い奴、」「太い方は四錢五厘ツ、です、」警官大いに怒り、「切つて遣るぞ、」「へい切り賣は御免です、」

○天狗と御龜め

天狗「御かめさん私の鼻は何と高いぢや有り升せぬか、」お龜「なわに妾しの頬が高か

○家の固め

或る人妻を娶らんと心掛け居る所へ、媒合せる人の有りて相方の談判とのひ、愈々三々九度の儀式も目出度終りて伏し戸に入り、扱て翌朝に至りて女の顔を好く／＼看れば意外にも片目のことに驚ろきて、早速一首の狂歌を詠み出でたり、

嫁(夜目)故にみめよき女と思ひしに

これは片目のはづかしきかな

女も左る者取取ず

みめよきは夫の爲にふためなり

女房は家のかためにあつた

と返歌なし其れよりは最と睦まじく榮へくらしたりとなん、

○言葉の變遷

日常用ゐ居る言葉にて、其意義の何たるやを解するに苦るしむものゝ多きが中に、昔聲の悪しき人が義太夫浄琉璃など語るを冷評して、味噌がくさると云ふは如何なることぞと究め見るに、凡そ義太夫浄琉璃等を語には先づ高坐を設け、御簾をぞ垂れなぞするを常とす、然るに其の藝の未熟にて御簾や床なぞの美に過ぐる故、ゆか、みす、が過ぎると云ふなり、然るに其れが一轉して、ぬかみそがすゆくになるとなれり、又すゆくになるとは腐廢の義故に遂ひに再轉して味噌がくさると云ふ様に成りしなりける

○無學の父

目に一丁字無き文盲の父親が或日、子供の本を取り倒まに開き居るを小供が見て、「御父さん夫は倒までありませぬか」と云へば父はすかさず、「御前に見せてるのだ、」

○跛足の言遁

或る跛足の人に遇ま友人が嘲かして、「君の片足は大分短かい様だ、」何あにさ僕は短かすことは無し一方が長がいのだ、」

○言思相違

或寺の近くに一人の老婆住み居りしが、常々信心深く見へて日日寺に参詣し佛前に向て合掌して、南無大慈大悲の阿彌陀さま何卒哀愍の手を垂れ給ひて、一日も早く安養淨土へ御引取被下、と云ふを常とせり、是を聞きたる一人の小僧或る日密かに壇上に藏れ居りて、婆々が來りて例の如く云ふて拜するを見て、善哉々々老婆の信心甚深なり、明日とも云はず今宵の中必ず淨土に引取り遣らん、と聲朗らかに告ぐるを聞き、老婆はちどろき身を退さり、此様な馬鹿正直な佛さんには常談も言へぬ、

○宿習難除

或る大の烟草好の男有り、遇ふ友人の招ぎに應じて参じける、扱て主人の云ふ様は、節格御招ぎ申たどて何の風勢も御座らぬが、兼ねて貴殿には三度の食を四度喫へてもこの大の烟草好きとの由故、今日は十分に其の烟草を御進め申さんとて御招ぎ申たることなれば何卒御遠慮なく召し上げられよと、やがて諸國の名産山々と取り出だし、先

づ一服御上り下さいと吸付け、これは御茶のかわりで御座るとて長崎烟草を進め、これは御茶菓子^かの代りでも薩摩國分を進め、今度は御酒のつもりでもシガレットを吸付け、其れ吸物の代り此は口取のかわり、今度は御飯今度は御汁と、葉巻紙巻ゴールメン天狗烟草にピンハット、あらゆる烟草を強ひ付けられ、流石の烟草好きも其の苦しさに閉口なし、早勿辭し去らんと氣をいたむれど、主人は中々聞き入れず尙様々の名を付けて進め居りしが、遇ま主人の便所に行きしを幸ひに、ひそかに立つて逃げ出せば、主人が後より烟管片手に追ひすがりて、若しあなた御土産を御持ち下さい、客は今や一生懸命ひた走りに走りて漸やくと己の屋に歸り得て、ヤレ〜是れで安心した先の一服すわうか

○盲人の提燈

一人の盲人あり夜中歩行するには必ず提燈を付け行くを常とす、或夜例の如く提燈つけて歩み居る所へ、矢庭に向ふより人のつき當りしかば、やい盲目に附當りやがつて貴様は明きめくらか、べらぼうめ此の通り已れも盲目だから提燈をつけて居るのだ、

否や已れも矢張つけて居る、斯く互ひに言ひ争ふて居る所へ巡査が来て、コレく其方は兩人とも提燈の火が消ひて居るじやないか

○死の字嫌ひ

御幣かつぎの一家あり家中申し合はせ、年中決して死の音を使ふことを禁物とせり、然し若し止むを得ざる時は、シの音に變ゆるにヨの音を以てせり、遇ま一夜十一時過ぐる頃其家の娘外より歸り來りしを母親が見て、御前何處へ行つて來たのだね、ハ、夜這(芝居)に行つて參り升た、

○口惜い

放蕩男が其罰にて梅毒を受け、治療の効目なく、遂ひに鼻柱を落しけり、細君是れを見て大いに悲み、私は兼々あなたの不品行を心配致して居升したが案の如く其様な見苦らしい御姿になりなすつて、誠に口惜う御坐り升、と口説き立つるに、放蕩者は、「御前も口惜しいだらうが已れは眞惜いわ、」

○守錢奴

或る所に一人の守錢奴あり、守錢奴のことゝて巨萬の富を重ね居けるが、一日其家に兼ねて信用せる人の來りて四五百圓の金を借りんことを乞ひけるに、何故にや貸し與へざりけり、其人歸りて友人に向ひ、此間自分爾々の金満家へ金を借りに行きしに、何故にや刎ねつけられたりと物語れば、其友人小頭を傾け、貴殿の如き着實の人に貸ぬ理由はないが、何か先方の氣に入らぬことがあつたに相違有るまい、何か先方の氣に觸るやうの事を仕はせなんだかど問ひ返せり、固より金を借りに行く位だから、成り丈先方の氣に入る様に心掛けたので、別に失策も仕なかつた様に思ふが、と云へつゝ稍や暫らく考ひ居りしが、頓がてはたと手を打ち、成程左様云へば先方の氣に觸れたと有るかも知れぬ、先方へ行つた時三四服の烟草を吸つたが、其烟草を吸ふて半ば灰に成らぬ内に毎も灰吹にたいて仕舞た所が、先方より凡そ烟草を吸ふには、始か中間か仕舞か、どの邊が最も旨いかと問ひ出した故、私は半までが一番旨いと思ひ升半からは後は雁首に灰の部分が多くなり、やに嗅くて吸へませぬと答へたり、是れ

が先方の氣に觸つて貸さなかつたのかも知れぬと云へば、友人斯くと聞くより、全く其れに違ひあるまい、烟草を半分吸ひさして棄てる様な不經濟な人では、兎ても望みがないと先方の心に思つたから貸さなかつたに違ひない、斯う云瑣細な事にまで善く氣を附けて行けば、全く貸ない事は無かるうと教へたり、斯くて其借主は大に悟る所あり、其後再び彼の金満家に赴きて節儉と吝嗇の如き畜財に關することのみを世間話とし、金を借り度しなど云ふことはおくびにも出さず、又烟草を吸ふたる吸殻は悉く之を火鉢の灰の中に埋めて消し過ぎ、卒に暇乞ひして立歸らんとする時に、懐中より一枚の反古紙を取り出だし、之を左の掌に上せ、先きに灰の中に埋め置きたる吹殻をば悉く堀り出して、此紙の中に包みて懐中せり、始終を見て居たる此家の主人は、其吸殻を何うなさると問出せり、此方は此所ぞと一生懸命の心を色にも出さず最も平氣に答ふる様、左ればなり過日參上の節、半ば吸ひさしの吸殻を灰吹の中に空しく棄つるの残念サ苦しサ、身の皮はがる程にて今一度役に立る所でしたたが、初めて御目に掛りて、餘りに吝嗇と見らるゝことが愧かしさに、空しく灰吹の中に棄てたりしも、今日は最早や惜しくて我慢が出来ず、實は箇様にして吾家に携さへ歸りて、灰になり

たる部分を善く振ひ落し、其餘れる所を解きほどきて、再び用ふる所存なりと、紙しやかに述べ立れば、流石の守銭奴の主人も、其用心の密なるに感心して、直ちに金子を貸し與へしとぞ、

○冠履轉倒

田舎者が東京見物に出て來て馬喰町の旅屋に着き、先づ足を洗ふて後ち顔を洗ふを見、下女が笑ひ出せば、何を笑ふのだ、ダツテ泥足洗つてから御顔を……、フウん其れでは風呂に入つた時に、頭から先きに入る人があるかい、

○智 慧 競

鯛と畑芋と茄子とが相會し、各自に智慧競べをすることを思ひ立ち、先最初に、鯛先生傍にある立木の枝にぶら下り、鯛「何うだ烟草の看板とは好く出来たらう、今度は芋が其木の小枝に一寸立ちて、芋「松ぼつくりとは好く見へるだらう、最後に茄子は木の梢まで上りけるが、如何はしけん、足すべらして、眞倒まに、下なる泥池の中へ

陥りければ、鯛と芋とは大に驚き、ヤア何うした、茄子は一寸と頭を浮べ、茄子びの
に漬よ、

○鈴の取合ひ

出家、武士、花賣、魚賣の四人連れ立ち行く中、路傍に黄金にて鑄たる鈴の落ち居た
るをば、先に來る出家拾ひ上げゝるに、他の三人何れも欲心起り、口々に吾れこそ最
初に見付しなれど、言ひ争ふを、件の出家是れを制して、各自に初め終りに、りん
云ふ字を付て、一首づゝの歌を作りて、一番上出來の者、此鈴を取る事とせば如何と
云へば、何れもソツ面白しと、同意して、第一番に、武士は腰の刀に手をかけて「り
ん」と腰に差したる、此のかたな、一ト揮りふれば、首は飛びりん」次に花屋は、
一枝の櫻を手にかざし「りん」と咲き揃ひたる、此のさくら、一風吹けば、花は散
りりん」次なる魚屋籠の中より、一申の乾魚を取出し「りん」と申にさしたる鹽さ
かた、一口食へば、舌がひりりん」最後に件の出家は、拾ひし鈴を懐中しつゝ「りん
と拾ひ上たる、此鈴をわら等に遣るは、赤んべろりん、

○のどかなる

「長閑なる霞ぞ、野邊のにはひかた」と云ふを、或人が讀みちがへて「喉が鳴る粕味噌
の、屁のにはい哉」と讀みけるとなん

○野菜に肥料

東京近在の、或る農家年々早々と瓜茄子の如き、野菜類を市に出して、多くの金を益
けるを、隣の人羨やみて、連りに其の培養の秘傳を乞ふに、何も別段面倒な事はな
只寒肥をさいすれば好い、と云ふを聞き、來年こそは、我も大金益せんものをして、
寒中に至り毎日毎夜畑に出で、大聲張り揚げ南無妙法蓮華經、觀自在菩薩と、連り
に寒聲出せども、春に及びて何の甲斐すら、有らざりければ、大に氣をいら立ちて、
又も秘傳を乞ひける故、其れなら今年の寒には、牛ごいを成されまし、と教ゆれば、
今度こそはと大に喜び、寒の來るを待ちて、畑に行き大聲にて、モウ〜「牛の聲」
モウ〜

○狼のはなし

甲「僕が昨夜晩く、山から歸て來ると突然、一頭の狼が現れ、飛び掛つたから僕はステツキを以て矢筈に、打殺して遣つたよ。」乙「平生憶病の君が珍らしぬね、若し敵み附いたら何うする。」甲「大丈夫咬み附かれないよ。」乙「何故で。」甲「でも齒無しだもの。」

○提燈に釣鐘

へい今日は提燈屋で御座い御注文の品が出来て参り升た、其れは御苦勞代は何程か、三十五錢頂きます、左うか是を遣るからと、一圓銀貨を出せば、難有う、と云ひつゝ、去らんとする故、ア、此れ釣を置て行かぬか、御釣は差上られ升せぬ、何して、昔から提燈に釣がねと(釣鐘)云ひ升すものを、

○妙な釜

古道具屋の店頭に、釜を倒しまに伏せ其上に蓋を上げ置きしと、田舎の者來て蓋を返して見て、やわ口がないな、と云へつゝ起し見て、オヤ底もないわ、

○心から

平生睦まじき夫婦ありて、共に佛信者にて有ければ、毎時も連れ立ちて、寺参りもし説教聽聞するを例とせり、一日例の如く其々に説法を聞て、歸りけるが、平生の睦しさに似ず兩人共に、何やら心に解け合はぬ事の、有る如くにてありけるが、頓がで女の方より口を開き、誠に男と云ふ者は、女を迷せる事の上手なる事、今日の御法談の歌にて増す思ひ當りたり、と言へば、男も燒氣となり、否なく女こそ人を迷す事の多きこと、今日の歌の通りなれ、とて互に言ひつゝのり、扱て其の歌は何と聞きしぞと、男が問へば、「とらからかへら迷はすとらなれ、とらにかへら心ゆるすな」と云へるなりと云へば、否な其は聞きちがいにて、正しくは「かへらからとら迷すかへらなれ、かへらにとら心ゆるすな」と云ひけるなれとて、水かけ論の末に然らば、明日打連立ちて御寺に参り、事の眞偽をたしかめんと、相談ままり、扱て翌日参

詣し住持に會ひて、仔細を話し歌の何れが、賊に候やと尋ねけるに、住持は大に打ち笑ひて、云ふ御身等兩人は何れも、聞きちがへなれ、吾が昨日詠みたる歌は「心から心迷す心なれ、心にとろ心ゆるすな」と云ひしなれと答へけるとなん、

○親子の轉倒

或る酒好きの父終日己が家に在りて、酒飲み居たる處へ、其の息子も他行して大に酒飲み歸りけるを見て、親「ヤイ手前は一鉢何したのだ、丸で九頭龍權現様の様に頭が三つにも四つにも見えるぢやないか、其の様な化けもの野郎には此の身代は、譲られぬわい、へん此の家のザア何んだ、ぶら／＼と丁度浮島の上に建た、地震神の本家見た様だ、誰が此んな化物屋敷を、相續するものか、と答へしとかや、

○節分

強慾なる悪婆命終して、閻王の前に引取り出され「何とこりや其方名は何と云ふ哉」ハイ御福と申升す、何卒極樂へ遣て下され、御慈悲で御座り升、閻「馬鹿を云へ手前な

ばが何して極樂どころか、無間地獄へ無期徒刑だ、然し前生少善根の功德に因り、一應極樂の外観なりと一寸見せて遣る難有心得ろ、とて獄卒をして極樂の門前へと、案内せしむ老婆は亦もや甘言もて、婆「若し赤鬼様何卒御慈悲で、閻魔様には内々で一寸私を背中へ上せて、塀の外から御門内をのぞかして遣て下さいましな」と鬼をば欺むき背に上るや否や、不意に塀の上へと飛上つて、後ろふり向き婆「鬼は外福は内」云ひつゝ内へと飛び込みけり、

○路案内

甲「君上野公園へは何う行かう」乙「彼の女の用で居る團扇の方に向へて行くのさ」甲「何故ね」乙「昔から路は公園の團扇に従ふ」(水は方圓の器に従ふ)と云ふからと、

○虚無僧と小僧との問答

虚「モシ此の御寺は何と云ふ寺號ですか」小「ハイ天性寺と申し升」虚「何だ天障子だと天が障子なら雨の降る日は如何する」小僧は矢庭に虚無僧の頭を打ちて小「其時

は斯してこもをはるのさ。」

○遺れもの

或る宿屋へ一人の旅人宿り多くの荷物を預けしるに、悠深き主人は何かして明る朝彼の荷物を忘れて行く様にとて、其夜の膳部に多くの茗香を馳走しけり、斯て明朝御客は案に相違して、預けし荷物を残らず受取り、宿料すら置かず立ち去らんとする故、大きに驚き主「若し御客様何卒宿料を御渡し下さいまし」客「オ、然うか昨夜澤山茗香を喰たから、つい物忘れをしたわい。」

○長し短かし

友人の葬より歸りて、女房に向ひ夫「何うも世間には感心な女が多ひ、今日友人の葬式に會たが、今や出棺と云ふ時に其の細君が、棺の傍へ来て「ながれど、思ふ會は短かくて、のべて甲斐なき賤つのもどいり」と一首の歌を、詠みつゝ己が髪をば根からスツツリ切り捨てたが、何とまあ感心では無いか、御前などもちと見習つてたしなんだが好い」と良人の言を耳に入れす女「へん其んなこと位妾だつて出来升よ、と云ひ返しかくて臥戸に入りて、頃しも夏のこととて、庭の上に夫の寝ねけるを見て女「サア妾にも歌が出来升たよ」夫「ム、其れは感心だ何と云ふのだ」女「長かれと思ふねござは、短かくて、いやな爺の脛のながさよ」と言ひつゝ夫の足をば蹴飛ばせしとなん、

○豆づくし

豆と云ふものなき國の人、吾が國に來りけるに、宿屋にて食事の際一々其の食物の名や、調理の法などを給仕の者に問ひて客「此の飯の中にある丸き物は何か」給仕「其れは小豆飯と申して豆で御座り升」客「此の椀の中に泥水の様な物のあるのは」給仕「其れは味噌汁とて豆を根として造りしもの」客「此の平椀の中の眞白なものは」給仕「其れは豆腐と申して元は豆で御座り升」客「此の皿のものは」給仕「其れはオカラとて矢張豆が元」客「此の坪の品は」給仕「其れは湯波と油揚で同じ元で御座んす」流石の異人も大きに怪み容易に信とせざりしとぞ、

○無言の問答

曾て無言の問答と云ふ事の流行しける時、或る信者が菩提所を訪けるに、折しも住持は不在にて、小僧弟子の出でければ、無言のままにて兩の拇指と人指しにて丸き輪を造り見せしに、小僧は直に兩手にて大きな輪を造り示す、信者は更らに五本の指を出せば小僧は兩の十本指を示す、彼れ三本の指を舉れば、小僧は人指にて目の下を押すに、信者は頭を下げて其まゝ出立りけるが、路にて和尚の歸るに逢ふ信「只今御留守の所へ上り、御弟子に無言の問答で大敗け致しました、誠に發明な御小僧ですな」和「左様か其れは面白かつたらう、然し如何云ふ問答かな」信「私が大圓鏡はと問へば、法界に偏ぬしと答へ又、五戒を持つかと問へば十戒を持つと答ひ、更らに三尊の彌陀はと問ふたら、眼下に有ると云れ升た、イヤハヤ誠に感心致し升した、かくて和尚は寺にと歸り和「小僧留守中誰が參たか」小「へい村の太郎吉が來て無言の問答をして負して遣りました」和「何う云う問答だ」小「先きで初め飾があるかと、云ひますから、寺に一パイあると答へました、すると又五つで何錢だと聞くから十錢だと云ひました、三錢にまけると云ふから、私は赤んべいと云つて遣りました、

○親をかむ

親不孝なる息子遇ま寺に參りて説法の折り「神ほどけ、拜まぬさきに親をかめ、親にまされる神ほどけなし」と云ふ歌を聞き矢庭に家に歸りて父親の手首に咬み付けば、親父は驚き父「ヤイ何馬鹿をするのだ」子「でも今日御寺へ行きましたら、神佛を咬まぬ先に、親を噛めど和尚さんが云たからさ、

○尾要らぬ

甲「女郎のことを何故、おゐらんと云ふのだらう」乙「其れはね狐は人をだますのに尾を以てすると云ふが、女郎は狐とちがつて、尾が無くとも上手だからさ、

○朝寐坊と牽牛花の問答

一人の朝寐好きの男有りけるが、生來牽牛花の咲けるを見たる事なかりければ、何卒

して一生の中に一度は見度きものぞと、思ひ立ち或時夜の中より、庭前に出て椅子に寄りて居寐りつゝ、夜明けを晩しと待ち居たりしが、やがて日光の出でんとせる頃ろほり、一輪の花バツチと音して開きければ、男は喜び、思はず音を立て「ヤア開いたわど云ふ聲と、もに花は俄に萎れつぼみければ「ヤア何故つぼんだのか」花「でも君が起て居たから、正午過ぎだと思つてよ、

○親と徳利

酒飲みにて平生親不孝の息子が或る晩大酒に酔て歸り來り遇ま寐て居た親父の頭を踏みて大に驚き子「これは何うも勿躰ない、罰の當ることを致しました、何卒御免下さい」と連りに打ちわふれば親父は扱ても平生不孝の子に似もやらず、感心の心掛に成れるよとて、大に喜び親「何も其んなに謝るには及ぶものか、是れから先は氣を付けよ」と云ふ聲聞きて息子は俄に聲怒らせ子「ヤイ死ぞこの親父の頭か己れは又、一升徳利だと思たのだ、

○一人の居眠り三人を錯る

田舎の農家にて或夜のこと花嫁爐邊にて明日食ふ麥を焚き居りしも日中の勞れにて眠氣を來し連りに白川夜船を遣り居り、傍には姑が細を糺り、良人は草鞋を造り居たりしが、互に是れを見知りながら、良人は親の前にて起しては婦も面目悪かりなんと氣を置き、姑も未だ新嫁の良人に知れては、氣の毒に思ひ兩方共、只横目に打見遣りつゝ、素知らぬ顔にて作事し居たり、やがて程經て嫁女は目を醒して見るに、此は如何に鍋の麥は煮上りて眞黒ろ焦げ、扱て又姑は嫁の居眠りに心脱かれし爲め糺りたる細は方邊より爐の火にて大半燃け失せ居たり、良人も矢張り其爲めに乳のなきわらじをぞ造りけるとなん、

○安物買ひ

細君が下女に向ひ「やすとん少と御氣を附けよ、御前を買物に遣ると、何時でも御錢を落して來るが如何故だい」女「其れは奥様當り前ですよ、昔しより安物買ひの錢失

ひと云ふじや有ませんか、

○情け漢の出相ひ

或る名高き懶惰漢一人道中しけるが日中に至り、空腹なれど首に掛けたる辨當の包を取り出すことの面倒なりと思ふ所へ、先方より是れも空腹氣に口を開きつゝ来る男のあるを見て「若しく私の首に掛けて有るのは辨當だが御前さん、此れを取り出して下さらぬか、然うすれば半分其禮に上げるから」と云へば相手大笑ひ「私が其様な働きが出来ぬ位なら、斯して口を開では歩かぬ、先ツきから笠の紐がゆるんだけれど、結び直すが面倒だから口を開いて、腮で支へて居るのだ、

○浮世の苦

或る數學家が計算して浮世の價ひは拾五圓だと云ふから、何故だと聞たら「酒が高價で四圓（酔へん）薪が高くて容易に二圓（煮ひん）米が高くて十分九圓（喰へん）合計拾五圓だらう、

○釜 盗 人

石川五右衛門の年忌で法事をするに付ては五右衛門の、敵ども云ふべき釜を澤山盗み出し、其で以て費用に充てようと盗人仲間で、評議決し偕て各大きな釜を盗み出して、手柄にせんとて、味噌屋豆腐屋など、皆其難に會ふこと多かりければ、或る夫婦暮しの豆腐屋近來、所々にて釜を盗まるゝこと流行するが、我家にても其用心肝要なりとて、夫より毎夜兩人釜の中に入りて打臥し是で大丈夫と安心し居るを、斯ども知らずして、盗み出し其儘運び去るを、夫婦は初めて目を醒し不計天上見て「やあ大變だ婢、釜は大丈夫だが家を盗まれたぞ、

○鶴 に 燭 臺

鶴を見し事なき國に、遇ま一羽の白き大鳥の來て、樹上に止りければ村人大勢打集り何鳥ならん様々に云ひ合へど、誰とて知る人無かりける、斯る所へ檀那寺の和尚様の來るを幸ひと、村人等「和尚様の鳥は何鳥と云ふのでせう、皆が集ても誰も知て

居る人は御座りませんが、方丈様には御分りませう」と云ふ間に老僧誓し考へつゝとさうさなわ或れでさ、燭臺をさへ噬わへて居れば鶴と云ふ鳥に違はないがさ、

○市中音楽隊

維新の變に際し俗人等己が本職の世に立兼ねるを見、別に商賣變をせん物と三人が打語らひ一人は村一人は駄一人は團扇を商なうこととなり次の日より、三人共品物を背にしなから、市中を賣り行く其様子「ヒ、ヒ、フウフウ、タドン、タドン」と依然元の職業を其儘にて、丁度市中音楽隊に相似たり、

○健胃強壯

甲「昔しの人々は、今日の吾々と違がい、非常に胃が強かつたものだぞ」乙「何うして甲」でも君大學や、論語を見玉へ、孔子岩食ふだの、孟子玉喰ふだの、あるじやなひか」乙「左様と吾が國の人でも、阿部の中麿などは、三笠の山に出でし月嚼むと云ふからぬ」

○小 さ き 歌

去る歌詠み三人打倚りて今日は、何でも小さき歌を詠み競らべせんとの相談と一のひ初の一人の詠める歌「蚤の子に鞍打かけて飛び騎て、芥子や菜種をト飛びにせん」と云ふを何の其れ等はまだ大きな中なりとて次なる人の詠めるには「芥子粒の中をめぐりて堂立て、室々あけて學問をせん」と云ひ扱て今度は御身の番よ、早々何なり詠まれよと連りに責められ、左らばとて硯引よせ「せめられて、微塵となりて立つ吾は芥子や、菜種を須彌山と見る」と詠み出で、最後の勝を得たりけるとなん、

○蛙の鳴き聲

今の淫賣婦昔しの夜鷹が或る宵に兼ねての情夫たる吉原某樓の妓夫と、密び合ひて睦まじし氣に語らう、傍はらの草影にて「ヨタカダ〜〜〜」と云ふは正しく、蛙の鳴聲男は聞きて、腹打立て「此の音生れ己れの女の悪口言ふとは悪きもの奴」と杖を片手に打ち殺せば、蛙は殺されながらも「ギウ」(妓夫)と云へば男は、急々立腹し、今

度は己れの悪口を云へやがる」とて又も他の蛙を殺さんとする所へ、見廻りの役人來り此の様を見て「コレ其方共は何者だ夜中、男女で何を爲て居るか、キリ／＼此所を立去れい」と云ひ、言れば、蛙は亦もや草葉の中にて、「あなた方御レキレキ／＼」

○無言の行者

三人の行者申合せての一七日間、無言の行をば修しにける其の六日目に致り、壇上の燭器打倒れたるを見て、一人が驚き思はず聲を立て「あれあぶない」と云へば乙なる僧聞きどがめて「何故聲を出すのだ」丙なる僧さも、得意氣に「オホ／＼黙て居るのは己れ一人だ」

○飯の近路

西諺にも時間は金だ、と云ふから何でも無駄の、時間と金を消さぬ様にとて、或人が道中正午頃になり、大便を催しければ路傍の小屋に入り、思ふ様こゝで、辨當をつかへば、時間はとゞける茶代は要らず、是こそ一舉兩得の策だわいとて、腰より辨當取り出しけるが、何うしたはづみか、計らず辨當取りはずし、ピツシヤリと下へ落ちけるに、男は手を打ち大笑ひ「ヤア是れは實に近かみちだわい」と（喰ふと出すと同時になる故、）

○殃ひは口より

是れを御寺へ持て行て、誠に少々のおチンボウですが、御歳暮のしるしに差上りますと云ふて御出でと言附られて、小僧は店を出でしが途中にて密に數へ見るに九ツあるを一ツを胡磨化して、寺へ行き「誠に少々のお年ボウですが御歳暮の端しにとて差出すを和尙は受取り、包を開き見て「是れは誠に見事な九年ボウだ」小僧は驚き扱ては顯れしかと思ひ、最前の一ツを袖より出し「ハイ其の一年ボウは此所に御座ります、

○梅毒賣り

田舎漢の八百屋の小僧、青物雜荷等を天秤に荷ひつゝ賣り行く様「親代々瘡かき／＼」
／＼「芋や、橙、笠、柿、」

○大欲小欲

夫婦二人家内の所へ遇ま、隣家より、御萩を七ツ贈り來りぬ、兼ねての下戸故、大喜びにて、各々三ツ、を喰ひけれど、残れる一ツは手ん手に喰ひ度けれど、左すれば平等ならぬ故、遂に相談の上何ツれにても、口をきし者は敗けとして、無言の行をせんとて扱て彼の一個の御萩を中に置き、兩人相向ひにて真夜中過ぎまで、見つめ居し、折しもあれ外面より一人の、賊伺ひ見て互ひに言も交さず、身動もせぬに、大方是れ盗人をどしの生人形ならんと思ひ、内に入りて簞子長持打開き、金銭衣類を手當り次第に、運び出せば女房は今や耐る兼ね「若し御前さん盗人ですよ」と云ふをも待たず亭主は矢庭に、御萩を口にして「盗人が來てもぼたもち己れのものだ、

○お七吉三

八百屋お七が吉三郎の色香に迷ひし未火刑にされて、死せしと聞きし吉三郎は、死なば相共にとて、遂に隅田川へと身を投げて、冥土へと訪ひ行きて、門口に至り「私は

吉三と云ふものですが、先達て火刑になりて、娑婆から引越して來たお七と云ふ女に逢して下さり」と云へば内より全身腫みたゞれて、見ぐるしき女一人出で來り「お七とは私のことですが、其の吉三と云ふ人は何處に御出で御さんすか」「ハイ私は其の吉三ですよ、然しお七と云ふ女は、娑婆に居た頃ろ誠に無類の別品で決して、御前さんの様な片輪者ではありませぬ」「ハイ其れがぬ火あぶりにされた爲め、斯んなに成つたのですよ、然し吉三と云ふ御方は娑婆で此上なき、好い男決して御前さんの様な其んなに怖しく肥へ太つて居ませんでしたよ」「私も御前のことを聞き二世も三世もと思ひ込み、遇田川へと身を投げた爲め斯る有様に成たのよ」「扱ては吉三か」「お七で有るか」「御懐つかしう御座んした」と云ひつゝ互に抱き附くに、不思議や其儘兩人消へ失せたり、何故だと云へば、是れ水と火との出合ひなりけれ、

○團子の化物

平生中の悪き姑と、嫁とありけるが、或る時姑寺参りせんと仕度の處へ、隣より團子を一皿贈られたれば、早く歸りて、味わん、左るにても不在の中に嫁に喰れては大變

と密に長持の中へと、押し藏し、「嫁が見たら蛙に化げよ、婆々が見たら團子に返れ」と云ひ置きて出で行きけり、先程より始終の様子を伺ひ知りたる、嫁女は後にて大喜び、藏し置きたる、團子を残らず、喰ひ盡したる後多くの蛙を生捕り來り、彼の包の中へ入れ藏め、素知ぬ顔して居たりけり、斯くとはしらぬ姑親早々寺より歸り來りて何より先きに長持開き包みをほどき見るに、斯は如何に多くの蛙飛び出で坐式中をばピヨコ〜〜飛び廻る故、姑は今更驚きつ「團子飛ぶなよ餡子が落ち、嫁ではないぞよ婆々だぞよ」とて連りに蛙を逐ひ廻せば、嫁は團子に腹膨らし密かに陰にて「腹好いよい〜〜」と柏子を取りしとなん

○乃公を誰だと思ふ

東海道のある停車場で瀛車が暫く停で居ると、上等客車の戸をわけて、中から一人の紳士が、退屈まされに降り來て、其處等を傲然と散歩して居た、車「もう發車しますから、何卒お上り下さい」と云つたが、紳士は聞えない風をして、尙煙草を吹かして居る車「もし貴公も出ますから早くお上り下さい」紳「喧しい奴だ、乃公を誰だと思ふ、乃公は〇〇大臣侯爵〇〇だぞ」と云ふと車掌は負けない氣に成て、〇「さうですか、そんなら私も申上げませう、私を誰だと思召す、私は此の瀛車の車掌です、と云つて唐突呼子を吹くと瀛留は答へて、「ヒュー、車輪は動き出して、輪ゴトン〜紳士は呆れて、クワの音も無い、」

○肉食と菜食

すべて肉食する動物の肉は他が喰へてまづく、之に反して菜食する動物の肉は喰へて結構です、博物學者先生眞面目になつて講釋すると思召す子供が反問して、鴨は肉食もするのでしやう、さうです、それで旨いのは何う云ふもんです、それが、それはさうです何、あれが肉食しなけりや、猪うまいのです、馬は草ばかり喰ふ餅にまづいのは、何うしたんでしやう、それも同じ様で、あれで肉食したら丸で喰へませんや、どうも先生は御口がうまい、其の御口のうまい所は矢張り菜食のせいですかね、席の事に伺ひますが、子を食ひ物にして旨がる親が世間に有りますが、大方其家も菜食なのでしやうな、菜食ですとも、證據が有ります、どう云ふ證據ですかね、食物にそれ

いば子は弱つて一時にしろ永久にしろ、青菜に鹽の顔色になる。是が菜食の兆候です。菜食と菜色と國音相通です。先生嘯き生徒呆れ、滿座寂然として水を打つ。

○祝ひすぐるもいな物

怪からず、物事に祝ふ者ありて、與三郎と云ふ仲間は大晦日の晩云ひ敷へけるは、今宵はつねより疾く宿に歸りやすみ明日は早々起きて來り、門をたけ、内より誰ぞやと問ふ時、福の神で候と答へよ、乃ち戸を開けて呼び入ると、懇ろに云ひ合ひて後、亭主は心に掛け、鶏の啼くと同じやうに起きて、門に待ちけり、案の如く戸をたけ、誰ぞと問ふいや與三郎と答ふる、無興さ中々ながら、門を開けてより、其許火を照し若水をくみ鈴をすゆれども、亭主顔のさま悪くて、更に物いはず、仲間不審に思ひ、熱々思案しめて、宵に教へし福の神を打忘れ漸やう酒を呑む頃に思ひ出し、仰天膳をあげ座敷を立ちさまに、さらば福の神で御座る、御暇申しまゐらすると申したとおる、女房の許に、使はるゝ下女の名を、福と云ふありき、大年の夕下女に向ひ其方宵から宿へ往きてやすみ、明日は疾く起き來り、門をたけと暇をやりぬ、夜も更け

過ぎて、五更におよべども來らず、されども門をたけく音せり、すはやと思ひ、誰ぞと云ふに返事なし、餘りこたいかねて福かやれと云ひければ、否や與三郎で御座る、何しに福だらう、福は宵から他所へいつたものをとて、つぶやきける、町人の物祝へするあり、大晦日に薪を買ひ、庭なる柵につませけるが、何んどやらん崩れさうなり亭主危き事に思ひ、下女に向ひて、若し五ヶ日の内にあれなる薪が崩れば、崩ると云ふな、薪がめでたうなると云へど教へけるが、果して元三のかんを祝ふ時、崩れかへり、下女、なう與三郎、薪が目出度ふなるはと呼べば、與三郎はしり來り、任せてをけ與三郎が居らう間は、何ともあれ目出度ふはとすまゐるぞ、人にすぐれて物祝ふ侍或宵の夢に、鳥が家の内へ、飛入つたると見たはとあらば、或人の候で、其れは目出度し鬼はそとへ、ふぐろはうちへと、申しならはして候程にと云へば、侍大喜悅し小袖を一重遣しけり、元三を祝ひ膳部とり集め、目出度など、いろ／＼贈へてすはりぬ、盃彼方此方どめぐる半、十許なる物領ふと坐を立ち、親の汁に残れる鯛の頭をば取りて、手飼ひの犬を呼び、これはト、の頭ぞ、くらへと云ふに、又七ツ八ツなる娘の走り行き、母のくいのこせる魚の骨を持出で、これはカ、の骨ぞくらへと云

公は時々酒の上で喧嘩を爲るではないか。」

○聾の問答

「若し一寸物を御尋ね申升が、此川には橋が無いから渡れませず、川越を致さうと思ひ升が、どの位深う御坐いましやう、何うぞ教へて下さい、私は聾で御坐んすから何卒手真似で、」と聞かれた男は此れ又聾故、何だか己れの顔を見て物を言ふ様だが、聞こへないで困ると手を耳に當て、「コンですよ。」「ハア左様ですか耳まであり升か、夫ではとても渡れませぬね。」

○澤庵

下婢が澤庵漬のこうくを指して大根と云ふを聞き、其家の内室が、是れは大根では無い澤庵と云ふのだよ、と教ゆるに翌日下女は問ふて曰く、御汁の味には澤庵を入れましやうか。

○川と皮

或る田舎漢が兎有る川岸の茶店に腰掛けつゝ、薩摩芋を皮共に喰ふを見て、茶屋の女が、あなた其れは皮をむいて喰ふのですよ、と云へば田舎漢これを聞き、ハアさうですかとて川を向ひてムシヤリく

○雞犬馬

鶏が大衆の雞を連れて遊ばして居ると、一疋の犬が来て矢庭に一羽の雞を咬はれ殺せば、親鳥は大いに悲しむを傍に見て居た馬が、何卒親鳥を慰めたと思ひ、平生彼れが其腹の下に雞をいだくを見て、是れに習ひ、己が腹にて又も數羽を押殺せり、

○手前勝手

或時虎吉熊三二人の大王、打連れて仕事に行く途中、一個の斧の落ちて居るのを、虎吉早くも見附けて拾ひ上げ、ヤア吾れは善い物を見附けたぞと云ふに、コウ虎公汝い

己れは善い物を見附たと云て貰ふめいぜ、斯うして二人で目を開いて行くからには、貴公の目に這入ると同時に己れの目にも這入たんだ、斯う云ふ譯だから己れ達は善い物を見附たと云ふて貰らはうぜと熊公の言葉に、虎公尙も承知せず違りに争つて居る所へ、背後から四五人の男追掛け來りて、ヤイ賊奴膽の太い奴だ、白晝に人の斧を盗んで何處へ持つて行くのだ、と兩人の身を捕巻けば虎吉大いに狼狽て、イヤ己れ達ちや馬鹿な目に逢つた、唯だ道路に落ちて居たのを拾つたのだ、と云ふに熊三郎も、オツト虎公や己れ達と云つて貰ふめいぜ唯だ己れと云つて貰はふ、後の事は初つから手前が見附けて拾つたんだ、己れは少とも知らぬのだと、如何様世の中は手前勝手手の多きものと云ふ可けれ、

○酒 亂

甲「君は昨宵大層酒に酔つて來て大亂暴を働らいたが何うだ覺があるだらうね」「乙」否ヤ一向に酒亂(知らん)よ

○風 の 子

何故に小供のことを風の子と云ふのだらう、と考ひて見れば、其のはずよ、元來マウツの間に出來たのだから、

○金 満 家

甲「貴殿は一寸の間に如何して左様に俄かに金満家に御成りですか」「乙」左様桑苗をよ、甲「イヤ何も喰はないでかぬ」「乙」然れば全く何も今は苦はないよ、

○十 念 授 與

「今日は御寺へ大勢人が行くが何かあるの、」「おれは人間壽命が僅か五十年では短かいからつて最う五十年生き延びる様に、坊様が御拜むのだ、」「ヘン坊主の拜んだ位で其んな長生が出来るものかい、」「其れでも昔ながら御十念(五十年)を授かると云ふよ、」

○空論實物を失ふ

或る旅人が夏の中の炎天に、遠方に行かんとて、驢馬を雇ふて之に騎し行きたり、やがて日中の頃になり、赫々たる太陽は頭上を照らし、其熱さ殆んど堪へ難し、依て近邊に涼しき木影やあると、彼方此方を見廻はせど一面の渺たる原野のこととして、物陰とては更らになし、如何は爲んど苦心の末、漸やく一計を案出し、騎り居る驢馬の蔭こそ屈強の息ひ處と、急に馬より降りて开が蔭に入り、中腰になりて休息すれば、馬引きも又氣が付き、私も一所にと旅客を押し除けんとするに、旅人は以ての外に立腹して、此の驢馬を今日一日借り切つたからは、何所から何所まで悉皆我がものなり、と言へば馬丁は、成程驢馬は雇はれ切りなるも其の蔭まで貸さぬなりと、互ひに言へ争そひ、果ては休息の目的をも打ち忘れて、原野の中の一騎撃ち、上になり下になり汗を流して争ふ中に、肝心要めの驢馬は、手綱放れて一目散に何地ともなく馳せ行きて、开が影と共に實跡までも消へ失せしとぞ、

○離 姻 談

年久しく一所に連れ添う夫婦者ありけるが、其が女房元來勤きものゝこととして、己が服装化粧等には少しも構はず、唯だく日毎く眞黒に成つて働き居るを、亭主は餘り見すばらしきことに思ひ、何時とはなしに秋風ぞ吹きて、何とかして機会を得て追出し度きものぞと思へど、生憎にも此の女元來心ろ柔順なる性質にて、少しも夫の意に逆はず、唯々諾々として従ひ居ることとして、好き機会もなかりしが、然りとて一度秋風立ちし上からは、朝な夕なに見れば見る程胸悪く、觸れば觸るゝ程癢の種、到頭耐へ兼ねて女房に向ひ、直接離別の談判を始むるに、尋常の女なりせば離姻談などは、中々應ず可くもあらぬことなれど、固より柔順なる女の事とて、實に案ずるより去るは易く、何の異議なく直ちに承諾せりき、偕て實家に歸らんとて、昔て幾歳か昔しに着て來りし絹布の衣装を取り出し、湯に入り髪結ひ、最と美しくも装ひて、化粧顔さいに、香やかにつくろいて、其風采も何と無く、優にやさしく柳の腰の細やかに、すらり／＼と立出るに、此の躰を見たる夫は全く生れ變りし女の様子に、遣は开

も如何にと驚るまのきれ、何卒して女房を返すことを残り吝しくなりしかども、今更ら其れども言ひ出で兼て、已むを得ず开が歸るに任しけるが、其實家に到る途中に、一條の大河あり因て夫は川岸まで見送り行き、逆てもい事にと彼方の岸まで漕ぎもて遣らんと、棹を取り上げ舟を漕ぎて彼岸に着きぬれば、女房は舟より上りさま「去來然らば随分どもに御機嫌能う」と其言葉とい何となく優美に聞こえし故、夫は今や急々堪り兼ね「是れや〜其處の旅の婦女よ、何とて船賃を置かぬにや船賃は金拾兩にて候ぞや」と云はれて女房は「其は余りに余所〜しき申條かな其方と私との間にて、何じに船賃の儀に及ぶ可きや」と左ればなり其事なり、其れ等は親しき夫婦の時の事、今は既に離烟したる上からは何處の馬骨が白波の、船賃取らで通さりやうか、若しも無錢で通り度くば、今は昔の無錢で通れる資格に返られよ」と云はれ此時女は一錢の貯ひさゝもなかりしがば、止むなく男の引く手に連れられて、復も再び夫婦となり、後遂に同穴の偕老を結びしとなん。

○醫者の内幕

「オイ〜 敷井君、大層御急ぎで何處へ、」「イヤ外でも無い今病家から呼びに来たから駈付る所だ、」「ハア左様か其れぢやあ其んなに急ぐに及ぶまい、先づ僕と二所に向ふの料理店へ上つて、一杯遣らうぢや無いか、」「イヤ飛んでもない其様なことで居る間に、病人が快く成つて仕舞ふは、金満家の善い病家である、一刻も早く駈け付けて、早く全快せぬ様に、是加減を爲なけりやならぬのだ、」

○近火に限る

「チヤ〜」と夜中時分に、鐘の聞ゆる故一人のあはて者が、夫れ火事だと矢庭に飛び起き、直ちに火の氣の見ゆる方へと馳せ行くこと半里ばかり、余りに急ぎてひた走りに走りしことゝ、今は息切れ足だるく一歩も進み難きに止むと得ず、兎ある路傍に腰を休めて、嗚呼火事は近くに限るわい。

○錢欲しや

夜十時過ぎに、急に小錢の入用なること出来しける故、店の小僧を起して兩替にとて

命じ遣れり、小僧は寐ぼけ半分に間違つて、隣家の車力屋の表の戸をトク／＼叩く、「どなた〜」、「銭が欲しいのだ、中なる家人腹立相に「盗人奴、己れの内でも銭は欲しいは、」

○我田引水

或る奥様が女婢を供に連れて、町へ出でしに向ふより來たりし男、此方の面を見て、「美麗だなあ、」と云ひつゝ行き過ぐれば奥様は下女を見返りつ、「此れ御鍋や今の男は何と云ふて往つたい、」下女は「ホ、／＼奥様御聞き遊ばせ、彼の方は妾のうわさをしに行きましたよ、」と

○井底の蛙

或る日乞食二人が話すには、甲「何んぞ己れ等は尻を拭ふには必ず鏡で以て拭ふのだが、全賸世間の金持なんぞは何で以て拭ふだらうか、」乙「手前其れを知らぬいのか、誰れらは皆な水引で以て尻を拭ふのた哩、」

○變つた不幸

或る寺の住持が檀越の某に向ひ、「不憫な娘の兒が有り升よ、兩親も兄弟も無くつて、夫れに世界に誰一人世話の致し手もない誠に氣の毒な見じや、誰れか此兒を引取つて世話して呉れる人は有るまいかな、」と云へば町内にも金満家との名のある男は、「へい左様か私などは兎ても力が及びませんな、」其れに其の兒は誠に綺麗で愛らしう御坐んすよ、」「へい其れは／＼然し何うも致方が無いね、」其れにまゝ親の遺言で遺産金が五萬圓付いて居升とさ、」「エ、何んですと遺産金が五萬圓、夫れ程不幸せの兒なら誠に不憫な氣の毒の事ですから、私が引取つて世話を爲てやりまじやうよ、」

○文盲の尋物

或處に平林と云ふ性の人住みけるが、其が許へ遠方より書翰を托して事づけするに、生憎や其の使の人一文不通の無學文盲にて、封皮の宛名が何と讀むやら更らに分らず、殊に性來の健忘性の事とて、聞きし苗字も忘れ果てたり、他人に聞かば解るなら

んと思ひて、折柄通行の人を呼び止め、彼の封皮を出して尋ると、生憎其人も半盲の事とて、之をたいらりんと讀んで遣るに、使ひの者小首を傾け、何うも左う云ふ苗字ではなかりし様なりとて、又一人を捕らいて見すれば、是れ又同じ半盲先生、ひらりんと讀み聞かせり、其れも違ふとて又々別人に見すれば、今度は一段しを掛けて平林を分析して、一八十木木とこそ讀みにける、使の者大いに惑ひ三ツの内、何れか一つは當るならんと、三枚の紙に記るし貰ひて、之を笹の先に結び付け、たいらりんかひらりんか、一八千の木々かと繰り返しの怒鳴り歩き、漸やく尋ね當てにけるとな

○聾の下駄買

一人の老人下駄屋の店頭に来り、下駄を買はんとて番頭に向ひ、「此の下駄の齒は何の木か、」「コヘイ樗です、」「何の木だい、」「けやきと云ふ木です、」「何の木ですと、」番頭は初めて其老人の聾なることを察し、因て髪の毛一本を抜き取り、火に焼いて示せば、老人微笑して、「フ、ンけやきか、然して亦蓋は何の木か、」今度は番頭己が頬を膨らして之を指し、以て朴の木なることを通ず、老人點頭つ、「フ、ン抽子の木か、」「ペランメイ、此の老義翁が、己れの痘痕を見やがつてさ、」

○守銭奴の會合

一客翁あり、隣村の守銭奴と好し、一夜他を訪ふて二客奴互ひに喜び、相共に蓄財の事を談ず、夜既でに閑なるに及び、守銭奴當に辭し去らんとす、客翁燧石を出して、送りつゝカチ／＼と火を打出して曰く、履物は見へたるや、守銭奴謝して曰く、止みぬ／＼夜中の路は履物を要せずと、洗足にて去る、客翁歎じて曰く、嗚呼吾が客たる及ばざること甚だ遠しと、



頓智郎才

○孝子親を諫む

昔し一人の不孝者有りて、其父親の年老ひて萬事世話の焼けるを面倒がりて、山奥へ捨てん物として、己れの子に言附て籠を作らしめ兩人にて是れを昇き行かんとす、然るに其見け父に似氣無き孝心深き善人なりし故、親父の非行を悲しみ種々言を盡して諫めけれども、不孝なる親父は頑として聞入無きまゝ、止む事を得ず力なく、籠を昇きつゝ、祖父を負ふて山奥へと分入りたり、やがて父は籠を下し老ひたる親を捨て置き、其まゝ歸り去らんとせり、然るに其子は彼の空籠をば再び昇ひて行ふとする故、其様なものに最早や要用は無き故其まゝに捨て、歸る可しと云へば、否などよ父上がやがて年老ひ玉ひなば又も捨て參らすの時に入要なれば持ち歸るになんと云ふを聞き、さすがの不孝なる父も忽ち因果の道理を悟り、從來の不心得を後悔して老父の前に手を附きて不孝の大罪を打ち拜まり再び請じて籠に乗せて連れ歸へり一生孝養を盡しけることなん

○暗夜の鳥

一休禪師雲遊の因み遇ま一信者の家に拜宿せられたり、明る朝主人は硯と紙とを持ち來りて扱て言ふ様、吾が家の例として御宿申し上つる御僧方には必ず一枚の書を所置するを規則とせり、何なりと一と筆揮毫願ひ度とのことに、一休直ちに筆取り上げ、紙全面黒々と塗り終りて、いざ出來たり藏り玉へとの言に、主人は大に驚きて、全幹是は何の圖で御座り升、其れは禪家の暗の夜の鳴かぬ鳥の圖だわい

○軍人と醫師の決闘

獨逸伯林府に於て一軍人と醫者との間に萬難を生じ、遂に軍人の方より決闘を申込たり、醫者は直ちに承諾し日を定め場處を撰んで、やがて其所にて會合したり、軍人は短銃片手にいざ放たんと待ち構へ居ると、醫師はツカ／＼と傍に進み行き、紙に包

める二個の丸薬を取り出して扱て云ふ様、貴殿は元來軍人の事とて銃剣等には巧みなる可けれど僕は醫師の身分故從來かゝる兇器は手に持ちし事だになし、左れば今兇器を以て決闘せんは不公平の至りにて御身も又卑劣のそしりを免れざる可し、今吾れに最も公平無私の方法あり即ち是れに有る丸薬中、一個は毒薬にして服する時は三日間には必ず絶命せん、又一個は無毒にて服用せば却つて健胃強壯と爲る者なり、依つて今これを兩人にて一個ツ、を服すること、せば如何にぞやとの言に、軍人も實にもと理に服して同意を表し、やがて共に一丸を服し其まゝ東西に分れたり、其後數日を過ぐるも軍人の身に異状無き故大いに安堵し、念の爲め様子を探らんとて醫師を訪ひ見るに彼れ又何の變りもなく平氣にて應接して扱て言ふ様、先日の丸薬は何れも毒薬には非ずして共に却つて健康を増すべき良薬たりしなり、然る理由はわづか一時の争ひの爲め互ひに生命を賭するの愚なるを悟りし故、扱ては方便を以てかくせしなりとのことに、軍人も今更深く感心して從來の事を打すて、其後は互ひに親交を結びけると云ふ

○小欲大損

或る商家の店先きに盗人入りて、帳場の錢箱を引さらいて通出すを店番の小僧見附け一生懸命に追ひ行けば盗人は走りながら箱の中より一握みの錢を取出し小僧目掛けて打ち付ければ錢は其所一面に散亂せり、小僧は得たりと喜びツ、落ち散る銅貨を拾ふ中、盗は錢箱と共に雲をかすみと遁げ失せける、

○唯識所變

去る所に一老翁あり兩人の子を持ちける、長男は雪駄屋を營み次男は雨傘屋を開き居たり、然るに此翁年老ひ心痴にして雨降るの日は、ア、サン長吉が店が閑暇で困るだらうと悲しみ、晴天なれば次郎がサン賣れぬで困るだらうと心配するを、或る人が敷べて、御翁さん御前明日から天氣だつたら長吉の方を思ひ又雨が降つた日は次郎の事を考へて御覽、との言葉に従ひ試みしに成程其後は毎日最と心安くなりしとぞ

○虎の兒渡

虎が兒を三匹産みたるに、中に一匹意地悪くして他の兄弟を害せんとする故、親は心配にて暫くも目を放つことなかりける、或る時此の三四の兒を引き連れて兎有る川を渡らんとせしが、其兒等は未だ自ら渡ること能はぬ故是非共一匹ゾ、咬へて渡さねばならず、然るに何れより先きに連れ行くも其の留守の間に彼の悪しき子が他を害すの恐れある故如何は爲んど考へ居りしが、頓がて先づ彼の悪き子を咬へて先きに渡し立歸りて他の一兒を連れ行き其れと引替へに又彼の悪兒を連れ販り、又一兒を咬へ行き、最後に彼の悪虎を渡したりと云ふ

○持つ持たれつ

或る木賃宿に三人の片輪者宿り合はせけるに、夜半の頃俄かに近火の起るありて多くの人々皆な疾く逃げ去りて最後に彼の三人取り残されしが、やがて盲目が覺を負ひ聾者が先きに立ちて盲者の手を引き聾者の指す方へと逃れ去りしと云ふ、嗚呼人各々長あり短あり相合し相和して身修まり家齊ひ國治まること例して知れ

○猿肝を置き遺る

水中を己が住家とする狸々が妻の難病にて苦しむを見、山に住める猿の生肝を服ますれば全快すると云ふことを聞き、何卒して此れを得度きものと思ひ、海岸へ浮み出で、樹の枝に飛び遊び居る猿に向ひ、何と猿公貴殿は龍宮を觀たことが御坐るかな、否や未だ往たことは御坐らぬ、然らば拙者が是れより案内致す故御一所に御出でなさるか、其れは御深切様賊に難有う早速御案内願上、と云ふに狸々べたりと内心喜び、己が背上に負ひ、海中に入り、吾が屋近くなれるところ狸々は背上の猿に打ち向ひ、實は猿殿貴公を斯所まで連れて來たは、龍宮見物とは眞赤な偽はり實の魔拙者の女房が大病にて、これを治する爲め貴殿の生肝を服ません爲め、此所まで欺き連れ來しなり、今となつてはせん方なかる可し潔よく生肝を與へられよ、猿は此れを聞き大口開いて打ち笑ひ、扱て、早く左様に言い玉ひなば一所に持參す可かりしものを、さうとは知らずつひ樹の上に置き忘れたり、左らば是より共に立もどりて取り來らんと

て、再び海岸へ浮き出づれば猿は矢庭に樹上に飛び昇りて、イヤ狸々殿先刻貴公の言葉聞き意外の驚きに肝玉が潰れて無くなり升たわい、

○毒薬一變薬となる

或る地方に悪き中なる嫁と姑とありしが、一日嫁女怒りに耐へ難く、毒殺せんと意を決し、密かに村醫を訪ひ厚き賄賂を贈りて、一服の毒薬を所望せしに、醫者は聞き大いに驚きしも、左有らぬ跡にて快よく承諾爲し、やがて一封の散薬を興へ且つこれに致へて言ふ様、若し一思ひにて死す可き毒を服せしめば後に忽ち發覺の恐れ有り依て今は漸々に効目を顯す毒を興ふる故、時々此れを餅團子などの内へ和して興ふ可し且つ又毒死するまでは成る可く我慢して姑の意に従がひ勤めて其氣元を取る可し、此の毒を服む人若し腹立つ時は忽ち効能の消ゆるなりと言ひ聞かして歸したり、嫁は喜び吾家に歸り、其れより毎日萬事に附けて成可く姑の氣を損せぬ様、唯々時々其命に従ひ且つ又時々姑の好む餅團子などを進むる故、魚心あれば水心とやらにて、姑は近頃嫁の様子の全く一變せるを見て、扱ては心根の改まりしかと心よろこび、是れ又

従來の如く萬事口やかましく言ひ罵しることを止め、嫁の氣に入る様にと仕向けゝる故、一月二月と過る中嫁も心底より後悔して、早速彼の醫者を探つね従來の吾身の罪を謝して、何卒彼の毒を消す可き薬を更らに給はれと云ひ出るに、醫者は筆を打つて大いに喜び、好くも改心しつるものかな、吾れ先日興へしは彼れ毒藥にあらざして只の白砂糖なりし故心安かれ、尙此上共に随分心を附けて孝養を盡されよと懇々訓諭しけるとなん、實に有益なる頓智とこそは言ふ可けれ、

○眼鏡屋へ賊

一軒の眼鏡屋で或晩、店に寐て居た小僧が夜中過ぎに不都目を覺して見ると、戸外に二三人の盜賊が居て、戸の節穴から連りに内の様子を覗き居る様子故、小僧は矢庭に飛び起きて、入、目眼鏡と云ふて一個の物が八箇に成つて見へる目鏡を取り、ソツト彼の戸の節穴に當てがい己れは帳場にヤンと座つて居ると、外より盜人覗き見て、ヤア此の家では八人の番頭が不臥番を爲て居るはと云ふを聞き、他の一賊が何れ己れに見せると云ふ、其内小僧は又別の眼鏡と置き更へて、大手廣げてツツ立ち居ると、

何かに八人など居無いが、奈良の大佛程も有る大入道が一人立つて居る、一人が是れを聞いて、へう棒め其様な馬鹿氣たことがある者が己れに見せろい、内なる小僧今度は遠眼鏡を倒まにして差し附くれば、ヤア大入道などは居ぬいが此店の奥行は三里程も有る坐敷まで踏み込むまでにや夜が明けてしまふ駄目だく、

○頭の懸け替

高きじきで芝居見物して居る老人、誤まつて煙草の火を落して、土間に居たる書生の袴を焼き、厚く粗忽を謝したるに、書生はなかに宜ろしう御坐り升、こんな袴は宅にいくらも御坐り升からと云へば、人智な其言をほめたり、傍へに一少年聞き居て思ふ様、此様な事ではめられるなら、吾れも一ツ誰にかほめられ度ものなり、斯くてあちこち火の落ち相な所へ行き、漸やく煙草の火を落されしが、袴には落ちずして頭の上におちたり、少年熱くてたまらぬと、我慢して其焼くに委かせ居るに、傍への人を見付けて、君は何故火を拂はぬのかと云へば、少年は平氣で、なかに宜ろしう御坐り升こんな頭は宅に行けば何個もあり升、

○失

念

田舎者らしき老爺、旅店を叩き、「今日の日暮れ方に私の様な着物を着た私の様な人で、丁度私の様な聲の人が止宿りませんか」と馬喰町の宿屋四五軒を聞いて歩行たが薩張り心當りが無い、漸やく六軒目の家で主人が出て居て、「へい成程貴殿様のやうな丸で南瓜二ツと云ふ程に好く似て居た人が御止まりでしたが、先刻用足しに出ると仰つしやので未だに御飯りが御坐いませぬ、御用なら坐敷へ御上りなすつて御待ちなさい、もう御歸りで御坐ましやう、」ヤレ、實は尋ねる人は私じやが御前の家を見忘れて四五軒も斯うして聞いて歩行いた、

○金 儲 術

或る欲深き者あり、日夜金儲けの方法を考へ遇ふ人毎に必ず良法を問ふ、一日智者の來る有り、大欲先生大に喜び是れに問へば曰く、余に發明の秘術あり實に天下に比類なし、先づ千金を吾に與へて謝禮せずんば教へずと、大欲者大いに喜び忽ち千金を出

して萬金を得る術を問ふ、智者其金を懐中して謂つて曰く、真法とは他なし予今一首
以て千金を得たり君又斯くして儲く可しと

○紙幣私造

或る商店の小僧常に人に語つて曰く、我が店の主人は紙幣を造るに巧みなり嘗つて贋
造の如くならずと、事遂ひに其筋の知る所となる、忽ち法廷に引かれて取調べを受く
るに、法官先づ云はく、其方は紙幣を造りしは實際なりや、答へて曰く、然り予は巧
みに是れを造れり然れども皆物品と交換して造りたるもののみと、法官嗟然たり

○占

夢

或家に至極御幣擔ぎの人にて、何事となく兎角氣に成る性質なりしが一年正月二日の
夜の初夢に雑巾を冠りし夢を見て、朝に至り顔色常ならず語つて曰く、其れ雑巾は即
ち纏れなり之を冠るは乞食に零落するの前兆ならんと、遇ま友人之を聞き笑つて曰く
然らず實に是れ吉夢なりとて一首の歌もて此れを祝するに曰く

雑巾とめて宇にかけば藏に金

これを定めてふくものになん

○古書偽造

或る人が骨董店にて願山陽の書を十餘圓にて買求めて是れを鑑定家に見するに、偽筆
なりとの鑑定故、大いに驚き且つ怒り早速右の骨董店に行き偽筆の廉を責め且つ買戻
しを談ずるに、骨董家は少しも動ぜずして曰く古人の書を賣買せば真偽の程もある可
けれど此書は拙者の書にして拙者の號を願山陽と云ひ多年人にも知られ居たり、實に
拙者の筆に相違の無きは保證する所なりとの答へに、客は一言も泣く／＼去りしとぞ

○薬價差引

貧窮なる書生有り痘を病み某村醫に治療を受く、後ち診察料も藥價も拂はず、遇ま
醫師其藥價を請求す、書生曰く余は足下より先づ謝金を贈取らん、何となれば近來當
地に痘病の流行甚だしきは皆余が賜物なり、予が不養生の爲めに大人小兒に傳染し

て、今や皆貴下の診察を受けざるなし、故に予は貴下の商法繁榮の端を開きし謝金を請取り、而して後貴下の薬價を差引かば益し兩益兩便ならんと

○汝に出で、汝に返る

狐は獸類にても随分狡猾な奴で、時に或は虎の威光を假りて揚々自得と云ふ有様、或時鶴を養應せんとて招きけるか、其實は鶴を困まらせんとて呼びたるなり、然れば先づ酒を大皿に入れて出せり、成程鶴は併口せり、狐等は舌を皿に入れて呑むれども、鶴は長き嘴にてコツ々遣つて見れど、中々に飲めざれば、蒲坐の中に美を受け、赤面しつゝ返りし後、更らに復報して呉れん物をと、先達ての御返禮に今日は何の風勢もなければ、御一同御出で被下度と申送り、狐が何の氣なしに來るを見て、美酒佳肴首の長き徳利の中に入れて差出せり、酒氣肉香鼻を打てども、舌短くして飲み喰ふこと出来ず、鶴は微笑みつゝ、嘴を徳利の中に突き入れて、左も甘ま相に飲み喰ふを、狐は何と仕方もなく、只打ち跳めて居るばかりにて、非常の恥辱を受け、コツ／＼と逃げ歸りしとなん

○鼠

算

太閤の家來に曾魯利新左工門と云ふ珍らしき頓智に長けたる男有りき、或日甚だ太閤の意に叶ひしと有りければ、太閤より何なりとも其方の分相應、望む物と與へんと仰せ出されけり、新左工門の云へる様、臣敢て大なる望みは候はず、只袋二ツが程の米を給はり度しと、太閤聞いて其はいと易きことなり、随分大いなる袋持参せよと仰せらる、新左工門恭なして退出し、やがて四五日過ぎて、米庫一戸前程なる大布袋二ツを數十人に持ち來らせ、太閤の御前に出で、先日御約束の米を、此の袋にて給はれ度と云へば、流石の太閤大きに呆れ、それは餘りに欲深し今少し小なる事を望めと云ふ、扱も殿下は吝嗇なる事仰せらるゝものかな、然らば更らに一厘の錢を今日は一厘明日は二厘明後日は四厘と、日毎／＼に倍増しと爲し一ヶ月の間御下賜相成度しと云ふ、太閤笑ひながら其れこそ誠に易きことなり、只今一時に計算して取らす可しとて、勘定方の者を呼び算術にて積らせしに、驚くばかりの大金故、又々是れも變更せしめらる、今此の太閤が安受合せられしを、一寸考へれば一厘二厘四厘八厘一錢六

厘三錢八厘、是れが一月積ればとて、高が千圓とも成るまじとも思はれんが、今試み
に計算すれば實に左の如き驚く可き大金となるなり、五日目には一錢六厘十日目には
五十一錢二厘、十五日目には十六圓三十八錢四厘、二十日目が五百廿四圓廿八錢八厘、
廿五日目には一萬六千七百七十六圓廿一錢六厘、卅日目には五十三萬六千八百七十圓
九十一錢二厘、總計金百七萬三千七百四十一圓八十二錢二厘、如何にも物事はうかつ
に返事の出来ぬものになん、

○和尚の失敗

或る旦那が寺へ参り、平生懇親の事とて案内も乞はず、ソット和尚の居間に通り見れ
ば、斯は如何に和尚は縁側にて頰りに雁の毛を剥き居りしが、俄かに入り来る人に驚き
しも、今更ら藏すことも出来ぬば、早速の頓智にて、イヤ是れは旦那殿には善い所へ御
座つた、御覽下され是れこの雁のむく毛をむしり取りて枕に入れば、頭痛の藥じや
と豫ぬて聞き及びし故、今しも之をむしり取つて居る所、何が借て出家のされぬ手先
き故思ふ様に取られず、殆んど困却致した、と云へば旦那は、其れは亦何より最と具
きことなり、此方へ御出しなされ拙者が毛をむしり進せんと、和尚の手より雁を受取
り、何の造作もなく彼の皮をくるりと引むしり、开が毛をも手早やく剥き取りて、之
を和尚の前に置き、さらば和尚様、是れを枕に御入れめされ、但し肉は御寺に不用の
物なる可ければ、拙者が頂戴して参らんとて、而かも肝心要めの正味を其まゝ奉はれ
て和尚茫然口アンツラ

○物 徂 徠

昔し元祿の頃ろ、物徂徠と云ふ者は、傲慢不羈にして平生口を極めて佛老二教を排し
居れり、然るに或人徂徠の尊大なるを挫かんとて、釋迦と老子と説法せる其が前に、
孔子が平伏して聽聞し居る所の圖を作り、之を徂徠の許に持ち行きて、其の畫贊を乞
ひける、有繫の徂徠も定めて當載して、筆を投するならんと思ひの外、莞爾として打
ち笑み、別に思案もなく直ちに筆把り染めて、一句を題して曰く、

老子談虚、釋迦説空、大聖孔子、抱腹大笑、

と主客全く其置位を顛倒して、孔子の前に張り擴がり居る釋老は、却つて孔子の笑草

と爲る、徂徠の頓智筆才實に千鈞の價ひありと云ふ可きか

○奇絶の裁判

昔し支那に陳襄と云ふ人浦城の令たりし時、一人の良民の物を失なひしとて訴へ出でたり、如何様近邊の偷兒の盗みしに相違なく見へたり、陳襄は开が訟を聞き取りて、直ちに嫌疑人數輩を捕らへ、一々吟味すれど、何れも唯存せぬ知らぬの一點張りにて少しも埒の開かざれば、陳襄心に一計を案出し告げて云ふ様、汝等如何に強情なればとて、此中確かに一人の賊あるに相違なし、就いては某が廟に一個の靈鐘あり、不思議にも其の靈驗現舉にして、能くも盜賊を辨知す、若し其罪なきものはれを搥づれば寂として音なし、罪ある者これを搥づれば、鐘は倏忽として鳴り出すを常とす、因つて今此の靈鐘に托して吟味す可ければ何れも左様心得よと、嚴そかに命令し、吏をして嫌疑者一同を廟所に引かしむ、己れ先づ祭膳に托して廟所に詣し、密かに鐘面に最と濃き墨汁を塗り付け置き、斯くて愈々嫌疑者一同を一人々々引入れて交々往いて、鐘を搥でしめしが鐘は少しも鳴らざりき、斯くて後一同の筆を驗するに、何れ

も皆な其手墨に汚れ居る中に、只一人の手の汚れざる者あり、蓋し是れ心に恐るゝ所ありて、若しも鐘を搥で、フ、ン鳴り出しはせまじやと思ひ、手を觸れずして出で来りし故、开が手は取て汚ることなく綺麗なりしなり、依つて是れを捕へ置き再び嚴重に吟味せしかば果して白狀に及びしと云ふ。

○教師の妙判

明治初年の頃ろ、始めて小學校津々浦々に設立になり、同時に西洋品の流行を來せり、一日小學校生徒が何やら薄赤き焼物のかけを拾ひ來りて父に示し、御父さん是れが煉瓦と云ふ物だよ珍らしいでしやう、馬鹿言ふな是れは炮烙の破片だわ、其れは御父さん間違つて居る、若し嘘だと思へば學校の先生に聞いて御覽ん、好しく行て聞いて見ろ炮烙に違ひ無いから、斯くて父子同道して學校先生の許に行き、争ひの顛末を述べて、彼の破片を示せば、先生一見思ふ様、此の品元來煉瓦に相違ない、併し今打ち附けて、炮烙で無い煉瓦なりと云はひ、子として親を負すの道理如何にも忍び難し、好しく我れに一説ありと、父子兩人に向つて云ふ様、御父様は炮烙だと云ひ御子息

は煉瓦だと云ふが、是れ共に其の據り所のあるので何れも無理ではない、斯う云ふ次第だ、好く聞かれよ、世の諺にも見るはほうらく、見らるゝいんかど云ふではないか、去すれば父上が見るは炮烙で、御子息の見らるゝは全く煉瓦に相違はなしとて、言ひ渡しやりしとぞ聞く、

○糠味噌裁判

昔し神田御玉ヶ池邊に古金買を以て渡世とせる男ありき、其名を八郎兵衛とて此上なき客番者なりしが、多年汗水流して貯めたる黄金の、今は五十兩程に成りたるが、借て是れを仕舞置く場所に困り、獨身者の若し外出中盗難にでも遇はんか、十年の刻苦も一朝にして水泡に歸する道理と、種々思ひ廻らしたる末、漸やくに思ひ付いたる糠味噌桶、是れぞ金ちやん屈強の隠れ家と、獨り自ら微笑みつゝ、ソト糠味噌の中へ押し置き、朝夕香の物出す度とて、其れどなく手を觸れ見れば樂み居たり、然るに或日の事八郎兵衛、例の如く朝まだきより家を出で終日市中、古金を買ひ集めて歸り來たり、先づ第一着に彼の糠味噌を探り見るに、あら無慘や豫ねて秘藏せる最愛の黄

金五十兩、羽翼が生へてか足が生へてか、明けて悔やしき玉手箱、全く空蟬の薬脱の殻となり居る故、八郎兵衛の興驚き大方ならず、直ちに時の名奉行大岡越前守へ訴へ出てたり、越前守早速是れを受理し翌日に至り、其近邊に住へる長家中の者一同を役所に呼出し、衆人に向つて云ひ聞かす様、如何に長屋一同の者よ、是れなる古金買八郎兵衛なるもの、去る頃より黄金五十兩、木綿財布に入れて、臺所なる糠味噌桶の中に仕舞置き所昨日遇ま外出中紛失致せし趣き、本人よりの訴へなるが、思ふに是れ平生其の實を見知り居れる近傍の者ならん、何しろ一心こめて取つたる物、殊に糠味噌の事とて二日や三日の間は、其の取りし手の香ひは中々消へ失せぬもの、イヤ此方が今其處へ下り行きて、开が手を一々に嗅ぎ試む可し、と申聞ければ其中一人が、心理的自然の作用にて、胸にギツクリ應ずる所のありけん、若しやと思ひ密かに己が手を鼻先きに押當て、嗅ぐ者あるを見すましたる大岡奉行、莞爾と微笑みつゝ云ふ様、噫々世には不思議の事もあるものかな、一心を籠めて取つたればこそ、其糠味噌は、是所まで臭ふことよ、今は早や其處まで立ち行くにも及ばず、即ち其所なる八人目の男こそ正しく其賊なりとて、一同を放免して、其奴一人捕らへ置き尙種々に吟味しけ

れば果して其實を得たりとぞん、

○計らんとて却つて謀らる

昔し支那春秋の世に、一人の賊者の盗人ありき、素とより大膽なる者にて多くの見分さへ有しける、或夜二人の手下を引連れて、一富家に忍び入らんとせしが、固より嚴重の戸ままりとて、容易に押入可き透きもなく、屋根の上に遣ひ登り、瓦をめぐり、板を切りて、大いなる穴を造り、二人の盗人は屋根の上に居り、賊者を簀に載せて、繩にて釣り下げ、大膽なる賊者は、室内彼方此方と遣ひずり廻りて、頻りに物を盗みて、有り合ふ櫃に入れ、やがて簀に載せて彼の繩先を動かせば、屋上の二賊即ち是れを引き上げ、开が中なる物品を取り出だし、又櫃を下ぐれば再び中に盗品を入れて引き上げしめ、又々空櫃を下さしむ、此の時下なる賊者思ふ様、イヤ待てしはし、我れ又此の櫃に貨物を入れて引上げしむれば、三度目の賊實最も多き故、彼等二人忽ち欲の上に欲を増し、吾れを揚ぐれば、吾れに多くの分配を取らざるを吝みて、吾れを揚げず置き去りにすること必定ならん、好しく最早や是れにて終まいとぞなし、品物

と共に我れ密かに此の櫃に入りて乗り揚らん、左なり〜と思考定めて、其まゝ櫃に入り例の如く繩を揺り動かせば、屋根なる二賊は心得たりと引き上ぐるに、是れまでより別して重かりしかば、遣は愈々過分の賊實ならんと大いに喜び、力を入れて引揚げしが、果して案の如くの大欲心を起して、二人密かに相談する様、若し此の上彼の賊者を引揚げなば、今宵の働き全く己が功なりとて、過分の分配を取るとなる可し、去來左れば此儘に彼れを置き去りにして逃げんと、一人の賊は前二度分の財寶を引かけ、一人は後の財寶を彼の櫃のまゝに、金剛力を出して背負ひ、重荷に肩を痛めつつ、一散に其場を逃れ去しが、道すがら兩人物語る様、今頃は定めて彼の賊奴が、家人に捕らへられし時分ならん、彼奴が周章の様如何に面白からん、嗚ぞ見物なる可しなど、打笑ひつゝ行く中に、時しも夜は漸やく明けしと見へ、彼方此方に人々の聲聞ゆる故、時分は好しと突然櫃の中より大道に躍り出で、大音聲に告ぐる様は、ヤレ近邊の人々救つて下され、此の二賊は我が財寶を奪ふのみならず、剩さへ行きかけの駄貫に、我が身體さへも擔にして去らんとすなり、何卒早く救ひ呉れよと、聲を限りに呼び立つるに、近傍の人々手に〜棒ちざりなど持來り賊は何處と問めれば、

二人の賊は肝を消し、喫驚仰天して氣も魂も天外に飛び去り、是れまで背負ひ來りし財寶を其場に悉皆放り出し、一散に逃れ去れり、斯くて彼の山の如きの財寶は、悉く賊者一人の有に歸しける。

○竊盜止めの妙藥

或處に壯年の夫婦者有りしが、其が夫は心術悪く、晝は酒のみ飲みつけ、夜になれば白波の盜賊するを業とせり、之れに連れ添ふ妻は、到つて實躰の女なりければ、太く之を歎き、様々意見すれども、少しも聽き入れず、依然夜なく盗みの業を爲し居る故、女房終ひに詮方無く、熟ら思ふに開明の世に、若しも盜賊止めの妙藥はなきものかと、兎ある醫師の許に到り、委細の事情打ち開けて、其の盜み止めの妙藥を乞ひけるに、此の醫師大の頓才家のこととして、好しくと點頭きて、直様一服の散藥を與へ且つ言葉添へて申す様、此の散藥は毎夕飯の頃ろ、夫に知れぬ様密かに茶酒の如き中に入れ一摘みづゝ服さしめよ、去すれば効能忽ち現はれ、一週間位にして盜癖平癒疑ひ無かる可しと、妻は大いに打ち喜び其れより家に歸りて、密かに茶に和して服

さしめけるに、夫は其夜も例の如く出で行きけるが、其夜は如何したりけん何一つ得取らで空手にて歸り來れり妻は其藥の奇効に密かに喜びつゝ、尙三四晩打ち續きて服藥せしむるに、毎夜一其の通り空手にて歸るを常とせしが、一週間程過ぎては終に全く盜みに出づるを癢するに到れり、妻は大いに喜びて、何故此頃ろ良人には例の夜仕事を止められしにやと問ひ試みるに、夫は大いに歎息して答ふる様、左ればなり其事なり、何故とも知らず此の數日前より、我れ夜働きに出るに、不思議にもコメノと狐の如く咳の出で、將さに人家に押入らんとする頃ろには、生憎や咳は増々多くなりて、如何にするも堪へ難たし、依て假令辛ふじて忍び入りたりとも、此の爲めに自分の働らきは出來ず、彼れ是れ以て所詮此の働きは、止むるに決心せりとて、其れより後は全く盜賊の業を廢して、正業を營み正しき眞心に立歸りしとぞん

○池の方圓

一休、蜷川の洒落、今に始めぬことながら、或時蜷川庭中に眞四角なる池を掘りけるに、遇ま彼の一休和尚訪ひ來りて之を見、池の傍に「此の池圓池」と書きたる紙をは

りたり、新左衛門不審して言ふ様、如何に此の池は面のあたり見らるゝ通り、真四角なるに、何とて丸池とは宣うぞや、一休答へて左ればなり此の池水は大分濁つて居るではないか、濁つて居れば澄まぬなり、澄ぬは即ち隅無いなり、隅がなければ是れ四角にあらずして圓池なる可しと、蜷川之れにて閉口せしが、後ち數日にして池の水至つて澄み渡りければ、蜷川大いに喜び善き折なり、彼の一休に鼻明かすは此の時なりとて、直ちに使を派して一休を請じける、来るを待ちて彼の池を指して云へけるには、如何に和尙殿よ、先日此池澄まぬ故、丸池とは仰せられしが、斯く長く澄み渡りし上からは、豈と是れは角池にては候はずや、と一本遣り込めたるに一休笑つて、又も即坐に云ひける様、否や、是れは餘に好く澄み切つたれば、隅切にて矢張り同じく丸池なりとの言に、流石の蜷川餘りの事に呆然として又言なかりきとぞ

○巾着切の頓才

今は昔し、寶曆の頃、江戸に羅子の九郎兵衛なる巾着切ありけり、道奴頗る其術に妙を得て、仲間の中にも先づ御頭分とぞ唱へられける、或日淺草觀音の地内にて、仲間

の者共五六人、降るや降らずやの定めなき空模様にて、參詣人も最と少なく殊にさびしき折柄、各々茶店に腰打ち掛け、銘々に仕事自慢をして居る所へ、供人二人召連れたる一人の侍、蛇の目の傘を差して上下着して參詣す、九郎兵衛同類と話す様、彼なる侍の腰に下げたる印籠巾着、金銀造りにて餘程の價值と見受くるが、何と彼れを切り取る手段は如何と、一同口を揃へて云ふには、左ればなり何を申すも人出少なき白晝殊に、供人二人まで附き寄り居れば、中々以て手出しは出來ず、賊に賣の山に入りつゝも手空くして歸るに似て、如何にも口惜く残念の次第にこそと云ふ、九郎兵衛阿々と笑ひて、然る小膽にては我々の仕事は兎ても上達せまじ、好し然らば我今美事に切つて見べしと、其儘つかく、件侍の傍へに行き、小腰を屈め手を擦りつゝ云ふやう、唐突に失禮の段御免下され、私共朋友五六名と、彼れにて聊か酒飲み居り、并か酒興の機嫌に任して、一つの賭事を爲し、其の負けたるものは大杯五六杯づゝ飲まねばならぬ次第、然るに私は大の下戸にて甚く迷惑仕る儀、して其の賭事と申は御貴殿が御差しなさるゝ其が傘の骨の數、私の申條は五十八木と云へ、其他のものは、六十五本又は五十四本、六十一本など、云ひ、各々我意を主張致し候なるが、何分にも實物に

就き、數へて見れば何れとも決せぬこと、近頃賊に恐れ多きことに之めれど、何卒其傘の骨、御誦みなされ下さらば、此上もなき有難き仕合はせに御坐り升、と又據ろなき躰に願ひ出れば、彼の侍は露疑ふ心もなく、并は又雨中の好い慰み、委細聞届けて拾め遣はす、難有心得其れにて能く見て聞き取られよと、主従三人仰向きになり、一二三本と數へ初めける、九郎兵は此躰を見て仕濟したりと心に喜び、密かに利刀を取出て、彼の腰印籠をスツバと切り偷り、やがて傘の骨の數へ了るを待ち、其數は幾個おらうとまよひ、先づ表面の仁義厚く一禮を述べて侍に別れ、立歸りて其印籠を見すれば、皆々其手練の程に舌を捲いてぞ打敷じ合へりと云ふ

○物 賞

「若し旦那様、御隣から今餅に附けて喰ひますから、砂糖を少々下さると云ふて参りました、」好しく、其れこれを持たして遣れ、然して貴様御隣りへ行つて、砂糖に附けて喰へますからと云つて餅を貰つて、來い、

○精 進 夜

六七十にも成る親仁が、年中親子兄弟の命日祥月とて、一日も精進と云ふを爲しことの無き故、或人は是れを詰り問へば、「己れが家の佛様達は皆な夜る死んだから、御精進は何時寝てから、」

○十 方 衆 生

或る頓智有る住持、説法せんとして高坐に陞りしに、參詣の人々連りに雑談して最と陳かしかれば、住持は大聲にて、「東西く、」と一聲高く言ふに、人々餘りに意外なりし故、喫驚して口を閉づるを待ちて、「東西南北四維上下の衆生、是れを十方衆生とは申なり、」

○命 取 三 年 坂

有る片田舎に三年坂と云ふ坂あり、人若し此の坂にて一度倒るゝ時は、必ず三年の内

に死すると云傳ふるより、斯くは號けしとか、然れば人々此坂を越ゆる時は轉び倒るるを恐れ、苟且にも油断する者なかりしが、一日一人の老人が、未だ年若かき息子を連れて通り懸り、如何なる過失にや彼の息子が足下の石に躓き倒れしにぞ、老人是れはと計りに打驚き、如何せばやと兩人が只管、歎き悲む折しも、向ふの方より坂降り來りし武士が、此有様を見て側へ寄り、御兩人見受る所、何か悲歎の御様子なるが、途中にての發病か、夫れならば幸ひ所持の良薬もあれば、一服御服用なさらぬか、と最と親切に言葉を懸れば、老人は涙を拂ひつゝ、貴殿の御鴻情千萬恭なし、御見懸通り私共が斯様に泣いて居ります譯は、と有りし次第を物語れば武士は打黙頭き、イヤ夫ならば左程歎くには及ぶまい、一度倒れて三年なれば、斯く云ふ拙者なぞは、二十度も倒れたれば今年六十餘までも生延びしと語りければ、兩人一度に顔色和らげ、迷ひの霞の晴れ渡り、七十餘才まで長壽せしとむ。

○老人の智

昔何某とて一人の宰相、若くして母に後れたる御方、一人の父に孝行を盡され、日々に禁裏に参内して、奉公暇なき身の上ながら、内にだに歸らるれば、立居起臥に傍を離れず侍づき、善きに有れ悪きに有れ何事も、父の指圖を受けて其言ふ通りに、物事を爲らるゝ様な、至つての孝行人なりしが、時の帝御心たけてけわしく、若き人のみ寵愛して、老人をば拙く否らしく思召、其れ故天下に詔を下し、六十以上の男女をば、悉く離れ島に捨て仕舞との御觸出、日頃不孝の者共は、能き幸ひと喜びて捨てしが、心有る人々之を悲み歎け共、詔勅に恐れて是非云ふ者無かりしが、件の宰相大いに驚き悲みて、勅に任せて父を捨る時は不孝の罪限りなく、去りて父を捨てまじとすれば勅命に背くの科あり、こは如何せんといふ工夫を回らされ、兎に角密かに父を藏し參らして時節を待たんと思案を定め、我室の床下に穴を堀り、内を奇麗にしつらい、父に向ひて兩手を付き、朝夕吾が座する下に父上を置き奉るは、如何にも恐多く悲しけれど、無道の勅命を凌がん爲めに候程に、且らく我慢して御辛抱下され、其内折を伺ひ帝を諫め奉りて無道の勅命を廢す可ればとの言に、父親打點頭王命なれば捨てらるゝも何とせん、然るを其方の孝心から、命に替へて隠し助けて呉れる志、身に餘りて嬉ひとて、穴に入り人目を忍びて居たりける、古往今來例し無き御觸なれば、天知る地

知る、遂ひ此事唐國にまで聞へて、彼國にては取々の評定、日本の帝こそ大悪無道にして、老人を嫌ひて悉く捨てさせ仕舞ひしとの事、左すれば今は國中若年の者共計りなれば、智惠有る者も希れなる可し、是れぞ實に日本國の運の盡き、今實掛けて争ふならば、彼國忽ち吾物と成る可し、去りながら日本は元來神國とて、昔より賢き人の多き事故、如何に若者共なればとて、慮りて事を仕損ぜんも計り難たし、先づ國使を遣はし其智惠の程を試みんとて、三種の難問を工夫して日本に使ひを立てたど有る、時に吾國の帝は、其謀略は夢にも知らず、吾國の血氣盛なる者のみなるに恐れを起し、扱ては使を遣はし歡心を求むるならんとて、威勢を張つて御達ひなされたりせば、彼使者一禮を述べ、借て此度拙者使ひに罷り出しは餘儀でも御坐無く、少々六ヶ敷工夫物有り、就いては貴國の智惠を借りたさに参りしなれ、と云つゝ黄金の籠より、二疋の小さき蛇を取出し、此蛇形ち同じくして長短無く、勿論頭ら尾まで鱗の色に至るまで、寸分違ひのなきことゆゑに、吾國にても諸の賢人集り考へたるも、曾て其雌雄を見分る者どてなし、何卒是を見分けて下さる様との唐帝の御言にて候とて指出せば、帝を初め列座の諸臣下、蠅の如くにたかり集り、見れ共く中々知れる事でなし、其時件

の宰相唐國に謀を悟り、我國の一大事と思ひ、進出で申さるゝ様、某存寄つたることどの有れば、如何にも見分けて指上ん、且らく御預け下さる可しとて、彼の黄金の籠共預りて持ち歸り、穴の中なる父親に向ひて、始終の事實を語らひ、彼の蛇を見せしに、父は見るより眉を皺め、是れは日本の智惠を試めし、退付後より大軍を催ふし吾國を責めて亡ぼさん計畧なり、何とて若き者共の容易に見分の付可きや、凡そ萬物皆左陰陽の二性を由せず、女は陰にして重く其性靜かに和らかなり、男は陽にして軽く其質強くして躁がし、此の蛇の雌雄を知らんと思はひ、先づ和らかなる者の上に交へ見られよ、男蛇は強くして和かなるを嫌、ひ躁がしくして靜かなるを否やがり、吾の外に遣ひ出す可し、又女蛇は同氣相求るの道理、和らかなる者共の群を喜びて、靜かにわたかまる事や有らう、早く試みよかしとの教に依り、宰相其通りにせられたるに、案に違はず、一疋は出て一疋はわたかまる、因て早速印しを附けて献上しければ、唐の使ひを初めとして帝も公卿大臣まで、皆な驚き感じられた、時に唐使は、眞四角なる木の切れを一つ出し、是は牛頭山の旗檜香木、此の木の本末を知るものなし日本の智惠を借らんと云ふ、帝を初め月卿雲客寄り集りて騒げども、中々以て埒明かねば、

亦宰相をふて持ち歸りて父親に計らるゝ。時に父親の云はるゝ様、是れ又天地陰陽の理に背かず、流るゝ水に投じて見られよ、木の根は陰にして重ければ沈んで下となり、梢は陽にして軽ければ必ず上に向くものなりと、宰相聞いて飛上つて打ち喜び、頓がて流れに打込で見れば、幾度仕ても同じ容になるを見て、先づ印しを付て、急ぎ禁裡に參内して奏しける故、何れも驚き感じたとある、其時唐使又もや一個の明珠を取出し、此玉に七曲りに曲りて通りたる穴あれども、誰一人此穴に線を通すこと能はずして、四百餘州の智慧に餘る此の玉、若日本の智慧を以て線を通し給はらんには、寔に神國の徳を尊ばん、いざ一工夫有れかしと指出す、帝王臣下諸共に、胸も張り裂く計りに思へど、何の思考も仕方もなし、斯くて宰相又持ち歸りて之を父に訴へ歎くを、父はつくづくと打詠めて、大唐よりの謀も之より外には最う有るまじ、是れだに知らば我が日の本の神威増々異國に顯れ、行末永く安穩ならん、去りながら四百餘州の智にも及ばぬ此玉、何とて容易く知るを得ん、去れど汝が孝心の志の神明に通じて有れば、國中の神々我れに力を添ひ玉ふ可し、必ず愛ふること勿れとて、やゝ久しく頭を傾け思案を回らしたる末、偕て／＼案じ出した宰相悦べ、其仕方は此玉の向ふの穴の口に

香しき蜜を塗り付け、此方の口より、蟻の弱腰に糸を付けて入れて見よ、其蟻蜜の香をば慕ひかぎ、如何程曲りし穴なりとも、必ず向ふへ通り脱ける可し宰相左らばと悦び、其通りに仕て見れば、案の如く其蟻蜜の香ひを慕ひて、腰に糸を付けたるまじ、易々と向の口に通り返り出た、頓て蟻をば取捨て、糸を貫出し、直ちに陛下に献上せしかば、流石の唐人も是はとばかりに驚きあきれ偕て／＼萬國無比の無双の神智なりとて禮拜して歸國の途に就いた、時に帝は喜びの眉を開らき、此度汝無りせば、我神國の恥辱滅亡、爾るを汝の此度の手柄言語を以て賞し難たし、就ては其賞として汝の申出何なりと聞届け遣はさんと云ふ、宰相は頭を地に付け、至極勿昧無き御勅諭、有難さ身に餘ることなれど、此度の工夫は決して私の計ひに非ず、何を隠さん某には當年七十有餘の老親の有之候なるが、先達ての御詔りに背き、密かに穴藏にかくし、老ひたる父を養ひ置きしに、去れば今度の工夫皆是れ老父の智慧にて候、何卒此度の御褒美の代りとして、先達ての御詔りを取消され、改めて爾來臣民一般に、老年の親々には厚く孝行を盡せよとの御勅詔をこそ願はしけれと奏上す、帝は涙を流がして宰相の志に感じ前非を御後誨ましまして、忽ち天下に詔勅を改め下し、捨てたる老人みな迎へ

遷して随分孝養盡せ、宰相父子を尊んで諸事其命に従へよとの御事に、自然と天下太平に成り、宰相親子は今に至りて尚、蟻通明神とて、和泉國日根郡に鎮座在すこと尊うとけれ、



奇聞逸話

○人頭の價值

昔し佛滅後二百年に當つて天然に阿育大王と云へる有りて、深く三寶を信敬して常に僧寶を請して供養せられける、曾つて其大齋會の日に至り、朝まだきより香湯に浴して玉鉢を清め玉ひ、新淨の衣裳を着し、遠く來るの僧衆を請待して其長幼凡聖を撰ばず、専心に恭敬禮拜なされたり、時に其が臣下に夜奢と云ふ者ありけるが、其性放逸邪見にして三寶を無みし居るを常とせり偶ま彼の大王の三寶に對し恭敬讚歎爲し玉ふ有様を見て、大いにさみして申様、扱て大王には貴き玉鉢を以て如何なれば去る拙なき身の御舉動をば爲し玉ふぞ、いと貴き王の頭を賤やしき臣下の僧尼等の前に屈し給ふこと、有ふこととも存じ申さずと言上するに、大王夜奢の言を聞こし召し給ひて、則ち諸ろの臣下に救せられ、死せる諸獸の頭めらば採がし求め來る可しとて、

や犬や虎狼、牛馬の頭を取集めさせ、一々其を臣下に持たせ、彼の夜奢には別に人の頭を給ひ、何れも市に出で何なりと手段を設けて賣り來たれと命じ給ふ、多くの臣下仰せを受けて何れも手々にその頭べを提さげ市に行きて其れを賣るに、先づ猫の頭を黒焼となさば鼠の噛みたる處へ附けて大妙藥なりとて賣り附くるもあり、犬の頭を門口に掛け置く時は盜人の用心になる咒なりとて買はずもあり、虎の頭は犬の噛み口に適藥なりとて賣り附くるあり、暫時の間に何れも其頭べを賣り盡し歸れども、兎ても角でも買ひ手の附き兼ねるは、彼の夜奢の手にせる人の頭なり、依て是非なく件の頭を持ち歸りて大王に奏し上るに、大王重ねて仰せには余の臣下の頭らは皆な賣り盡せらるに、獨り汝のみ賣れざるは不審なり、好し左らば明日更らに市に持ち行き誰にても只與へ來る可しとの敕に、是非なく王命かしこみて、翌日又も市に持ち行き價を取らず只遣らんと云へど、誰有て貰はんと云ふ者なく却つて見る人毎に是れを怪み笑ひて狂人かどまで言ひはやす故、詮方なくも又々其まゝ立歸りて大王に奏すらく、兎角此の人の頭のみは、此方より金圓を添へて唯遣らんと申せども、望む者のなきのみか、却つて拙なきことの如く忌み嫌らい手に取る者も御坐なしと言へば、大王問ひ給ふに、

如何に夜奢上總べて世上生ある者の中にて最も貴きことは何者ぞ、夜奢對へて萬物中人間程尊貴の者は御坐り升せぬ、大王答めて萬物中人間最尊ならんには其頭何故に賣れぬにや、然ればにて候人間と云ふものは生有る間こそ貴とけれ一命絶ゆるに於ては此上なく拙きものにて候と對ふ、然らば朕の頭も又死せる後は其の頭と同じかる可きや、申上るまでも候はず上り陛下より下衆民に及ぶまで此理はいさゝか變り候はず、此時大王席をハタと打ち、やよ是れ夜奢上好く聞けよ、朕れ阿育の頭べなりとも死すれば必ず卑められ、犬馬の頭に劣るとすれば、其の卑めらる可き頭を下げて墨乘を禮拜恭敬すればとて、何の怪む處かあると、道理を詰めて呵し給うに、流石の夜奢も聞き了つて其理に伏し、從來の邪念を懺悔し厚く三寶に歸依しけるとなん、

○太田道灌歌道に志す

太田道灌一日從者も連れず只一人、銃を肩にし狩獵にと出でける處、俄かに大夕立に降り込められ、兎有る村舎の軒下に馳せ入りて雨を避け遇き門戸に立ち居る一美婦人に向ひ、雨具の簀を借らんと所望するに、婦人は内に入りて一枝の山吹の花を折り來

りて渡しける、道灌其意を解いせずして、如何なる理由ぞと推し問へば、婦人は徐ろに一首の古歌を詠じけり其歌、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだに無きぞかなしき

其意蓋し簀一個だに無きを云ふなり、道灌これより心を文學歌道によせて、後遂ひに名高き歌人の數に入りしとぞなん

○法住法位

一休和尚或る時曲りたる樹の枝を手に拈じて、若しこの枝を眞すぐと見る人は佛法の極則を悟了せしなり諸人如何と接し給ふに、人々皆な異口同音に、其は六ヶしきことなり兎ても眞すぐに見ることを難しとて引き下りける、或日例の蜷川氏の來るを見て、又も彼の枝を出して詰られしに、蜷川老人聲に應じて、其の枝は元來曲つて居るなりと即答せば、一休笑つて止みしとぞ、實に柳は緑り花は紅ない古今東西變りなき法住法位の實相を吾れから誤認し、曲直分明の理を轉倒する凡夫の忘見こそうたてける、

○心の鬼が身を責る

大岡越前守嘗つて與方同心の身姿を爲し市中を巡羅し居る處、頃ろしも夏の事とて俄かに大夕立の降り來し故、あわて、路傍の一道具屋にかけ込めば、其の店に坐し居りし番頭あわて、立て奥の間に逃げ込むを見て、流石は大岡不審な奴と引出だして取調べると、果して齋惡のある者なることを自白せりと云ふ、天に口なし人を以て言はしむ恐る可きこといもなり、

○金満家の秘傳

昔し駿府の町家に、くろかね屋といふ大金満家有り、元とは甚だ貧しき商人なりしが、金物商賣を初めて己れ一代に數萬兩の金を貯ひ、遂ひには廣き駿府の町にても肩を並ぶる者なきに至れり、然ればこれを見聞く人、何れも黒金屋の今の有様を羨み且つ怪しみ、如何にしてか斯くも大金を貯へたるにや其方法のあることなる可し、吾等年中斷へず立ち働らけど、貧乏神は身を離れず何時まで經てと元の木阿彌、妻子養ふに事

缺くことさへ間々あること心外千萬、何卒富み榮うべき方法を教へ給へ、と問ふ者さへ有るに何時も金満家の主人は、金持に成る道とて別に六ヶ敷ことり御坐らぬ、只儉約の二字を守るのみと答ふるのみ、扱又此家に常々出入する喜入と云ふ男有り、正直一圖の律義漢なりしが、主人の答を疑ひて、儉約して金の貯るは誰も知り切つて居ること、併しそんな尋常なこと何とて彼の大金の貯る事やある、これには秘方の有ることならん、決して口外は致さぬ故何卒私にだけ教へて下されと、毎日來りてうるさきまでに尋ぬる故、主人も其熱心に感じ、其れでは御前一人に密かに語つて聞かせん語り聞かすとも、兎ても人には出来ぬこと故今まで口外せざりしが、御前は正直者の骨折知らず故言ひ聞かすが、こればかりは行ふこと六かしからん、と云ふに喜入膝を進め、決して出来ぬと仰せらるゝからは餘程六かしき事ならんと眞面目に問ふに、否や六ヶ敷しき事ならば多くの人の中には却つて行ふ者も有らんが、餘りに造作無と過ぎる故、誰にも出来ぬことなり、喜入は愈々すりよつて、其様な事ならば此喜入は屹と遣り遂げて御目に掛けん、何卒早々御傳授下されと熱心を顔に表はし懇請すれば何もそんなに急ぐにも及ばず、扱て是れを傳授するには二日掛るが、つまらぬ事

と云ふ考へ有つては傳授け出来ぬ、どんな事でも遣り透す心得有りやと堅く念を推すに、どんなつまらぬ事でも何んな困難な事でも此身に出来得可き事ならんぞ遣り遂げ升、斯に於て主人は明日あけ六ツ時を約して來る可きを命じたり、喜入は翌日未明に起き出で、黒金屋に至れば、主人は喜入をして四斗樽一個を車井戸の傍に持ち行かしめ、其底を打ち抜かしめ借てこれに今日一日かゝりて水を井戸より汲み入れよと命じたり、底なき桶に水のためる可き筈なれば、餘り馬鹿くしき事なれど昨日誓ひし言もあり、又其内に井戸から金でも出て來ることかと空頼みに、空頼みして言付けのまゝ一心に水を汲みけるが、素より水のためり得可き筈なれば、夕方に到りて斯くと主人に告ぐるに、其れでは明日又來れと言附けたり、其翌朝正直なる喜入は早々と出掛け行けば、主人今度又新たな四斗樽を出し、樽は其まゝにして釣瓶の底を二つとも打ち抜き、今日はこれで樽へ水を汲みなさいと言ひ残して去る、喜入愈々馬鹿くしき言附けにあきれたれど、正直者のこととして瞬たきもせず、終日底無き釣瓶の車井戸をガラ／＼鳴らして汲みけるに、不思議や水は漸やく樽の中になまりければ、喜入は少しく力を得て、尙ほも根限りに汲みし程に、其の日夕方近き頃る既に四斗

樽一杯に満ちたりき、其時主人井戸端に來り、何ウダ喜入殿解つたか、金満家に成る
法と云ふは此事じや、假令毎日數百兩の金を儲けても之を受る器に底の無き時は、一
生かゝりても一錢の金も貯めること覺束なし、底なき樽に水汲むと同てことぞ有らう、
若し又これを受る器に底あらば、一日に一錢二錢を儲けても、遂ひに數百兩の金満家
になること、底脱け釣瓶で汲みし水の、一滴二滴がつもりくつて、四斗樽に充満る様
なもの、器とは心の事、底とは心の制裁よ、心の底の制限なきものは、金の貯る筈は
ない、何んと合點が入つたかな、御前も此理に従つて行ふ時は必ず大金満家に成ること
請合なりと教へたり、喜入はこの教に感じ心の制裁を第一とし、身の行ひを慎みし
かば其後果して有名なる大金満家に成りけると云ふ

〇十一の子の字

小野篁が和漢の學に優れし事は、世人の皆知る所なり、嵯峨帝の御時内裏に札を立し
者有りて、其表面に「無善惡」と書きたりけり、帝、篁にこれを讀めと仰せられたりけ
れば、篁謹みて「讀み申すべし」とされど餘りに恐れ入る事なれば、筆き仰せなれど讀

み申すまじ」と奏しけるに、帝は聞入させ給はず、唯「讀め讀め」と宣ふこと餘りに
切なりければ「さらば恐れながら申すべし」とこれは、さかなくてよからんと讀み申す
なり、惡はさかど讀み、善はよろしど讀む、故に惡無くて善しからんなり、此三字は
嵯峨なくてもよろしからんとの意なれば、取りも直さず陛下なくばよからんと、呪ひ
まつるなり」が答へければ、帝殊の外逆鱗ましまして「この三字を書きしもの、汝な
らで外にあるまじ、免し難し」と宣ふに篁困じ果て、「さればこそ讀み申さじと頼り
に辭退申せしなり」とて、平伏しておやまり入るに帝「さらば汝は書きたるものなら
ば如何なるものにて讀む事を得るか」と宣まひければ「何にて讀み申すべし、必
ず我が書きしもののみ讀むことを得るにはあらず」と曰ふに、帝自ら筆を染めて、子
子子子子子子子子子子子、と片假名の子の字十二字を書かせ給ひて、これを讀め、と
仰せければ、篁考ふる風もなく畏まりて、ぬこのこのこのこ、ししのこのこのこしし、と
讀みぬ、片假名の子の字はぬとも讀み、又子の字、子の字にも讀めば、かくは讀み下
ししなり、これを聞かせ給ひて、帝も微笑ませ給ひ、何の御答もなく、天機却て麗し
く、物など賜ひて、退かしめけるとぞ。

○神の勤務

或時基督は、弟子の彼得を連れて旅行をした、處が此の彼得と云ふ男は、基督の弟子の中でも、随分熱心な信者であつたが、根が凡夫の悲しさ、矢張り人間の弱點はあつて、五感六情を備へて居る中にも、殊に名譽心の強い質であつた故、道々も基督に向て、私は何も願は御座りませんが、一生に只一度、天の神様に成つて見たう御座います、と五月蠅いほど云て居た、基督はそれを聞いて、それほど神様に成り度くば、ヨシ私が許すから明日の朝まで神様になれ、と御許可が出から、彼得奴大得意で、俄に神様氣取り、揚々として歩行て往つた、やがて或る村へ來ると、丁度鎮守の祭と見え、彼處に舞踏の舞臺があれば、此處には立食の會場あり、それはくく眼な事だ、すると一人の百姓が自分の家に飼つてゐる、小豚をば、路傍に棄たなりで、行かうとするから、彼得は呼びとめて、ユレユレお前こんな處に小豚を置て行て狼にでも取れたら如何する、と云ふと、百姓は平氣なもので、ナニ神様が守護して下さるから大丈夫と、云ひ棄て、行てしまつた、基督はニツユリ笑ひながら、彼得を見かへり、ど

うだ彼得ではない神様、あれを聞いたか、お前神様に成つたからには、今夜一晩のの小豚を守つてやらなければならんぜ、御苦勞な事だ、私はこれから村へ行つて、ゆつくり御馳走に成つてくるから、と其處でとうく神様の彼得は、一晩小豚の番人に成り、基督だけは村の祭に呼ばれて、氣樂に馳走に成りしと云ふ、但し聖書になし

○煩惱の結果

依田學海先生の著作されし、文學上人勸進帳を市川團十郎ぬし、始め上等俳優撰抜きにこの興行なれば、新富座は見物の山を崩しける中を、年頃七ツ許りの娘に乳母と覺しき者が附添ひ、能き所場を見立居を此群衆に半疊の餘地なく困りたる、様子を見て、五間目の棧敷より、手招きすれば、見知る人なる可しと、打喜び裏階段より攀登りて、行きけるに塲所なくて御困りの躰なるが幸ひ棧敷に人少し是へ入りて寛々見物なされよ、と云ふ人物は兼ねて見知らぬ、人なれども夫婦づれにて下女まで附き従ふは萬更賤しき、者ども思われず、折角の御志哲し御免をと、棧敷の片隅に入り見物する間もなく、幕間の斷しに何時か親しみて、娘の年齢を聞き器量を稱め自らの子よきを侮み

杯して、夫婦共々娘を愛で慈しみ膝に乗せ菓子又は毒にやらぬ肴を喰はせ、乳母にも酒辨當を饗應し、思ひ寄らぬ御馳走に日の傾くを忘れれば、早此暮にて果どの事に残り多くも、謝禮を述べ立別れる乳母を暫し呼止め、五拾錢銀貨二個を紙に包み、贈り途にて手遊なりとも買つて上げられよと娘に持たすれば、乳母數々辭退するを強いて進せしとは娘を愛でらるゝの餘り、此の上呑むも却つて失禮なり、幾度か辭儀して立歸りける、抑も此娘は淺草區に隠れなき若松屋智右衛門とて兩替を業とする人の長女なるが、頃日疥の虫少し萌しければ、乳母に申付けて、醫者へ遣したるを乳母芝居好きにて、斯く新富座へ立寄りしものなり、若松屋では、歸りの遅きを業し居る所へ乳母歸り來りて斯くくの始末と芝居にての事落もなく打明け、貰ひし五拾錢銀貨さへ示めせば、智右衛門夫婦其の悦び一方ならず、夫れは何國の人ぞ、御名前は聞いたか、宿所はと問へど知らざるは御禮の申様もなしとて悔みぬ、夫より四五日過ぎて、彼の男腕車に乗り若松屋の前を東に駈け行くを、乳母見附けて此の由を家主に告ぐれば、家主番頭に腕車を追ひ掛けさせ、粗忽ながら御目に掛り申上げ度き儀有り、鳥渡若松屋へ御立寄り願いたしとの事を、彼の男受け引きて立戻り若松屋へ來るに、乳母

娘を伴れて出で迎ひ、奥の間へ請じて此程は御世話様になりしとの挨拶に彼の男は此の家の息女なるかと、娘の手を取り膝に乗せ念餘なく、寵愛せる所へ家主智右衛門出で、芝居にての謝禮幾度か繰り返し、實は早速御禮に參らせたくも御宿元相分ならず、最と残念に存せしが、折能く御通行を御見かけ申し、親しく御禮を述べは何より有難き仕合、鹿酒一盞差上たければ寛々御遊び下されと、斷の中に持出す酒肴流石は豪商丈ありて、器具の結構なるは云ふ迄もなく、之に盛りたる山海の珍味も不時の饗應には得難き品物多し杯酒の廻り未だ、三度ならざる頃及、店より小僧來り横濱港英國商館の番頭さんは、此方に御在なさらぬかと神田の古物商小八郎とか、申す人が店に來て、尋ねてですと家主に告るを、横聞させし彼の男飲み掛し盃を下に置き、ナニ小八郎、商館の番頭は私です、鳥渡御免をと、起ち上るを押し止め御知己なら此ちらへ、御通し申さん、小僧御誘れ申せと、店主の下知を半分聞いて、承知した小僧の案内に附いて來る、商人鉢の男、家主に一禮して後、商館の番頭に向ひ小八、旦那の御断の水晶が見附りました、只今價值の掛合を仕て居ますと、佛國の商館からも聞出して來たもんですから、少し買ひ殺りました、御覽下さい、懐中より取り出して幅紗包みの中

は桐の箱にて其覆を取れば殊の外見事なる水晶なり商館の番頭鑑定して、ナル程晰より結構な品です、然し何程です、ナニ四百圓、夫れは思の外安く手に入つたです、明朝宿へ御出なさい金員を上げます、小八「處が旦那金員が今日願ひたいです、今御晰し申す通り佛國の商館でも買いたがるので價を昇げると困るです、家主左様ですか、夫れなら歸りませう御同伴にと、家主智右衛門の方に向て氣の毒そうな顔をして、番頭御覽の通りの次第ですから、今日は御免を蒙りまして、何れ近々、折角種々御配慮でしたに何とも家主失禮ですが金を渡すために御歸りなら明朝迄御立替申しませう、マア今日は是非御寛りと御遊び下さい番頭「イエ御立替を願つては濟みません何卒御免を、頼りに御立替は氣の毒と斷るのが家主益々信用厚ふして是非金員を立替て將來別懸にしたいと云ふ心になり、起て用筆筒の引出より糊で来た紙幣四百圓を小八郎に渡は、小八郎は打悦び、茲にて用事足り助りぬと水晶を置き歸りける、商館の番頭も是にて夫きに都合よし、銀座通り尾張町林屋に止宿すれば、宿次第に御返し申す、横濱は居留地三十八番英商館に奉職の身なり、以後別懸に御頼み申す、此の水晶は英國へ送る大金の品なり杯様々の晰しに、酒宴も時移り日暮れて後暇を告るに當り此品を預け

置き、明朝金員を持たせし人に、御渡を頼むとの事に、家主夫れには及ばずと云へども却て迷惑の由なれば、水晶を箱に納め封印させて預り置き腕車にて、送り歸したり斯くて其翌日金員を持參せぬ故、不審を起し尾張町林屋を問ひ合すに、左様の人は止宿せぬとの事なり、横濱を問ひ合すに、矢張り虚事なり、借ては騙られたに相違なしとは思へども、外聞悪しければ、成る可く秘し居たるに、何時しか人の耳に入り若松屋は金を騙られたと、噂どおりなり、家主口惜しく思ひ何かにもして、腹慰せんと心構への折柄兼ねて評判能き岩谷某等の店頭演説に来て廿日の夜銀座に於て聞かると聞きしかば、是ぞ好き時機なりと、傳手を求め、辯士に加はり「騙賊を注意せよ」と云ふ題にて物じて騙賊に遭ふは此方の心より起る即貪慾と色慾又は己の好む所を解する所に持込れるなり、現に我等も子の愛に引かれて四百圓騙取れたも、各々方も用心なされ跡に残りて腹立しきは此偽水晶なり打破て御目に懸けんと、陳述し手に持し偽水晶を地上に抛ち粉に砕いて歸りければ、此事世上に忽ち知れ新聞にさへ奇なり妙なりと批評するに至れり、然るに二日計りを經て、商館の番頭と云ひし男若松屋に來り、先達は始めて參り御馳走に相成り辱けなし、殊に其節借用の金員疾に持参すべき處、

該夜大坂より電信來り、直に彼に地派出致し漸々昨夜立歸りたる始末にて、何共申譯なし即ち金員を持參したれば御預け申した水晶請取りたしと金四百圓を差し出すにぞ、家主は承知して紙幣を極めて請納め、幅紗包を取出し、其節念の爲め封印なされし儘なれば御受取下されと聞て愕く彼の男は、封印を捨るに少しも違ひなし、今は餘方なく水晶を受取りて濫々立歸りける是れは此れ水晶を碎きし瞬を聞き、借入金を持參して、困却させ又も何程か取込巧みなりしが、若松屋は楠公諸葛公の智恵を校り出され、裏を設けて終に元金を取返されたとは、騙賊の厄年、若松屋の譽れ然し轉ばぬ先の杖用心に若かず

○黄金の獅子

恒の産なき人にして、小才覺あるは却つて其の身を過るの種なりされば、教育の輕忽にすべからざる亦論を待たず、彼の孔子が恒の産なければ、恒の心なしと申されしも萬更理なきにあらず、茲に記載せる珍事は東京淺草の、片邊りに住む山門才助とて、年齢三十七八の人物は、是れと定めし生業なけれど玄關付可なり、奇麗の家を構へ下

女二人迄召使ふ、有徳の暮しと見ゆるも、其實寸毫の財産なき身にて紳士豪商に旨く交誼を結び、辛き世を胡磨かして送るものなり、近き頃麹町の豪商古屋頑兵工術の長男放太郎此の家を訪へ家主才助に面會して甚申兼ねた義なれども此程中朋友の交際で吉原へ通へし入費の金貳百圓程不足すれば、何れにてか借用の周旋顧み度く最も抵當の品は、今朝寶物藏より、盗み出して持參せりと袂より取り出す幅紗包みを開くに金無垢獅子の香爐細工の巧妙と云へ天晴れ大金の代物なり才助委細承知して兩三間聞き合せ否やの返事致さんと、香爐を預り放太郎を歸せし後獨り熟々考ふるに、此の香爐は世に珍しき、古屋の寶なり、金口入して返へさぬ時は、決局親頑兵衛の耳に入り己れの信用に係る譯殊に二百圓世話しても、謝金は五圓か拾圓なり、是れに付き能き金儲けはあるまいかと、案じるよりは、産出したる一計略直に香爐を携ひて我家を跡に出行きしは、金貸屋にはあらずして、金銀細工人白沼作平方なり幸ひ、作平在宅なれば香爐を示し此品に類似の物西洋人の所望ゆへ、地金は眞鍮を用へ形は勿論重量をも寸分違ぬよう調製へて鍍金に念入れ大至急間に合せ貰いたしと、顧み置き立戻りしが五日過ぎて出來上りしと持參する偽物を我家に眞物と見分け難き巧妙の手術に才

助の脱び一方ならず、斯くて偽物を我家に残し真物を懐中して人形町通りに名有る古物商、須古井仁太郎方に至り香爐を出し、才助「私は此の香爐を賣り度へが買つて下さらぬか、實は眞鍮でこそあれ先祖より傳りし寶物ゆへ、賣りたくはないが何分至急の金の入用に困るから」と餘儀なへ斷に番頭心得手に取り見れば至極結構な品なり、店主に見せて後御相談致さんと與に持行き、店主共々鑑定して見るに紛ふ方なき金無垢の香爐重量二百目あれば當時の金相場にして六百圓餘の品なれど持主は眞鍮と思ひ居る様子ゆへ廉く買へ取つて呉んものと番頭店に出で、番頭「イカ程なら御拂へになりませうか」才助「先刻も斷す通り家に傳はる寶物ゆへ、直段は確と分らぬが或る人が百三十圓迄に價を付けたがどうも夫れでは、二百圓なら手離す積り、又最早四百圓餘の純益になると思ひど亦々與へ行き店主に謀り百三十圓と言ふた辭を題に百五十圓なら引取りませうと云ふも才助には小首を傾け、才助「アモ夫れでは手離し爰る然し家内でも談合して參るかも知れん、大きに御邪魔、取もソコ」立坂りたる我家には彼の放太郎来て金の首尾を待つに之懐中より香爐を出し今日まで所々聞合せても思ひしき貸入なければ香爐を御返し申すとの事に、放太郎は失望せしが是非なく香爐を請取り去りぬ其の日の火燈し頃才助は新たに調へし眞鍮の香爐を持ち又ぞろ須古井仁太郎方に到り、才助「家内でも談合したが何分金子が入用だから、百五十圓で手離しませう、左も心なく述べければ、番頭は香爐を與に持行き古物商の手續例の如く執行の紙幣百五十圓を才助に手渡したり夫より十日計りを経て古物商集會の席へ彼の香爐を持出し自慢半分に鑑定させれば、何れも眞鍮減金との事に打擲き能く、鑑定すれば成程眞鍮に相違なし緒は二度目に取替へたものと心付き才助を捜し求めて談判を遂るに最初より眞鍮と申した事故今更苦情がましき儀は知らぬとて相手にならぬは止むことを得ず、警察へ訴へたりとぞ、

○來春の廣告

静けき御世の年の暮、本町通り現金掛賣一切不仕候の張出し御家流にて黒色濃きは朝を並ぶる呉服屋の何れを視ても一様なれど店に列し、和漢洋の織り物絹布毛布木綿の類に至る迄家々にて、品の善惡の直段の高下あるものと見へ、一月の初着慶喜の物の風呂敷をも、彼の正直屋に限るぞと、云ひ合はれど一層御客の多き右側の大師には

無役の手代三四人備へ置き小切れ一ツ紛失せぬよう油断なく目を配れば自ら掏摸萬引の徒は、立入る事難しとかや、或る日の火燈頃人品賤しからぬ、年齢三十計りの男此店に入り來り、南部縮緬七子甲斐絹杯を出させ彼れ此れと直段を聞き合せ、鼠甲斐絹四五疋を取り散し能々見る折柄番頭が横眼する間に左りの袖口より鼠甲斐絹一疋懐中へ引き入しを無役の番頭の早くも見付けて、此男の側に摺り寄り袂を捕へ、「御客様御戲業をなされては困ります、只今懐中へ御入れなされた甲斐絹を御出しなさい、何も警察などの事は好みませぬ、品さい御返しなれば此度は内済に、」オイヤ々番頭さん何だ、私が甲斐絹を盗んだと失敬千萬な、何を證據に人を馬鹿にした、「反對に喰つて掛られた手代は血氣壯んな氣短かの物とて大に立腹して聲を振はし、「何だ此野郎、客商賣の事なり外の御客の邪魔にもなるし、内々で済して遣らうと思へば失敬千萬な萬引だ、人を馬鹿にしたとは手前の事だ、他の店ならイヤ知らず此店にはな己れの様な張番が何人も在るが知らないか、早く品物を返して仲間の奴にも此店は駄目だと吐露せ、ぐづぐづすれば警察だぞ」と諍論の聲高ければ他の客も目を附ける往來へは人が立つ手代二三人彼の男を引捕へて動かさず尙何か言譯するを耳にも掛けず、懐中へ

手を差入れ甲斐絹を引摺り出して品さへ取返せば警察の手を煩はすまでもなしと往來へ押出すを、彼の男は以ての外に腹立ちて、「此店は正直な宅かと思たに人を無實の賊名呼ばわり、オマケに人の懐中物を奪ひ取る、此店こそ強盗だな、」何強盗だと此野郎氣違ひか知らぬ、「如何にも此店は強盗に違いない、今己れの懐中へ入れ置いたは、鼠色の甲斐絹此の一軒置いて隣りの甲州屋から買ひ求めた品だ、其請取書はコレ是れだ、其甲斐絹を甲州屋へ見せろ、飛んでも無い奴等だ此請取書を見ろ」と手代の目先きに差附け見すれば、偕ては萬引と思ひしは此方の誤り七度尋ねて人を疑がへとは此事か飛んだ粗忽な事してけりと、手代共は面見合はせ初めての勢何處へやら駈り果たる有様に、「何うだ一言の申譯は有るまい、全躰己れを誰だと思ふ、當鎮臺の御用を勤める石田屋金次郎様だぞ、聞けば先刻警察へと吐かしやわがつたが、警察へ出るならサア來い、人を手込めにして懐中品を奪ひ取つたりして能い物か、白い黒いを分けて貰はうサア來い、然し己も強ひて事を好みはせぬが人に難僻附けてロハで済むと思ふか、」最前よりの争論の始末を黙つて見て居た番頭忠吉、味に搦んだ辭を時宜に腰を屈めて男の側へ近寄り様、何か男の袖へ押入れ笑顔を作りて兩手を揉みながら、「へい入

「おしやい、エ、先刻より彼所にて委細の次第承わつて居升た、イヤハヤ手代共の粗忽千萬、貴殿様に對して何共申譯の無い次第なれど、年の暮には兎角萬引共がイヤ決して貴殿様が左様な御方では御座いませぬが、新參の手代共が目違がいぞ致し誠に何うも、何卒此度の所社平に御容赦を、以後は必ず鹿相なき様申聞け升。」と持ち前の逡巡口で陳べ立つるに説き伏せられたか、懷中にせし右手を出して腰の邊りを撫でながら俄かに打解けし躰にて、「番頭さんの様に言はれれば何も警察へ出ようとは申さぬ、中々勘辨の出来ぬ所じやけれど、番頭さんの面に死じて此度は了簡して置くから以後は氣を附ける。」と手代を白取付けて立去りし男を見送り漸やく安堵した手代等は皆も不思議な事もあるものかな、正しく袖口より引入れしを見認めて捕まいたるに打取直ぐ番頭は高慢顔にて、「今のは矢張り騙賊の新手さ、能く氣を附けぬと困るよ騙りも段々上達するから、何に此方でも新趣向を思ひ付き、來年の初賣りに撒く廣告の摺物が紙幣に似て居るを幸ひに、十枚ばかり紙に包み袖に入れたら夫れを紙幣と思つて歸り居つた。」と道理で番頭さんが挨拶に出たら大層にこゝして歸つた、「然し斯んな奴が來たのは店の不吉、彼の廣告を見て初買に來れば好いが、ハクシヨ、ア、仲間」と話しをして居る相な小僧や鹽を詩け、「」

○廣告の效能

新玉の年を祝ぶく門松の緑の色に入々の氣も自づから勇み立ち、初商いに市街の賑ひ殊に本町通り呉服屋は何れも店に客の山爲す正直屋、去年の暮れに手懸りして手代は更なり小僧までが心を配はり、先程より買物に來し年頃ろ四十許りの男は如何にも迂論な奴と思ひに違わず、彼是れと見立品の中より鼠甲斐絹一疋引纏ひ様一目散に逃げ出すを、下ツコイ左は爲せぬと引捕らへた手代、「番頭さん、此奴も矢張り鼠甲斐絹、然も二疋も懷から出懸けて居る、是れは本店の品に相違ない、品を取返したら通がしで遣り升しやうか、」イヤイヤ、正月早々から不吉と、云ひ又何の様な言掛りを云はない者でもない、小僧警察へ行つて巡査を呼んで來い、「何事かど一人立ち二人立ち大勢の野次馬を押分けつ、盜賊と云ふた聲を小耳に映みて、靴音高く入り來るは羽織袴の男、拙者は當所警察の特務巡査琴尾護と云ふ者だが、今聞けば盜賊とか何ふ云ふ次第心や、」イヤイヤ、是れは丁度好い所へ御出張下さい升た、實は此の男が鼠甲斐絹と二

匹取り升たのを、ヘイ手代共が取押へ升たので、何卒宜しく御取計らいを、」特務巡査は黙頭きつゝ盗賊の方へ打向ひ、「其方姓名は何と申すコレ顔を上げて返事せよ、」ヘイ金賀欲と申升、「只今番頭の申立に相違ないか何うだ、」ヘイ賊に何うも恐れ入升した、「此の申立を一一手張に普留して特務巡査は袂より用意の繩を取出し、手早く盗賊を縛めて引立て行かんとせしが立留まり、「此賊めが盗みし品は如何致したな、何其鼠甲斐絹か然らば證據品として一應警察へ持ち參るから、後刻實印を持つて警察へ出頭するが好ろしい、店主で無くとも番頭の中で代人でも、」と叮嚀に説き示し名刺と甲斐絹を引換へて、打萎れ居る盗賊を引立て警察の方へと出で行きたり、斯くて心利きたる手代を撰み警察本署へ出頭させ、受付所に至り先刻は御苦勞様呉服商店正直屋庄兵工の手代氣羽菊藏で御坐り升、御差圖に従ひ印形持參致し升た、と云へど警吏は不審顔、何事か願ひ出たのかと尋ねに手代長まり、萬引の一狀事落もなく申述るに警吏は眉をひそめ、して其特務巡査と云ふは如何云ふ人だと云はれて氣が附き名刺を示せば、當署詰の巡査に斯様な名前のはなしと聞きて愕く手代菊藏早々立歸りて斯くと番頭に注進すれば、借は案に違はず初買に來をつたか去年の暮の一匹を僅かの間に倍にし

たとは道理で鼠算に縁のある鼠甲斐絹とは洒落所でない油斷大敵の世の中なりける

○新宅披露

東京で第一等閑靜な土地某町に數軒の控屋所持する中野好三方へ書生鉢の男と馬丁鉢の男が來り、今度某省參事官が命に依り吾等は借家を捜がす者だが御前の控家が明いて居らば借入れ度との申込に、幸ひ玄關付上等の分が明いて居る故、店税一ヶ月二十圓と極めて貨渡す事に相談決し、直様右二人にて掃除をなし門口には某縣士族山尾謀の札標を掲かけ、主人は今夕馬車にて御到着の筈なればと、其處此處の鉢藏を繕ろい書生鉢の男は玄關にて新聞など讀み居る内、馬丁鉢の男は掃除を終て何かの買物に出で行きしは本町に名ある呉服商黃金屋の店どこぞ知られぬ、「御免なさい私は杉山町の山尾から來ましたが、主人が衣類を新調するので反物が見度いから持つて來て下さい、」ヘイヘイ、毎度難有様杉山様とあつしやるは、ヘイ此頃御轉宅のヘイ、左様さまで、委細長まり升た、」と馬丁を歸した跡で當節の御客は官員に限るから、決して粗忽のなき様にと手代に申含くめ絹布類數十反を持せ遣りしは杉山町山尾宅なり、ナル

程玄關付き綺麗な家跡に山尾謀の標札は手代にも讀めしと見ゆ、内に入れば玄關前の間に新聞讀み居る書生ありて、手代の下す風呂敷包みを受取りし書生は主人に見せるから暫らく其處に待居れど、横柄に言放ちて奥の方へ持ち行きしまし、一時間餘に成れど音沙汰なければ、恐るゝ奥の間を覗き見るに人影の在らざるのみか、諸道具とて一個もなし、唯煙草盆が坐敷の中央に一個留守するのみなるにぞ、手代は唯々口ア
ンシリ

○一言賊を走らす

河内山宗俊少年の時、或日村の祭にて親類に相かれ、其夜一泊しけるに、夜半に及び一賊抜刀にて宗貨の居間に押入り例の文句を以て宗俊に迫る、宗俊曰く吾れは此家の者にあらず、祭例にて招かれ一泊せるものなり、主人は未だ數名と共に二階にて圍棋を爲し居れり、イサ其處へ案内せんとして先きに立ちて二階に上らんとせば、賊は之を信と思ひ一散に逃走せりとぞ。

○各國人の氣象

信長曰　　啼かんなら殺してしまへ杜鵑

秀吉曰　　啼かんなら啼して見やう杜鵑

家康曰　　啼かんなら啼くまで待や杜鵑

右の三句は能く三豪傑の氣象を曰ひ顯はして妙なり、此れ古くより人口に膾炙するものなるが、今又是れに倣うて世界各國人の氣象を言ひ顯はせば

支那人曰　　啼かんなら放してしまへ杜鵑

米國人曰　　啼かんなら喰ふてしまへ杜鵑

佛國人曰　　啼かんなら此れも興あり杜鵑

獨逸人曰　　啼かんなら鳥ではないぞ杜鵑

茲に又西洋に在つてもこれに類せることありて、能く各國人の象分を知るに足る、即ち先づ酒を飲まんとて、コップの中に湯々を注ぎ入るゝに遇ま煙飛ひ來りて杯中に落ち、此時に當つて西班牙人ならんか突然烈火の如く怒りて、直ちにコップを投げつけ

ん、佛國人ならば又怒つて悉く酒を捨て去るべし、然れどもコップを投げるに至らず伊太利亞人ならば半ばコップを傾けて酒を蠅と共に流し去り残る半ばを惜し氣に飲まん、英國人ならば儼然としてコップを倒まにして命じて云はん、給仕更らに一杯を注げど、若し獨國人ならば、將に溺れんとする蠅を指頭に救ひ上げ、細かに蠅の様子を視察して後放ちやり、靜かに酒を飲まむ、魯國人ならんか彼れ欣然として云はん、好下物以て酒肴となすに適すと蠅相共に酒を飲み干さん、

○善因善果

パリの都に嘗て或る年老の紙屑拾ひあり、一日無情の風に誘はれて、病の床に就きけるが日數も經たぬ内に果敢なく黄泉へ旅立ちぬ、身寄どては唯一人の姪スーゼとなん呼べる者一人のみなり、此少女は至つて心掛よき娘にして、或乾物屋に下婢奉公を勤め、其給金の中より常々叔父を助けり、叔父の死し去りし時恰かも少女は婚嫁せんとする折なりき、其情人と云ふは主人の同業者の雇人なりしが、少女は急ぎ其許を尋づね、叔父の死去を告げ、且つ婚禮の衣裳を購はんとて貯へ置ける金にて葬式を營

みたく思へば、暫らく婚禮の期を延ばさんと云ふに、乾物屋の内儀も情人も打笑ひて貧民の事なれば老人の埋葬は政府の厄介に任せ置くこそよけれ、斯ることに金を費やすは誠に愚なりとて痛く嘲りたり、左れど少女は固く執つて動かず、是非共正式の葬禮を營まんと言ひ張りたれば、茲に一場の葛藤起り主人も少女の強情を怒りて奉公の暇を出し、又情人も執拗なる女なりとて縁談を破りたり、少女は重なる不幸に泣くく荷物を片付て、叔父の詫しき住家へ行き、永の年月一錢二錢積み貯へし金子にて、身分相應な葬儀を營み、諸行末如何にせんと干々に思を煩らはす折しも、此事を傳へ聞きし彼の情人の主人は、大いに少女の志に感じ人を以て結婚の事を申込み、少女は夢かどばかりに喜びて直ちに承諾し、さて叔父の形見に何か持ち行かんと思ひしも貧家の事なれば、是と云ふ目ぼしき品とてなく唯一匹の皮製の小猫残り、居たり、此猫は日頃る叔父が寵愛せし者にて、其死したる後も打捨つるに忍び兼ねて、かく皮を剥きて身邊に置きしものなりき、去れば今少女は此猫を持ち行かんとせしに、斯はソモ如何に不思議く、大變に重きに驚きながら力を極めて持上れば、如何なる機會か皮は破れてバラ／＼とあたり一面に輝やくは、大枚の金貨なりしかば、餘りの意外に二

人は呆れ惑ひながら、速ぎ集めて算へ見るに總じて一千弗の金貨なり、蓋し此金は多年叔父が節約して貯へ置きしものにして丁度少女の善行に報ひたる者なり、誠に正直な頭に神宿る東西共に違ひなきは因果の規則なり、

○忠勇なる兵卒

フロシヤ國フレデリツキ大王の近衛兵の中に、一人の勇氣勝れたる兵卒あり、此兵卒如何なる譯ありてか時計の鎖のみを胸に掛けて、其端に一個の銃丸を縛り付け置くが例なりき、大王兼て此事を知りたる故、或日わざと彼の兵卒に向ひて、其方は元來勇氣一途の者のみと思ひ居りしに節儉の道にも心掛くると見へたり、其時計は定めて月々の給料の中より貯蓄して買ひ調しものならん、と云へつゝ金剛石を以て飾りたる貴金の時計を出して兵卒に示し、朕が此の時計は今恰も五時なるが、其方の時計は何時なるぞと問ふに、兵卒は愧る色なく彼の銃丸を引出して、少官の時計は五時をも六時をも示し申さず、只小臣をして命を捨て、君に奉ぜよとの事をのみ晝夜に示し候と答へければ、大王深く其言に感じ、己が寶石入金時計を取つて與へ尙重く任用せりとぞ

○大將と伍長

亞米利加戦争の時の事にて、或日伍長某組下の兵卒に命じて、大なる材木を高所に引き揚げしめしに、重くして容易く揚る可き様子なかりき、然るに伍長は是れを見ながら、言葉もて叱かるのみにて少しも手傳はんとはせず、折しも一人の武官平服にて此處を通行しけるが、兵卒等の艱苦の状を見て伍長に向ひ、足下は何故に手傳ふことを爲ぬにや、と問ふに伍長は左も高慢らしく、拙者は伍長なりと答ふ、彼の武官は、借は足下は伍長殿なりしかさうとは知らず失禮を申たりとて、馬より下りて兵卒等を助け難なく材木を運び終りぬ、平服武官は再び伍長に向ひて言葉餘かに、伍長殿向後とても斯る事ありて人手の足らぬ時には早速惣大將に願ひ出で玉へ、惣大將には何時にても自ら出で、手助けすべければと言ひ終りて立去りぬ、伍長は斯くと聞くより扱は惣大將なりしかと、顔色を蒼くして驚くこと一方ならず、向後決して高慢の心を起さず、よく其部下をいたわりしとぞ、此の惣大將とは誰知らぬものなき英雄、ワシントンにて有りしなり、

○自作自受

昔シ、リーのアクリシエンタムの王アハタリスと云ふは、至つて残忍なる性にて罪人を殺すを見て樂みとせし程の暴君なり、時に鑄物師にてペリロスなる者、何が女王の氣に入らんとて一日王に向ひ、此頃不計面白考の浮び候、先づ銅を以て一疋の牛を鑄、其腹部に罪人を入れ外より火を焼き候はんには、中にて罪人の泣き叫ぶ聲恰も牛の吼る如く聞へて一入の御慰みに相成べし、此儀如何と奏しけるに大王深く喜びて、そは一段の慰みならん、急ぎ造らへよと仰せある、日ならずペリロス美事なる一疋の銅牛を造り上げ大王の御覽に入れける、フハラリス大王其牛を御覽ありて、あつばれ見事に出来あがつたり、此の上は少しも早やく試し見て慰まん、先づ第一着に其方みづから入りて試み見よとて、否やがるペリロスを引とらへて、無理に牛の腹の中に押し入れる可き、鑄物師のペリロスは遂ひに己が手にて造りし牛のために、己が身を焼き亡ぼされたりき、これぞ王に残忍きままれることを勤め、其恩典に浴せんとの野心よりして、却つて不幸を招きしものと云ふべし、

○澤庵和尚の訓歌

稻葉濃州、勤事の暇まなかりしに、或時東海寺なる澤庵和尚、訪ひ來りしかば濃州和尚に向ひ、勤仕の長の日ながひに退屈せざる教無きやと問ひけるに、澤庵直ちに硯引きよせ、

無ニ再此一日、寸陰尺壁

淺ましや思へば日々の別れかな

昨日の今日に又もあはねば

と書き與へぬ、此歌は彼の青年不ニ重來、一日難ニ再晨またあしたなど云へるものと異曲同巧にして、衆人の共に記憶すべき好訓歌と云ふ可きなり、

○枕草紙

或る高貴の家に年の頃ろ十五六とも見ゆる女のありける、深く學びの道に心をよせ、殊には最たく和文學を好みけり、一と日父に向ひて、枕草紙と云ふ本のいとめでたく

妙なりとか聞き及びつるが、吾らわも一卷欲しくはべる、と乞ひ出づれば、父はどみに受ひきて、いとかしとし文學全書中より求めやりなんと云へり、是れを聞きたる母文學を知らねば、枕草紙とし云へば、世にありふれたる猥やしげなる本の様に思ひいたく打ち驚どろきて、斯は吾が女にも似合はしからぬ事を云ふものかな、年妙なる女の左様の物讀むはよろしからず、と云ひけるとかや、

○仁齋佛を拜す

伊藤仁齋かつて一門人を従がへ、某寺殿前を過ぎ佛を見て即ち拜せり、遇ま門人怪み問ひて云く、先生平生佛者の説を排撃せらるゝに、今即ち却つてこれを拜せらるゝは何故ぞと、仁齋曰く説に於ては吾れ佛氏を非とすと雖も、其地を過ぎて其主に禮す、何の怪むところや有ると、今の世の外教徒等の留意すべきところなり、

○土中の黄金

或人死に臨み其子に遺言して曰く、我屋後の原野方一里、其内に一所に黄金を埋め置きたり、後ち汝ほり出せかしとて、言殘たり其子因て日々鍬を手にして開懸に従ふも終に其黄金を發見せず、然れ共深く發掘せし爲め從來荒蕪の原野も今や良好なる田地となれり、依て思へらく先きに黄金と云は蓋し此の謂なりしと然彼黄金を得たり、

○蜂の自殺

此程の事なるが、佛蘭西國のヘンリーと云へる人が、蜂にも一種の氣概有ることを發見せり、即ち蜂は甚だしく憤慨する時は、自殺するの氣象を有することを實見したるなり、氏は透明なる硝子器の中に一疋の蜂を閉ぢ込め、又ペンヂン（石炭を乾溜して得たるもの即ち石炭瀝油の一なり）を紙に浸して同じく此の器中に投ぜり、然るに此蜂忽ちにして大いに苦痛の跡を現はし、且つ甚だしく憤怒して、ペンヂンを浸したる紙に飛び掛りつゝ、恰も他の小動物と組打ちを爲すが如き有様を呈せしが、稍やありて仰向け様に刎ね返り、最早や是までなりと云はぬばかりの風情にて、其尻の針にて吾れと我が腹に突き立つること二三回にして、終ひに自殺を遂げたり、氏は尙ほ引續き二三疋の蜂を試みしに前者と均しく苦痛憤怒の結果皆な自殺を遂げしと云ふ、

○耐忍の論

何時の頃ろにや有りけん、一人の村夫子が無學文盲なる人を諭して云ふ様、兎角世に處するには、耐忍の二字程肝要のものはなし、故に能くく此の耐忍の二字を守らる可しと、文盲なる人これを聞き、稍や不審の体にて小首を傾け、指もて數へつゝ、エたいにんとな、若し先生たいにんにては四字にて待らずやと云へば、村夫子云はく借ても愚昧な人かな、耐忍とはたへしのおど讀みて二字なるにと、文盲者亦これをきき、何にたへしのおどな、然らば又一字増して五字となり候、村夫子は稍々怒りを催し、ハテ借て汝は解の譯らぬものかな、實に女子と小人は諭しがたし、汝等如きは形ちは人間なれど、其智恵は猫か犬の如きである、と散々に罵詈すれば、彼の文盲なる男從容笑つて云ふ様、何とでも御勝手に罵しられよ、私は能くたいにんの四字を知り又たへしのおど五字をも知り侍れば、假令如何様に悪口せらるゝとも能くたいにんして決して腹立ち申さずと、答へければ流石の村夫子却つて大いに恥ぢ入りしとぞ、

○夢の利子附

英國にウイリヤム、ヘンリーと云ふ人あり、开が西印度の太守たりし時、偶々本國より美服數襲を贈り來れり、折節其坐にモハークス五民族の酋長ヘントリックなる者居合せり、彼れ一目みるより、文明國の燦爛たる美服は、此の野蠻國に於ては最も珍らしく、心中密かに何うがなして彼の美服一かさね欲しきものぞと思ひしが、さすがに其れと口外も爲しかねて止みしが、酋長退いて後も頻りに欲しさに得耐へず、其後數日を経て酋長又も彼の太守の許を訪ひ借て云ふ様、太守閣下よ世には不思議な事も有るものにて、小官昨夜豫てしも本國より閣下の處に送り來りし所の美服の中、开が一襲を閣下の手づから、小官に賜わりたれば這は忝なしと押し戴き、歡ぶ心に胸どいろけば、噫な口惜しや眼は潤と開らきて目醒めたり併し今賜はりしは美服の若しも身邊に有ることかと、坐中を視廻はせども唯だ薄暗き殘燈の、枕頭にあるのみにて其賜物の影だに無し、借ては今のは全く楠柯の一夢なりしかと、最どい遺憾に思ひしと、太守は既でに其意中を推し、其衣服中にて最も美麗なる物一襲を取出して、是れを酋長

に與へければ、酋長は満面の喜色言はん方なく、頻りに謝辭して拜領し去れり、斯くて數日の後、太守と酋長と再び相逢ふことの有りけるに、太守は從容左あらぬ牀にて酋長に告ぐる様、如何に酋長殿よ、世には亦奇妙の事もあるものにて、予は昨夜足下より、モハアクス河畔の地五十エーシルを頂戴せし所の夢を見たり、豈に奇妙なることにては候はずやと、酋長之を聞き響きに已れが實行せし夢の例もあれば、已むを得ず其五十エーシルの地を割きて、太守に與へんことを約し、且つ謂へらく、嗚呼閣下の夢見ることは甚だ嚴格に過ぐるに候はずや、我が先夜の夢を數日の中に數十倍に利子を附けしとは、就いては小官向後決して閣下の夢を見まじと決心致せし故、閣下も又願はくは爾來私の夢を見ぬやう致されたとしと、言ひて苦笑しけるとなん、

○肉柱

何時の頃にや有りけん、昔し支那に於て二人の半仙客相對して頻りに黒白を圍んで有りしが、开が傍らに觀て居し一人、中頃ろに到り大いに晒つて云ふやう、噫吾れは此席上二個の肉柱の時々微動するを見て、一個人を見ずと、其評言に二人の半仙客俄か

に我れに歸り、這は亦奇怪千萬なる事申さるゝ者哉、今の言能くも聞へざりしが吾々兩人を指して、肉柱なりと云はれし理由承まはり度と問ふ、傍人答へて曰はく、左ればなり其事なり、抑も人なる者は、精神と肉軀との二者相ひ和合するの謂にして、若も其形骸のみ存して其精神なき時は人間とは名けず即ち肉柱なり、今兩君の此席に在るを見るに、唯形骸のみ在つて其精神は既でに飛び離れて、盤面上黒白の間に在るの如し、是れ其の肉柱なりと云へたる所以の理なりと、兩半仙客是れを聞き、噫然として亦言ふところを知らざりきとぞ、

○綽號の三變

昔し京都の邊りに良覺僧正とて在はしけるが、此の僧極めて腹黒ろき性なりしかば、近傍の人も善くは言はず、其側らに大いなる榎木のあればとて、人皆な是れを綽名して榎木の僧正とは云ひなせり、良覺これを聞き、憎くき俗輩の惡口かな、イヤ其の口にて戸を閉ざし呉れんと、無慘や彼の榎子を根元より、切り倒し終ひけり、去ればこれにて世間の口を戸閉せしと思ひきや、彼の木の根の残り居ればとて、人又更らに綽名

して、切株の僧正と云はれたり、斯に於て良覺又愈々立腹して、彼の切株の根を堀り棄て、仕舞たり、然るに生憎や开が跡に、堀池の如き大いなる穴の生じければ、人亦堀池僧正とこそ結名せしとぞ、是の僧正こそ實に葉を摘み枝を折ることのみ知りて、直ちに自己の根元をたづぬる道を知らぬ流類なる可し、

○モーボルク従僕を慰む

時は西暦千八百十二年の事とかよ、有名なる佛帝ナポレオン第一世部下の將校、テツア、モーボルクと云へる有り、獨逸ライプツィツクの戦争にて、不幸にも一脚に重創を負はれたり、斯に於て軍醫の診察にて其一脚を切断することとなれり、然るに其將校の氣強なる神色自若として、毫も苦痛の色なく、談笑の間に其が施術を受けられき、此時其の従僕は傍らに在つて、主人が一脚を失ふを見て悲みに耐へず、ツツと泣き出すを見、負傷將校呵々大笑して云ふやう、噫是れ汝鈍者よ、今日に限りて偽善的の涙を流すを止めよ、汝亦何をか歎げく、汝は是れまで二個づゝの靴を磨がきしもの明朝よりは確かに一個の磨きを減じたるなり、是れ汝が勢力を省きたる得分にては

あらぬか實に汝は幸福なるものよ、と此の大截斷大施術の時に臨み、洪然灑れけるを従僕面を外面向けて苦笑し、居會はす人々其大膽強勇に驚歎しけるとなん

○木戸孝允淨瑠璃稽古

人往々にして意外の隠し藝のあるものなり、茲に維新の元老たる木戸孝允が、未だ桂小五郎とて長藩の一寒生たりし時、一時消閑慰みの爲め、壯年同輩の士と共に、只ある横町の音曲師の許に行き、淨瑠璃の稽古を致されたるが、元來敏捷の小五郎殊には其の音聲は、天然の美音を有せしことにて、其上達極めて迅速にして往々先人をしのぐの勢なりき、一日師なる音曲師、彼れに語つて曰う様、卿の咽喉決して尋常にあらす、今一と息せば苦勞人の本職とも爲り得るの見込あり、宜しく勉勵する處ある可しと、小五郎之の言を聞き雲時が程黙然として考がへ居られしが、既でにして慨然として言ふ様、御師匠今日限り予は斷然淨瑠璃の稽古は止めにせん、師の厚意は實に耐するに耐へずと、師匠此の言を聞き大いに驚き、ソワ又如何なる次第にや今一と息勉むれば決定して獨立獨歩するを得るの見込の有るに、中途にして止めらるゝとは如何な

る御心得にや審かしき限りにこそと、小五郎言ふ、左ればなり其の疑ひは左ることなるが、予の咽喉の素生好くして今少しの稽古にて本職とならるゝとの事なるが、予が前途は大いに他に志す所ある身、豈に淨瑠璃の爲め身をあやまり碌々たる音曲師なる身分を以て終る可きものならやんと、即日誓古を止めて以後再び音曲を口にせざりきと、今や世出世とも各自其の身の本職を忘れて徒らに未技未學にふける多き以て三省するの好話柄たる可し、

○製 金 術

昔し羅馬に一人の金細工職ありけるが、不計黄金を人造するの術を發明し、其類未と具して時の法王、レオ第十世の許に送り、密かに其報酬を問ふことを期し居たりき、既でにして法王の敕使來り何がな包みを渡しければ、彼の金細工人偕々こそ來れり、去るにても其品物は何ならん、反物加器か、否なく左せるつまらぬ物にてはあるまじ、必ずや多くの金銀にてやあらんとて、満面に笑を浮かべ取る手遅しと封押開らきて實見すれば、豈に圖らんや金銀寶石の類は一個も出でず、唯是れ一個の財布のみ現

ける、又出る書翰を讀めば大意に云ふ、足下は素と製金の術を發明せられし程の人故に、敢て他より是れを得るの必要無かる可し、只要する處のものは自ら製出せる多くの金を、入れ藏む可き財布ならんのみ、因て聊か是れを贈るのみと、之を熟讀せる金細工人は、呆然自失恰も棚から落ち來つて口中に飛び込む牡丹餅と、望んで然も得ざるものに似たり、

○矢部駿河守奸商退治

天保年間に於る饑饉の慘狀、今更ら言ずもがた、此の機に乗ずる奸商輩は、百方米穀を買ひ占め、以て法外の暴利を占めんとの悪計を爲すに、官に於て法令を發して之を嚴禁すれど、奸商輩増々巧みに隱密手段を以て尙も米穀を買ひ占むるに法令其効を奏せず、四民益々困苦を重ねるに至る、時に大坂奉行矢部駿河守大いに奸商を悪くみ、嚴重に法令の厲行を勤めしかば、奸商等は大いに恐れ買占めの米穀を悉く倉の奥に秘し藏くし、井が入口には山の如く炭俵を積み重ね、詐りて曰く之れ炭倉なりと、駿河守は其の實際を探知して、井が手下の與力同心等を市内諸家の商庫に派遣して、急に

彼れ等の炭倉と稱する物悉く之に封印を施し、官許を経ずして開らく能はざらむ。既にして駿河守忽ち江戸に召されて、勘定奉行となる。幕府は旗下八萬の士に米穀の貸與を爲すに當り、當時の幕府の力を以ても、容易に之を辨ずること能はず、多くの勘定奉行額を集めて相談なせど、終に其策無く殆んど困難の際、駿河守、易き事の如く獨り之を引受け、急に人を大坂に馳せて、公儀より炭の御買ひ上げなりとて、嚮きに封じ置きし所謂炭倉なるものを開かせ、炭の價を以て皆な米を買ひ上げ、直ちに江戸に運送して、御貸米下渡しに用ひられしに、驚きたるは大坂の奸商にて、多くの米穀を炭の價ひにて買上げられし事とて何れも皆な非常の損失を爲したりとぞ、是れ所謂大欲は無欲の謂にして、駿河守の奇計亦以て感ず可きなり、

○癡人大竹の料理

支那は非常の大國とて其が北部南部は、全く別天地の如く氣候の相違有り其他の萬事萬端異なる點甚だ多し、左る程に北部に住する一人の男、遇ま江南の地に遊びけるが、何物とも知れず己が寒國にては見聞せぬ、幾枚となく皮を着して土中より突出せ

る一物あるを見て、這は珍らしきものなりと怪んで人に問へば、此れこそ笥子と云ふものにて、其肉は至極脆かにして之を煮て食へば、甚だ美味なる由を言ひ聞かされ、大いに喜び其の一本を、根こぎの儘にて買ひ求め、携へて旅店に歸り其儘其夜庭上に置き、翌日早朝起き出で見れば夜中の雨にて根が付きしか、忽ち數寸延び居たり、北人之を見て思ふ様、此の様子にては數十日を待ちなば、必ずや大いに生長することならん、然れば其時を待ち切り取つて喰ひなば、思ふ十分喰ふこと出来る上分別ならんとて、其儘にして數十日を待つ間に、彼の笥は漸やく生長して既で皮を脱し、枝を生じ亭々として雲を凌ぐの勢あるに至りしかば、今はとて鋸を以て之を切り倒し、釜中に投じて之を煮ること三日三夜に及びしが、何が偕て青竹の事とて固くして容易に齒が通らず、終ひに最初之れを教へし人を以て、己れを欺きしなりとて、大いに是れを怨みしとかや、實に癡人面前には夢を談じ難たしとは是れ等のことをしも、言ひしものなる可し、

○中村富士郎の節約

昔日難波の名優にて、中村富士郎と云ふは、中々の大節儉家にて、日頃我が用ふる所の巻紙は、諸方より來れる手紙の端の开が餘白を切り取り、之を接ぎ合はせしものを用ち居たり、一日此の富士郎、最と小さき紙を更らに細かく切り裂き居る所へ、偶ま知人尋ね來り、之を見て最と不審がり、开は全跡何に致さるゝのかと問はれて、左ればなり我れ日頃用ふる手紙は、別に買ふこともなく、常に諸方より來れる書翰の餘白を切り取り、开を繼ぎ合して用ふることなるが、餘り小さくて用ひられぬ分は、是れこの通り細かに切りこまざき、澤山溜め置きて後に、芝居の雪にとて賣るものなりと、答へければ聞く人々は一驚を喫したりと云ふ。

○米の出所

昔し支那に蔡京と云へる一紳士あり、其家最と富豪にして子孫皆な富貴の中に生活して、嘗て稼穡の何たるやを知るなかりき、一日蔡京多くの子孫を膝下に集め、穢れに之に告げて曰く、汝等の日々喰ふて其身体を長大にする所のもの、之を米と云ふ、抑も此の米なるものは、天より降るものなるか地より湧くものなるか、何れよりか飛び來るものなるか、各々試みに之を言ひ當つ可し、當りしものには好き褒美を與へんと、其言未だ了らざるに一見遠かに對へて云ふ、御父さん其米は白の中から出來るものだよと、更らに又一見の曰く、否な〜御祖父さん、其れは白の中からでなし全く麻ろの中から湧くものだよと、蔡京之をきいて阿々大笑せりと云ふ、噫々富豪の兒の世事に暗き先づ〜かゝる實況なるべきか、

○婁師徳の教誨

支那唐の世に、婁師徳と云へる人あり、字を宗仁と名づけ人を爲り頗ぶる寛仁大度、嘗て人に向つて、耐忍の徳を説き聞かすに、人之をきいて曰ふ様、然り若し他吾れに向つて睡をなすあらんか、我れ只自ら之を拭ひ黙然たらんのみと、宗仁曰く否な〜其は未だ以て至徳と爲すに足らず、素と此時に當りて之を拭ふは、偶ま以て他の意に逆らい以て増々其怒りを強ふする所以のものなり、故に其睡は敢て拭ふを要せず、唯莞爾として之を受けんのみ、時久しからずして睡は自然に乾くもの敢て亦拭ふをしも要せざるなりと示せしかや、忍辱の修行茲に至つて又極則となすに足るべき乎、

○蜀山人五條の橋に題す

太田蜀山人、曾て京都へ登りける時、名所舊跡を探り見んとて、先づ音に名高き五條の橋に差しかゝりけるに、思ひきや其の名は實の名ばかりにて、橋の板強たく朽ち果て、开が上を少板もて剝ぎつくろいて有りき、如何にも豫想外の有様に蜀山人は、糖がて筆取りて斯くなん、

來て見れば流石みやこは歌どころ

橋の上にも色紙たんざく

○八代將軍の鐵面皮

徳川七代將軍家繼公、薨去したまひて其世嗣なし、斯に於て尾州、紀州、水戸の三家相會して、諸臣と共に之が後嗣を撰定す、若し是が順序より言へば、固と尾州侯之が後嗣たる可きに、而かも其心中に於ては、三家の侯皆な共に其後嗣たらんと欲す、是に於て乎三家相會するも、各々沈黙主義石佛を學んで敢て先づ口を開く者なし、斯く

ては果じと尾州侯、其心中偷かに思ふやう、我れ先づ紀州侯に譲らば、彼れ亦人心の義理、必ず押返して吾れに譲らん、然らば其時を機會に我れ之を受けて、八代將軍として天下に立つべし、亦誰か後ろ指を差するものあらんと、心算既でに決し素知らぬ顔にて、此の後嗣は宜ろしく先づ紀州侯、之を御受けあつて然る可しと云ひ出で、偷かに紀州侯の押返して譲るを待てるに、豈に計らん紀州侯、早速に御受けをなして、左様で御坐るか、折角尾州侯の御眼力にて拙者を推撰致さる、からは、御言葉返すは却つて無禮、仰せに従ひ身不肖乍ら、七代將軍の御後を嗣ぎ申可しと、一も二もなく御受けに及びければ、流石の紀州侯も今更何と致度もなく、又水戸侯初め其他の元老諸侯も尾州侯の推撰とて、彼是言ひ出る由もなく、其儘到頭紀州侯、八代將軍職に就き、八代將軍宗吉公と云ふに至れり、時しも落首するものあり曰く、

世に處してづうくしきも御徳川

紀州蜜柑のかわのあつとよ、

○天道善者に幸す

一人の正道なる男有りて、或夜の夢に屋後の畑中より、黄金を堀り出したるを見て、
 覺めて後是れを隣人に語りたり、然るに隣人は至極欲深く性悪きものなる故、此の人の
 夢物語を聞きて大いに心喜び、其夜密かに彼の畑に行きて、其所此所と連りに堀り
 し所、果して何やら鍬の先きに觸るゝ物有り、尙深く堀り試みれば、奇妙く一個の
 壺を發見せり、且つ驚き且つ喜び急ぎ近寄り、蓋を開きて見ると同時に、中は黄金と
 思ひの外、不意に多くの土蜂飛び出し、面ども云はず手足とも云はず、ブツブツ來つ
 て刺しければ、流石の貪欲者大いに驚き且つ怒り、悪くむ可きは隣家の老爺かな、い
 で此の返報して呉れんとて、やがて蜂の再び静まり、壺中に入るを待ち、其蓋を爲
 して手に取り上げ、彼の隣家の裏窓より、室の中へと投げ込めば、忽ち閉ゆる黄金の
 散る音、チャラ／＼／＼、今しも寝て居た正直男は、此物音に腹驚して起き上がり見
 て、ヤア黄金が天から降つて來た………

狂歌

○明月

十五夜の月はまるく萬金丹、のぼるにも好く下るにもよし

○無遮會

山城の瓜や茄子びをそのまゝに、手向となれや鴨川の水

○清濁

世の中は澄むと濁るで大ちがい、蛇は人を呑み茶は人が飲む

○快樂

たのしみは後に柱前に酒、左右に女ふどころにや金

○佛法

佛法は有けるものよ隣りの、親父のさげし火打ちぶくろに

○同

佛法は鍋のさかやき石のひげ、繪にかく竹の友ずれの音

○懶惰

一二三しごとを六に爲ぬ人は、七八置いて九がすなり

○寶槌

吾が槌は寶打ち出すつちでなし、のらくら者の頭うつ槌

○世苦

世の中は何にたどへん鍋のしり、くらう爲ぬ日は一人もなし

○差別

世の中は何に譬へん牛のくそ、よくく見れば段々がある

○名相

名に迷う人の心の愚かさよ、喰うて味知れおぼぎ牡丹餅

○佛

佛とは心もならず身もならず、成らぬ者こそ佛なりける

○詠歌

ふろふきを不老富貴と云ひのばし、大根喫ふのを大黒と讀む

○幻夢

夢の世に夢に夢見る夢人の、夢物語りするもゆめなり

○老衰

梅干のやうな婆々も花咲きし、昔は色も香もあつたげな

○高貢

高いとて自慢を駿河の富士の山、時々あたま春風ぞ吹く、

○厭離穢土

にやんと云ひわんと云ふのも膝の上、斯處を離れて行けや淨土へ

○盛衰

あがつたり又落ちぶるゝ者と知れ、つるべの水も無駄に使ふな

○半風子

風とて左まできたなく思ふなよ、身より出づれば吾子同前

○人心

丸くとも一と角有れや人心、あまり丸きは轉びやすきぞ

○水泡

假りに出て假りにかくるゝ水泡、はかなきものは吾身のみかわ

○饒舌

人の身にかゝることでも何事も汲み出したがる裏ながや井戸

○謙讓

差出る鋒先きをれゝ物ごとに、己が心を金襴として

○安閑

笛吹かず太鼓たゝかず獅子舞の、後足になる胸の安さ

○實語

八百の嘘を上手にならべても、誠一つにかなわざりけり

○人欲

欲深き人の心と降る雪は、つもるにつれて路を忘るゝ

○坐禪

坐禪せば四條五條の橋の上、行き來の人を深山木に見て

○釋迦

釋迦と云ふいたづらものが世に出でゝ、多くの人を迷はするかな、

○飲酒

酒と云ふいたづらものが世に出でゝ多くの人を迷はするかな

○苦樂

極樂と云ふ正月に油断すな、しわすと云へる地獄月の前、

○老人元祖

今朝むかふ鏡に老をしるゝ餅、かまれぬものとまらぬ爺も、

○正月

門松は冥土の旅の一里塚、目出度もありめでたくもなし、

○萬里同風

餅つかずしめかざりせず松立てず、斯かる家にも春は來にける、

○生死事大

生死事大のがれないぞよ諸人よ、きのうの夢のけうもさめぬば、

○明生明死

夢に死し夢に生るゝ朝寝坊、さめて苦をする釋迦よりはまし、

○詠葡萄

佛道にちかきぶどうのたな心ろ、合せてたのめ珠數の一房、

○如是本末究竟等

なく聲を禱どはきけど尾をみては、しりか頭か如何でわくべき、

○如是躰

受け得たる質の着物にまかせつて、身は夏冬のすがたどぞなる、

○不妄語戒

恐ろしや狩人よりもうそつきの、から鐵炮をうてる罪どが、

○不偷盜戒

垣ごしにながむるとても香にめでし、主ある梅の枝を手折るな、

○寄貳

世をいどう身にも貳はすみ染めの、衣のたまご珠數つなぎなり、

○極樂

ごくらくは眉毛の上のつるし物、あまり近かさに見付ざりけり、

○短者短法身

事足らぬ身をな恨みぞ鴨の足、みじこうてこそ浮む瀬もあれ、

○鶴無常

限りあれば羨やまれたるよはらさし、今さら何と千年のつる、

○無常

人の身はせどのはたけの雪佛、消えて残るは名ばかりにこそ、

○四大分離

かりのせの地水火風をもどすなり、これで五りんの差引もなし、

○辭世

この世をばどりや御いとよにせんこうの、烟となりて灰左様なら、

○白髮

世の中のくろくろ爲るほど白うなる、かみのわざこそ不思議なりける

○無爲安樂

笛吹かず太鼓たゝかず獅子舞の、あと足になる心安さよ

○順後次受

桃栗は三年かきは八年の、なかにもすもゝ八十とせの春、

○知足

徳とらず損をもせざる營みは、苦にもならねば樂と思はず、

○千差萬別

世の中に駕をかく身もかゝるゝも、肩のいたさも腰のいたさも

○商人極則

世の中を樂に行かうと思ふなら、足で杖つき兩手で歩め、

○勤勉

踏めたゝら踏めくたゝら踏めたゝら、踏めくたゝら踏ら踏めく

○多慮小實

武藏野に草はしなゝ多けれど、つみなにすれば扱もすくなし、

○弱能勝強

たをされし竹は朝日に立のぼる、倒せし雪はあとかたもなし、

○親不孝

あらためて孝を盡すも不孝なり、大事の親の膽や潰さん

狂言

- 言行矛盾 死にたいと云ふ婆々の背中に灸だらけ、
- 真忘一如 田の草を採つてふみこむ稻の肥、
- 方便假設 すりばちを覆せて坐頭に富士の山、
- 多言過失 口あいて五臓をあらはすあくびかな、
- 常在靈山 かたつむり何處で死んでも己が家、
- 煩菩不二 恐ろしき氷のつのも元とは水、
- 多能損身 驚や樂を思はし下手に鳴け、
- 安然自適 しぶ柿はゆたかに秋を送りけり、
- 着目不直 手はつけど目は上につく蛙かな、
- 忍辱修行 さからわぬ柳にこまる春あらし、
- 心猿難制 心得て居ながらすべる雪の路、

- 悟了無異 悟りてもまろき頭の夜さむかな、
- 天候惱人 ながあまは却つて人のあごを乾し、
- 耶蘇救徒 嗚呼免のひんてき耶蘇の門に入り、
- 貧富隔絶 電氣燈たみの貧苦は照らされず、
- 放逸懈怠 吾がものと思へど重し下女の臂、
- 萬法歸一 千なりやつる一とすじの心なり、
- 照顧脚下 行き過ぎて駿河たづぬる霞かな、
- 描虎類猫 虎かはい猫かさやうさ下手な畫師、
- 言行相違 へび喰ふと聞けば恐ろしきじの聲、
- 精進勇猛 勢出せばこうる暇なし水車、
- 食客意中 食客こめのうわさで苦がい顔、
- 溺色破産 けいせいの涙で土藏の屋根がもり、
- 度量狭小 つまらぬと云ふは少いさな智恵ぶくろ、
- 人心輕浮 死に切りて嬉れしうなる顔二つ、

- 無畏安然 辻切りを見ておわし升地藏尊、
- 所變品變 商賣も國と江戸とは雪と炭、
- 一視同仁 雪の日やあれも人の子樽ひろい、
- 平等一視 約束をちがへぬ紺屋おはれなり、
- 少物珍重 初がつ魚くすりの様に賣りさばき
- 信仰一端 初ものが来ると持佛がちんと鳴り、
- 習氣尙存 還俗は爲ても何處やら志ゆしやうなり、
- 黄金勢力 花嫁のほうそうよけは持參金
- 親爲子藏 出されたを出て来たに云ふ里の母、
- 自 惚 愛相のよきを惚れられたと思ひ、
- 善心不久 あの後家の珠數でふつたは初手の事、
- 新月衰姿 三日月はやせて出るはず病みあがり
- 天網不遁 食ひにげの蚊にくもの巢の天のあみ、
- 功用不同 釜の湯は茶にも酒にも自在鍵、

- 佛誕生月 馬鹿和尙うるう四月にまたあまちや、
- 謙卑自讓 高く居て卑く持ちたし人の腰
- 傍人有眼 高見から見れば曲つた路は知れ
- 方便兩舌 通辭する二枚の舌は罪ならず、
- 愛念難去 捨てに來た子を抱きもどす雨もよひ、
- 無情説教 あさがほは子に朝起を教へぐさ、
- 回光返照 かいり見よ吾が身に見えぬうしろ指
- 處世用心 やわらかく固く持ちたし人ごころ
- 一齊聳耳 路問へば一度に動く田植笠、
- 錦衣歸郷 ふるさとへ歸へる錦のはいひろさ、
- 食客 身のはいもせまし借り着の居さうろう、
- 多 辨 口に花咲かせる人に實はならず、
- 我田引水 己が田に水ひきたがる村會議、
- 浮雲快樂 榮耀もたのめず目先で散るはなび

- 女色可畏 けいせいの笑凹は深きちとし穴、
- 放蕩破産 二上りのぼせて身代三下がり、
- 寡婦不貞 艶のある後家のかづらに花が咲き、
- 一心萬法 杯洗の中にも秋の月一つ、
- 放蕩子 汗水で親はたくわへ子はゆみづ
- 心地迷暗 電氣燈こゝろの暗は照されず、
- 噴 恚 眼をまるく爲ると言葉に角がたつ
- 少欲知足 焚くだけは風が持て来る落葉かな



都々逸

○眞忘隔歴

断れてばら／＼扇のかなめ、主のたよりが無いわいな、

○不一不二

初雪にしほやころんで、あちら管めたり又こちらなめ、

○不能辨別

闇の夜にたどん落して、あちらさぐり又こちらさぐり、

○唯識所變

ほれて見りやこそ目つちやもいくぼ、切れてしまへば綱杓手、

○斷惑證理

ほかの草木がしほれてのちに、松の操がよく知れる

○轉凡入聖

人の出世は知れないものよ、襤褸も末にはかみとなり、

○修因感果

盡くす辛苦のまことが見へて、漸つと泥から咲く菖蒲、

○法住法位

花は上野かながめは墨田、月にふせいは待乳山、

○表裏反覆

笑つてかなしい座敷にかへて、泣いて嬉しい主の居間、

○人心難信

底の見へ透くあの薄ごうり、解けたようでも有るへだて、

○赤心片々じれつたい程氣をもみの切れ、赤い心を見て知らず、

○妄念難止

思うまいぞへ最ふ思はずと、思へばおもはず思ひ出す、

○現在地獄

羅生門より三十日がこわひ、鬼が金札とりに来る、

○金之勢力

三井の鐘より三ツ井の金を、呉れりや私しも權となる、

○變遷難計

遷りかわりは偕て計られぬ、今じや晦日に月看する、

○一得一失

雪を看るには便利だけれど、人目にや否やだよ硝子窓、

○多慮不如少實

造り上手で咲かせたよりも、いつそ野末のみだれ咲き、

○一心不亂

寝ても起きても立つても居ても、歩るく時にも主のこと、

○精進不退

夕日に照らされ時雨に降られ、すへは錦を着る紅葉、

○因小果大

たつた二つの笑窪にはまり、今じや諸方に穴だらけ、

○置位轉倒
人に意見もしかねぬ人が、人に云はるゝ此の始末、

○時節因縁
せかずとち待ちよ時節が来れば、咲いて見せませす床の梅、

○浮雲快樂
一寸眺がめりや奇麗だけれど、末の頼みにやならぬ雲、

○内外反對
色にほだされ取つては見たが、否やに成つたよ濛い柿、

○離合難期
竹に雀は中よいけれど、切ればかたきのきざし竿、

○飲酒過失
酒は悪いと云はれる筈よ、樽と裸とこもかぶり、

○苦樂反應
はやく寝よとのうれしい鐘を、明けに差引く時の鐘、

○不退信心

思ひ出す様じやまだ信うすい、思ひ出さずにはわすれずじや、

○第六意識

直ぐな心を思案でまげろ、まげにや曲らぬ吾が心ろ、

○貪欲僧侶

からず鳴きでも死にそなものよ、明けくれ御布施のことばかり、

○紅顔難止

馬鹿にしゃんすな梅ぼしとやとて、黄鳥なかしたこともある、

○行路難

月にむらくも花には嵐、ほんに浮世はまゝならぬ、

○生死關

虎は千里のやぶさへ越すに、生死ひとへがまゝならぬ、

○唯心

己が羽風に鳴子をならし、獨りで氣をもむゝらすいめ